
鬼の子達は挽歌を謡う。【イナズマイレブン・オムニバス】

煌はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の子達は挽歌を謡う。 【イナズマイレブン・オムニバス】

【Nコード】

N5771U

【作者名】

煌はじめ

【あらすじ】

『変えようぜ…世界を。俺達の手で、必ず』

上層部のミスで、追い

込まれたオーガ小队。増える犠牲者、不安と不満を溜め込む兵士達。血で血で洗う戦場で、ついに悲劇は起きる。その時バダップは、エスカバは、ミストレは。幼いオーガの少年達は、どんな決断を下すのか。

同作者の連載作品『ブレイブ・ハート〜戦士よ、誇り高くあれ〜』より前のオーガの前線での戦いを描いた表題作、『鬼の子達は挽歌

を謳う』を始めとしたイナズマイレブンのオムニバス。原作設定、白翼設定、ブレイブ設定の話をシリアスからギャグまで詰め込んでいきます（場合によってはまだプロット段階の長編の一部を放り込むかもしれません）。遊戯王や爆丸などのクロスオーバー話もちよろつとあったり。少しでも皆様のお暇つぶしになれば幸いです。

はじめに。

こちらはイナズマイレブンの二次創作小説になります。公式とは一切関係のない、いちファンの非公式作品となっております。よって作品によっては以下の事にご注意下さい。

☆同作者の連載作品『この背中に、白い翼は無いとしても』や『ブレイブ・ハート』戦士よ、誇り高くあれ』の要素が含まれる場合があります。

☆上記二作品に出て来るメインオリキャラ（桜美聖也やアルルネシア）が出て来る場合があります。

☆それ以外のオリキャラ（あくまで脇役として）が出て来る話もあります。

☆基本的に捏造万歳。あえて公式設定を無視している場合もあります。

☆話によってはR15レベルのグロ、流血、死ネタが含まれます。

☆話によっては恋愛描写が含まれます（BLやGLを書く予定は今のところありません）

☆話によっては馬鹿馬鹿しいギャグ&酷いキャラ崩壊もしてたりします。

☆直接の性的描写はありません。が、それを示唆する描写は出る可能性があります。

以上を踏まえて大丈夫な方のみ、本文へお進み下さい。注意書きを無視&お読みにならない方の苦情はお受け致しかねますので予めご了承下さいませ。

鬼の子達は挽歌を謳う。【前編】（前書き）

こちらは連載作品『ブレイブ・ハート』戦士よ、誇り高くあれ』の番外編になります。劇場版『イナズマイレブン』最強軍団オーガ襲来』より前。戦場での、オーガの話。残酷描写・流血描写、及び暴行未遂描写があります。苦手な方は閲覧をご遠慮下さい。

鬼の子達は挽歌を謳う。【前編】

どうせまた悪い報せだ。

エスカバは分かっていたが、聞くしかなかった。なんだかんだで自分の地位は准尉。戦場においては下の者が山ほどいて、彼らに的確な指示を出さなければならぬ。

「先程の戦闘において：ナルチ曹長及びカルツ一等兵が負傷：シュバイツ軍曹は死亡が確認され、ブライン三等兵は：」

報告をしに来た年若い歩兵は、そこで言葉に詰まる。彼はエスカバよりは年上だったが前線経験はほぼ皆無だった。まだ新兵と呼んで過言ではない。にも関わらずいきなりこんな修羅場に送り込まれるだなんて、ツイてないとしか言いようがなかった。

ご愁傷様。次はマシな上司がつくよう祈ってるよ。エスカバは心の中で呟いた。

「分かった。：状況は聞いている。ブライン三等兵の生存は絶望的だろう。：あの状況でよく生きて帰ってきてくれたな」

「あ、ありがとうございます、サー：！」

「とりあえず休め。今日はもうあちらも展開して来ねえだろうし」

「サー、イエス、サー！」

歩兵を送り出し、エスカバはため息をつく。生きて帰る事こそ兵士の第一条件。新兵にも関わらず、軽い怪我だけで生還してくれた。今はそれだけで有り難いと思うべきだろう。

玉砕だの、特攻大和魂だの。敵に一矢報いて死ぬ事が美しいとされた時代もあったらしい。大昔の事だ。今では考えられない。敵にかすり傷をつける為に毎回誰かが死んで何になるというのか。兵士は駒だが人形ではない。優秀な兵士に幾らでも代えがいると思ったから大間違いだ。

「スターダストM2型。：あんな地雷、どこから流れて来たんだか」

ため息を押し殺すエスカバに声をかけてきたのはミストレだ。その手には珈琲が入ったカップが二つ。彼なりの気遣いだろう。あーでもないこーでもない議論中の司令官達に報告してきた彼も相当疲れがたまっているだろうに。

有り難い事だ。普段は毒吐きだが、一番大変な時に気が利くのが、ミストレの良いところだった。

「スターダストシリーズだったのかよ、あれ」

「みたいだよ。あれの爆発は独特だから。もうどの国も企業も作ってない筈なんだけど」

エスカバは何度目になるか分からない溜め息をつく。

先程の戦闘――最初は自軍が押しているように見えたのだ。だがこの地域はあちらのテリトリー。地の利がどちらにあるかと言えば明白。いつの間にか地雷原に誘い込まれて、B小隊のメンバー数名が巻き込まれた。

地雷の真上にいたブライン三等兵。確かにまだ日の浅い兵ではあったが――パニックになり、地雷を踏んですぐ足を離すなど論外である。多くの地雷は踏んだ足を離れた時爆発する仕組みなのだ。それで仲間を巻き込みバラバラの肉片になったのではどうしようもない。

そもそもこのミッション。構成にも指揮官にも作戦にも問題ありありだったのだ。今それを愚痴ってもどうしようもないけれど。

「一番可能性が高いのは：旧ソ連か。スターダストに欠陥が見つかるまで、一番ご執心だったし。世界大戦後、世界政府が禁止命令出してすぐ、大量に武器が流出したもんな」

今はもうとうに使われてない筈の外国の地雷。それがまさかこの

国にまで入ってきていたなんて――まったく世も末である。つい数十年前まで戦争放棄を謳っていたとは思えない。

「北って可能性もあるでしょ。連中、あっちの国とも繋がってたって噂だし」

「まだ未確認情報だけだな。…単なる噂である事を切に願う。あの国とこれ以上モメたくねえ」

「右に同じ」

なんでたかだか十四歳の自分達が、政治の心配までしてるんだかと思う。だがこんな場所にいと、つい余計な事まで考え過ぎてしまふ。時間は限り無くあり、されど限り無くない。明日どこるか今日生きてる保証もない――それが、戦場。

国際テロ組織、アバンチュアの壊滅。それが今回自分達に課せられた任務だった。

我が国の陸軍、総勢七百人動員。オーガ小隊は半ば保険のような存在だと言われていた――實際上層部はそうやって戦況を楽観視していたのだろう。

だが蓋を開けてみれば。

作戦を任命された司令官達は無能揃い。ついでのアバンチュアは地形を利用して、徹底抗戦の構え。さらには想定より遥かに大量の武器や兵器を所持していた。地雷などはその一部に過ぎない。

七百いた筈の兵は既に二百そこそこ。消えた五百人の半数以上がバラバラに吹き飛んで遺体すら回収できない有り様である。

「ダイル中將が総司令……って聞いた時点で嫌な予感してた」

ミストレが心底忌々しげに吐き捨てる。

「あのブタ親父。何人味方を無駄死にさせれば気が済むんだよ」

彼の暴言は今に始まった事じゃない。その口の悪ささえなければ、

見目麗しい美少年で通るのに――と何度思った事か。だが、いつもなら諫めるエスカバも、今日ばかりは同意したい気持ちでいっぱいだった。

ブライアン・ダイル中将。

知る人ぞ知る、“最低な上司”の代名詞だ。彼が指揮するミッシェンなど最初からお断りしたかったが（少なくともオーガ小隊は全員そうだったに違いない）そうもいかないのが縦社会、そして軍である。

金はある。しかし知能も度胸も技術も、ついでに言えば容姿さえ皆無な男だった。ぶくぶくに太った赤ら顔から、裏では“赤ブタダイル”なんて呼ばれている――ああ、しかしそう呼んだら寧ろ豚に失礼ではないだろうか。

金と上への胡麻播りでのし上がったと専ら噂だった。能力も能力だが性格も最悪である。弱い者には上から当たり散らし暴言罵声は当たり前。強い者には靴を舐めんばかりにヘイコラ。ヒビキ提督に対する気持ち悪い猫なで声は、思い出ただけで吐きそうだ。

さらには女癖が最低で、金にあかせて何人も愛人を囲い、風俗三昧。もっと最悪な事にはペドフィリアの気もあるようで、王牙学園の生徒にも何度も手を出しているという。

ここだけの話。危うく手を“出されかけた”被害者が、今エスカバの目の前にいる。

「…あいつを視界に入れるだけで苦痛なんじゃねえの、ミストレ」

見た目だけで充分生理的嫌悪の塊だったが。ミストレにとってはそれ以上にキツかった筈だ。彼は前に一度、軍の施設の廊下でダイルに乱暴されそうになったことがある。偶々現場にヒビキ提督とバダップが通りかからなければどうなっていたか。

セクハラも怖い、自分達にとってはパワハラも怖いのだ。権力を翳して脅されてなければ、ミストレも奴の汚い股間を蹴り飛ばし

て逃げられただろうに。

エスカバの言葉に、ミストレは皮肉たっぷりの笑みを浮かべた。

「そりゃ勿論。見るどころか名前聞くだけで吐き気がするね。可愛い女の子に押し倒されるなら歓迎するけど、誰があんな汚ねえオッサンにやられたいもんか」

でもオレそんな柔じゃないから、とミストレは言う。

「トラウマとかはないよ。超ムカついてはいるけど。ぶっちゃけ、この人生で珍しいことでも無かったしさ。いやはや美しいって罪だねー」

「なんだそのねじ曲がったポジティブ。うっとりすんな頬染めんなキモいぞナルシスト」

「なに嫉妬してんの？女っ気ゼロのエスカ君」

「喧しいわ！」

シリアスな会話も、軽口の応酬が出来ればいつも通りだ。寧ろジョークを飛ばしていられるうちはまだ自分達は大丈夫だと分かっている。

そう。まだなんとかなる。どれだけ敵が強大でも、味方の屍が積み上がっていても、上司が無能でも、悲劇ばかりの戦場でも。

自分達はまだ、戦える。まだ絶望に、負けてはいない。

「ミストレ、エスカバ」

真面目さが滲む、規則正しい軍靴の音。声をかけられる前から彼だと分かっていた。エスカバはコップを置き、テントに入ってきたバダップを振り返る。

「司令部の方針が一応決まった。明日は朝一で偵察を出す。まだメンバーは未定だが高確率でオーガから出される事になるだろう」

「お疲れさん。…やっこさん達、やっと俺らを使う気になったか。」

「遅すぎだっつの」

「まったくだな」

バダップには珍しく、苛ついた口調で同意してくる。余程疲れたのだろう。頭の堅い司令官達をうまく軌道修正しながら会議に参加するのは、恐ろしく労力がある事だ。オーガ小隊の隊長である以上、これも宿命なのだが。

「どっかの馬鹿が捨て石作戦を無理矢理推そうとするので全力で止めてきた。おかげで逆上されて宥めるのに苦労した」

「うわあ、ご愁傷様」

どっかの馬鹿、は十中八九ダイル中将だろう。自軍被害がここまですで拡大した原因の大半は奴の作戦のせいである。慎重に包囲、もしくはオーガを使ってサイドアタックで奇襲をかければ、もう少しマシな結果が得られただろうに。

このミッシェンで、オーガは殆ど後方支援ばかりだった。ダイル中将が自分の手柄欲しさに、自らが連れてきた本隊を全面に押し出してきた為である。戦績優秀なオーガを疎んじているという噂もあった。おかげで自分達の中ではまだ誰一人手傷を負った者はいない――いないのだが。

オーガならばクリアできたかもしれぬ戦場で、ダイルの部下達が何百人も犠牲になった。先程報告しに来た歩兵もダイルの部下である。上司に恵まれなかった不運を、彼らは嘆いても嘆きれない事だろう。

「…少しは、変わるといいんだけどね…戦況」

ミストレが疲れた顔で俯く。

「偶に…偶にだけど。思うんだよね。オレ達って、一体何でこんな事やってるんだろう。何やってるんだろう…って」

珈琲の香りに混じって、彼からは血の匂いがした。手を、足を、吹っ飛ばされ。内腑を潰され、骨を碎かれ、爆炎に全身を焼かれ爛れて。

そんな兵士達をずっと救護していたミストレ。今日だけで、彼の目の前で何人が死んだことか。

「世界を、変える為だ」

迷い、落ち込みかけたエスカバとミストレに。バダップは凜とした声で言った。

「自分達が正しいと、信じる方へ。世界を変える為。俺達が、俺達の大切な人達が幸せになれる世界にする為だ」

「バダップ…」

「だから俺達は、人を殺す。それが正しくなくとも、正しいと信じて」

道標。

彼の言葉はまさしくそうだった。

「血で血を洗い流し、誰かの正義を踏みにじり、偽善を貫き通すのだ。…いつかこんな事をしなくても済む日が来るように」

バダップの紅い眼に、射抜かれる。彼はただ真っ直ぐ、この国に行く先を見据えているのだ。

それがどれだけ、血に塗れた修羅の道だとしても。

「…お前はいつも…綺麗な事は、言わないのな」

つい、笑みを零しながらエスカバは言う。

上の者達の多くが言う——自分達は正義であり、平和の為に悪を滅するのだ——という謡い文句を彼は言わない。自分達の正義が誰

かにとっては悪であると認め、その上で信念を貫こうとする。

「だから：お前を信じてんだ、俺達はよ」

「だね」

そんなバダップだから、自分達は安心してついていけるのだ。自分達はこの戦場で唯一“上司に恵まれた”兵なのだろう。

エスカバは束の間、幸福感に浸ったのだった。

鬼の子達は挽歌を謡う。【中編】

呼び出しを受けて、バダップはまたテントを出ていった。

去り際の背中にさりげなくミストレは眼を向けて、小さな罪悪感に見舞われる。

自分達は、本来ならばまだ充分子供と呼べる年だ。

バダップを呼びに来た大人の兵士と比べれば一目瞭然である。兵士の巨軀と厚い胸板、鍛え抜かれた二の腕に比べて、バダップの身体なんと華奢な事だろう。自分やエスカバを並べても同じ事が言えるだろうが。

小さな背丈。

細い肩。

折れそうな首に手足。

けして広いとは言えない、痩せた背中。

にも関わらず、強烈な生と死の狭間に放り出されている自分達。特に小隊長として、バダップの負担は計り知れない。無論自分達も支えているつもりだが、フォローには限界があるのだ。

いつか潰れてしまうかもしれない。それなのに、凜と背筋を伸ばして戦い続けるその理由。

彼はそれを、世界を変える為だと言い切った。

なんて強いのだろう。一瞬強烈な嫉妬を抱き、それはすぐに眩しいばかりの羨望に塗りつぶされ、やがて誇らしさへと変わる。ミストレにとってバダップはそんな存在だった。その才能と強さは妬ましいけれど、それ以上に惹きつけられて離れない。そんな彼が隊長である事に優越感さえ抱くのだ。

――今はまだ：二番でいいよ。

一番でありたい。バダップを追い越したい。その願望はありなが

らも、ミストレは思うのである。

――君に続く二番なら：悪くない。

エスカバはどうかのかな、と思って彼を見る。自分とエスカバがバダップに向ける感情は、同じ尊敬でもきっと違う。

少なくとも彼はバダップに対し、劣等感の類は抱いていない筈だ。彼はもはやバダップを自らに対する比較対象から完全に外しているようだから。

「よお、お前ら」

「あ」

バダップと半ば入れ違いにテントに入ってきたのは、ジョーンズⅡブラック曹長。健康的に焼けた肌と細身ながら鍛え抜かれた筋肉、見上げる長身に、スポーツマンのような爽やかな顔立ち。自分達より七つばかり年上の兵士だった。

彼は長年、ダイル中将の下につきながらも生き残ってきたツワモノであり。気さくで年下や後輩にも偉ぶらないところから、皆の兄貴分として人気のある人物だった。

「今日も今日とて散々だったよなーごくろーさん。仮眠とれって言われてねえの？」

「残念だがジョーンズ、俺達にはまだ書類という名の敵が残ってるんだ」

「わお、掃討作戦中だったか。こりゃ失敬」

明るい笑顔で軽口を飛ばすジョーンズ。しかし頭と腕には生々しく包帯が巻かれている。

彼は今日罨にかけられたB小隊メンバーの一人だった。地雷を踏んだ兵士からは離れた場所にいたため、爆風に飛ばされただけで済んだのである。小隊がほぼ壊滅した中、この程度の傷で済んだのは奇跡だっただろう。

だが――重要なのは身体の傷では無い筈だ。彼もまた歴戦の兵士。

何度も戦場を生き抜いてきているに違いないが、それでも。

「…大丈夫？」

仲間が目の前で血と肉の塊になった。内臓を撒き散らしながら吹っ飛んだ。その光景を間近で見て、トラウマにならない筈がない――恐怖でなかった筈がない。

それがどれだけ珍しくない光景だとしても。

「何、ミストレちゃん心配してくれんの？ やっさしー！」

ニツカリとジョーンズは笑う。

「ダイジョーブダイジョーブ！ ジョーンズさんってば頑丈と絶倫がトリエなんです。オツケイ？」

「十四歳相手に自主規制単語使うなってば」

「あれまごめん遊ばせ、君たちがまだお子様だってこと、お兄さん忘れてたわー」

「こっちこそ、ジョーンズさんがいい年の大人だって忘れかけてたよーあはは」

「ミストレちゃん、笑顔が眩しすぎてこあいよう」

大丈夫って尋ねた本当の意味が、分からなかったわけではなかっただろうに。

きつと本当は――大丈夫などでは無かったのだろう。それでも笑っているのだ。絶望を、吹き飛ばそうとするかのように。

「そーいや司令部、すんげー揉めてたのね。ダイル中将マジギレしてたし」

ジョーンズが妙に早口でハイテンションなものもそのせいだろう。スラングで怒鳴りまくってたぜ、と身振り手振りで力説する。

「うわ、立ち聞きしたのかジョーンズ」

「違うわよ！…あんなに騒いでちゃ通りかかっただけで丸聞こえだっつもの」

「そのままドアの前で話聞いてたんなら充分に立ち聞きだと思うよ？」

しかしそんな修羅場だったのか。ミストレは、バダップの疲れきった顔を思い出す。

「確かにダイル中将の作戦は無茶だったけどよ。バダップの奴も流し方ヘツタクソだよなあ。会議長引かせたの、半分はあいつのせいじゃね？」

ミストレは思わず顔をしかめる。

ジョーンズの事は嫌いじゃない。寧ろオーガ以外の兵の中では好きに分類される、数少ない人間だ。

だが一つだけ不愉快な事があった。

彼はバダップを嫌っていた。それも、もの凄く。

「やめてよ、そういう言い方。一応オレ達の隊長なんだから」

「一応、だろ。…能力からすればミストレ、お前のがよっぽど器だと思うぜ。ヒビキ提督もなんであんな奴を過大評価すんだか」

言葉の端々から滲み出す毒。一体何が理由なのだろう。

「何でそんなにバダップを嫌うんだよ、ジョーンズは」

見かねてエスカバが尋ねる。図らずもミストレの意を代弁するかのよう。

「だって、ムカつくじゃねえか。てめえが一番で当たり前、最前されて当たり前って顔しやがって」

本気で嫌いなのだろう。さっきまでの明朗さから一転、唾を吐か
んばかりに罵倒するジョーンズ。

「特にあのすましたお綺麗なツラ！滅茶苦茶にしてやりたくなるな。
あいつを跪かせて泣きわめかせたら、どれだけスカッとするかって
思うぜ！」

「だから！やめてってば！！」

「おーおーやめるやめる。奴の話なんかしてたら益々気分悪くなる
だけでもんなあ」

バダップの悪口を言った事に対し、謝りもしない。ミストレは頭
が痛くなってため息をついた。これさえなければ、人当たりの良い
好青年で通るというのに。

「俺あそろそろ寝るわ。聞いた話じゃ、明日朝一で前線に放り出さ
れる事はなさそーだしな。ぶっちゃけ疲れた。マジ疲れた」

やや不機嫌そうにがしがし頭を搔くジョーンズ。機嫌が悪くさせ
られたのはこっちだと言いたいが、前線帰りで負傷している彼にそ
う言うほど鬼ではない。

お疲れ様、と声をかければ、彼は手を上げてテントを出て行った。
愚痴とほんの少し気を紛らわせたい、ただそれだけの用件だったの
だろう。

常にストレスが溜まっていて、はけ口を探している。それは此処
にいる全員が同じだった。中には既にセルシヨックから始まるPT
SDで錯乱状態になる負傷兵もいる。彼らに比べれば自分達はマシ
なのだ。そう思うしかない。

「荒れてんな、ジョーンズも」

「うん」

残った珈琲を飲み干して言うエスカバに、ミストレも同意する。
ジョーンズは確かにバダップを嫌っている。だがオーガ小隊に属
する自分達の前で、長々と愚痴を言う事は滅多にない。それぐらい

の配慮はできる男だ。

それが――あんな言い方しか出来ないとなれば。

「何にも起きなきゃいいけど……な」

エスカバの呟きに、ミストレは何も言えなかった。彼が何を危惧しているかは明白だったから。

高ストレス状態の集団は、ちょっとしたきっかけで瓦解しやすい。戦場なら尚更で、それが仲間内の暴動や暴力に繋がる事もある。そんな場合でないと誰もが分かっているながら、感情が理性を超越してしまう瞬間もあるのだ。

「杞憂であれと、願うよ」

いつまでも、どうにもならない悩みで立ち止まっている訳にはいかなかった。今前線は安定しているが、それでもいつ何が起こるか分からないのが戦場だ。夜中にベースに奇襲をかけられて壊滅した話など腐るほどある。

そして自分達は悲しいかな、まだまだ裏方仕事も残っている訳で。ある程度の緊張感を保ちながら、そちらを片付けなければならぬ。既に正式なフォーマットになってない紙面に目を通し、ミストレは深くため息をついた。

「あと五日……か」

補給が滞っている。陸路を完全に抑えられてしまったのが最大の原因だ。食糧はまだなんとかあるが（皮肉にも大量に死者が出て必要量が激減した結果だった）、薬はそうもいかない。このままの状態が続くと、早ければ最悪あと五日で尽きるとの予想だ。

そしてそれもこの戦闘の前の見解である。地雷で手足を吹っ飛ば

された兵士達に、殊に鎮痛剤を大量に使ってしまっている。もう一度在庫整理をしなければなるまい。

「…救護所、行ってくる。エスカバは無線の方見てきてよ」

「りょーかい」

お互い大変だねえ、とエスカバが笑う。明らかに疲れを隠そうとして失敗した笑み。自分もきつと似たような顔をしている事だろう。

「本当に、ね」

何も起こらなければ、いい。否、頼むからこれ以上何も起こらないでくれ。

ミストレはそう願っていた。残念ながらその危惧はあっさりの中する事になるのだけれど。

書類やらなんやらを片付け、ミストレが漸くベッドに入れてから三時間後。知らせを受けたサンダユウが血相を変えて自分を叩き起こしに来た。

「ミストレ！ミストレーネ！起きてくれ、大変だ！！」

「んー…」

敵襲があれば自力で跳ね起きる自信がある。だが、私生活においてミストレの寝起きは最悪であり、朝は壊滅的に弱かった。いつも本来の起床時間の三十分前から、五分刻みでアラームを鳴らし続けるほどには。

戦場ではさすがにそこまでヒドくはないが――不機嫌である事に

違いはない。それをよく知るサンダユウは一瞬怯んで、しかしすぐ体制を立て直した。

「眠いのは分かる！非常によく分かる。だがしかし起きてくれ頼むから！」

「うん、分かった。：とりあえず落ち着いて話そうか」

女性だったなら金切り声になっていただろうサンダユウの有様に、煩い黙れと怒鳴る気も失せる。それに本当に異常事態なら此处で彼と揉めているだけ命取りであり時間の無駄なのだ。

何があったというのか。前線の音はしない。となればとりあえず敵襲ではなさそうだが――。

「バダップが昨日出てっからいつまでも戻って来ないからよ：司令室に様子見に行ったんだ。そしたら：」

ミストレの眼は完全に覚めた。ベッドから飛び降り、サンダユウを押しのかんばかりの勢いで外に飛び出す。すぐそこで、ジニスキーに連れられたエスカバとぶつかりそうになった。誰の顔も真っ青だ。

『何にも起きなきゃいいけど：：な』

昨夜のエスカバの声が蘇る。それは恐れていた事の前兆だったのかもしれない。

異変に気付いたのはまだ自分達だけだ。だから激しく足音を立てる訳にはいかない。静かに走り、司令部に近づく。匂いがした。強烈な鉄――生と死の狭間にいる者ならば誰もが悲しいほど慣れ親しんだ匂いが。

「バダップ！」

その名を呼びながら飛び込んだ。
真っ赤に染まった景色の中へ。

鬼の子達は挽歌を謡う。【後編】

綺麗、と。最初に思ってしまった己を人として、軍人として恥じるべきだろうか。エスカバはしばしその場に立ち尽くした。真っ赤な景色の中に立つバダップの姿は美しく、幻想的ですらあったから。司令室は血の海だった。筋骨隆々とした二の腕が机の下から突き出している。その横には髭面の大男の醜惡な死に顔があった。目玉をひっくり返し、舌を突き出し、泡を吹き。割れた頭から脳味噌がはみ出している。

床に“転がって”いるのは見知った顔ばかりだ。一つ二つ三つ四つ――死体の数を数えているうちに気付く。殆どが司令官、もしくはその取り巻きばかりだという事に。

中にはあのダイル中将の遺体もあった。生前と変わらず、でっぷりした腹の中身をぶちまけた醜惡な死に様を晒している。

死体はどれも血と汚物にまみれた汚らしい有様であったが、だからこそバダップの姿に美を感じたのかもしれない。髪に、肌に、軍服に。血を浴びた彼はただ呆然と、悄然とその場に立ち続けた。

その手には彼の愛銃――ヘル・ブレイズ？型が。

「バダップ：何が、何があった？」

ここは自分が落ち着かなければ。そう思って尋ねたものの、声は情けないほど震えていた。

この状況。どう見てもそうとしか思えないこの有様。もし本当に見たままが真実ならば――軍法会議、では済まされないのではないか。

だが動機が分からない。自分がバダップを見送ってから数時間――その間に一体何があった。

「…上官の」

バダップはどこかぼんやりとした口調で、それを口にした。

「上官の戦場における死亡原因の半分は…部下に殺されたもの、らしいな」

それは。それはつまり。

エスカバが糾弾するより前に、バダップが何かを投げてよこした。反射的にキャッチして目を見開く。それは旧型のレコーダーだった。

「こうなる可能性が予想できなかったわけじゃない。だから万が一の時の為に…ポケットに入れておいたんだ。聞けば、分かる」

その中に証拠がある。そういう事だろう。

遺体をさりげなく検分していたミストレが小さく悲鳴を上げて名を呼んだ。ジョーンズ、と。

「まさか…!?!」

司令官達の遺体に混じってージョーンズⅡブラック曹長の遺体があった。心臓に一発の銃痕。即死だったろう。他のひひじじい共と比べればまだ綺麗な死体だったが。

「ジョーンズが」

自分達の疑問に答えようとするかのようにバダップが告げる。

「ジョーンズ曹長が俺を嫌っているのは知っていた。何故嫌われて

いるかは分からなかったが。：俺の方は：彼の能力は高く評価していたつもりだった。銃火器と無線機の扱いに優れ、人望もある男だ。：と」

だが、と彼は続けた。

「こればかりは：予想出来なかった」

エスカバは気付く。バダップの軍服の胸ボタンの上幾つかが弾け飛び、なくなっている事に。布地も破れかけている。そのせいでやや胸元をはだける形となり、いつもかっちりと着込む彼らしからぬだらしない様となってしまっている。

まるで無理矢理服を破られたみたいだ――と、そこで漸く思い至った。変態で有名だったダイル中将。その取り巻き。そしてバダップを心底嫌っていたジョーンズ――。

「：嘘、だよな？」

思わず口をついて出た言葉に、エスカバは自ら失望した。

何を否定しようというのか。確かに、ダイル達だけが死んでいたのならこんなに動揺する事も無かった。事実を受け入れる事は難しく無かっただろう。ただ。ジョーンズがそこにいさえしなければ。

彼がまさか――いくらバダップを憎んでいるからといって、そこまでののだろうか。あの気さくで仲間思いの男が。確かに彼はダイルの部下であり、権力に逆らえなかった可能性はあるにしても――。

いや。分かっているのだ、本当は。

もし彼の罪を認めなければ、バダップは罪もない彼らを大量虐殺したおぞましい悪魔である事になってしまう。地獄の射手と恐れられるバダップは、本来ならば他者を傷つける行為を良しとしない、

物静かで心優しい青年だ。ただ不器用なだけなのだ。彼を隊長と仰ぎ、間近で見てきた自分達が誰よりそれを知っているというのに。

「…昨日。バダップが司令部に呼び出されたのは…こういう目的だったってこと？」

ミストレがぼつり、と呟く。握りしめたその手が震えている。

「確かに…うちの軍に慰安婦なんかいないしさ。こんな状況で…ストレス貯めて暴走寸前な輩はいっぱいいただろうけど」

激しい声ではない。小さく、儚いその声には、飽和しそうなほどの感情が溢れている。悲しみ。やりきれなさ。怒り。苦しみ。

「だからって…バダップが邪魔だからって。この人数でよってたかって…バダップに酷い真似、しようとしたって…？」

「どうだろうな」

そこで漸く、黙っていたバダップが口を開いた。

「俺はそう判断したが…違ったかもしれないな。殴られたわけじゃない。押さえつけられて服を破られた時点で銃を抜いてしまったから」

「…間違っていないと思うよ、それ」

多分。バダップが認識できない分まで、ミストレは傷ついたのだろう。

その実彼はバダップ以上に似たような目に遭ってきた人間だ。先のダイヤル中将に襲われかけた件も然り。

だがミストレは自らへの暴力を怒りと感じても、傷つく事はない人間だった。腹が立つものは全部殴って黙らせればいい。それができないなら別の方法で報復してやればいい。それくらい彼の気性は荒く、見た目に反し男らしく勇ましかったのである。

だが。ミストレは自ら以外への暴力を――怒りだけで受け流す術

を知らない。それが出来ない。まるで自らが受けたかのように傷つき、痛みを受け取ってしまう。

彼の毒舌は自らを守る盾だった。要らない人間が安易に近寄って来れないように防ぐ為のものだった。近づく事を許してしまえば、その存在の数だけ痛みを受け取ってしまう自らの甘さを――優しさを知っていたからだ。

自分はバダップが大好きだ。同じようにミストレの事も大好きだ。彼らを同じチームの仲間として、親友として心から愛している。その気持ちに嘘偽りはない。

でも。こんな時、自分は絶望的な無力感と疎外感に苛まれるのである。

怖かった筈だ。悲しかった筈だ。にも関わらず自らの痛みさえも気付く事ができないほど、心を凍り付かせてしまっているバダップと。それを理解して、彼を想うがあまりに自らの胸に深い深い傷を刻んでしまうミストレ。

自分は彼らに対して、何もできやしない。ただ一つ出来ることがあるとすれば――ただ傍にいただけ。

「…辛かったな」

左手にバダップを、右手にミストレを引き寄せ、二人の肩を抱いて言う。

「…バダップ、ありがとうね」

エスカバに抱き寄せられたまま、俯いたミストレが言う。

「怖くて、嫌なの。我慢しないでくれて、ありがとう。ジョーンズには悪いけど自業自得だ。辛いのに…殺してくれて、ありがとう」

これ以上傷つかないでくれて、ありがとう。そう告げるミストレの言葉は重く、血塗れた室内を満たした。それはある者が聞けば憤慨する言葉だったに違いない。しかし今の自分達には、それが全てだった。

「無事で……良かった」

室内に転がる死体の数は、八人。全員が何らかの武器を携帯している。状況が状況なのだから当然だ。

それをバダップは一丁の銃だけで、無傷で纖滅してみせた。ヘル・ガンナーと呼ばれるほどのバダップの実力。普通の人間として生きていたならば必要なく、身につく事もなかっただろう人殺しの技術が彼を救ったのである。

変えなければ。

エスカバは今、強く思っていた。

変えなければならぬ。まだ幼い者達が手に手に銃を握り、人を殺す為に戦場へ踊り出すようなこんな世界を。バダップに、ミストレに、こんな想いをさせるような残酷な世界を。

『血で血を洗い流し、誰かの正義を踏みにじり、偽善を貫き通すのだ。…いつかこんな事をしなくても済む日が来るように』

「バダップ。ミストレ」

エスカバは呼ぶ。抱き寄せた二人の仲間を。

「サンダユウ。ジニスキー」

全てのなりゆきを見ていた二人の同胞を。

「変えようぜ：世界を。俺達の手で、必ず」

もう誰も傷つかなくてすむように。

涙にならない涙を枯らす日々が、終わるように。

幸せに、なれるように。

「無論、だ」

バダップが顔を上げる。醜い者達の血に濡れているというのに、凛としたその顔は美しかった。

「だから俺達は、此处にいる」

「…そうだな」

もう大丈夫だ。そう判断して、エスカバは二人から身体を離れた。まだ事態に気付いているのは自分達だけ。だが、全てを正直に離す他ないだろう。幸い物理的証拠がある。過剰防衛とされる可能性はあるが、軍法会議にかけられてもそう重い罪にはならないだろう。エスカバは退出する前に、一度だけジョーンズの遺体を振り返った。

――残念だぜ：ジョーンズ。

オーガの皆様ほどではないけれど。それなりに好きだった青年に、小さく別れを告げる。

――バダップに：あんた自身の感情に。もうちょい真正面から向き合ってりゃ、こんな事にはならなかっただろうに。

ほんの小さな黒い感情が。きっかけが。全てを奪い、そして根こそぎ壊していく。

「本当の仲間になれたのかもな。あんたにも：戦う勇気があったなら」

全てはもう、何もかも遅い仮定。

だからこそ自分達は前に進み続けなければならないのだ。

失われた全てを、無駄にしない為にも。

これは、チーム・オーガが、オペレーション・サンダーブレイクに参加する少し前の物語。

暴行されそれそうになり、やむなく殺害したという事で、バダップの罪は殆ど問われなかった。そういう場所だった。誰が死に誰が殺され、それが無視される事も厭わない場所に彼らはいた。

その任務において。司令部が壊滅し。ダイル中將が殉職し。残った数名の上官が指揮を引き継いだが、実質的に軍を動かして作戦を立てたのはバダップとオーガ小隊の者達だった。

彼らは明らかに不利だった戦局をあっという間に覆し、テロリスト達を掃討してみせた。後に国の歴史に残るほどの大勝利であったという。

世界を、変えたい。

少年達は強く願い、傷つきながら戦い続けた。そして方向性は違えど同じ願いを持っていたヒビキ提督に見初められ、あのオペレーション・サンダーブレイクの主軸に任命されるのである。

その先に待つものが悲劇か喜劇か。ハッピーエンドかバッドエンドかは誰にも分からない。無論、彼らが幸せであったかどうかなど彼ら自身以外に分かる筈もない。

だが結果として鬼の子達は巡り合い、気付くのである。自分達は挽歌ばかりなく、希望の歌を謡う事もまた出来るのだと。

『サッカー、やろうぜ！』

世界は動く。願いの導く方向へと変わっていく。
戦う勇気を知った者達の手によって。

チャリオット・パイル【長編試し読み】（前書き）

こちらは、連載作品『この背中に、白い翼は無いとしても。』の番外編になります。イナズマキヤラバンが奈良を経ってから北海道へ辿り着くまでの間の時間軸。鬼道達が立ち寄った病院が銃を持った男達に占拠されてしまうという、エセサスペンスな話です。

七月十七日の青春カップにて販売予定である、みいー様との合同本『遠い記憶。』に掲載予定の作品“チャリオット・パイル”の冒頭部分。よってWebで続きを掲載予定はありません。塔子×鬼道↑春奈の恋愛要素あり。最初はほのぼので全体的にはシリアスな感じですよ。気になる方は青春カップで本を購入下さると…嬉しいなと（宣伝かいな）。因みにコピー本なので決して高くはありません（笑）

チャリオット・パイル【長編試し読み】

運が悪い、では済まされない気がする。何故こんな事になってしまったのか。鬼道は内心頭を抱えていた。もう少し危機感と恐怖心を持って、と誰かから突っ込まれそうではあるが。鬼道有人十四歳。恨みつらみを一心に受ける帝国学園サッカー部の主将にして鬼道財閥の跡取り息子は、悲しいかなあまりにトラブル慣れしていた。

「騒ぐな！騒いだ奴からブツ殺す！！」

目の前では銃を持った三人の男達が喚いている。いかにも、な武装。いかにも、な悪人面。此処が銀行だったらさぞかし様になったのだろうに、悲しいかな此処は病院で、ミスマツチ感が拭えない。

結論。この診療所はたった今三人の男達に占拠されました。立てこもられたのが病院でもハイジャックって言うのかな、多分言わないよなーと現実逃避気味に考える。

まったく、どうして自分は今こんな目に遭っているのだろうか？

《チャリオット・パイル》

煌 はじめ

事の起こりは、二時間ほど前に遡る。

エイリア学園を倒すべく、地上最強のサッカーチームを結成する目的で日本中を旅するイナズマキヤラバンは、奈良で早速塔子を仲間にし、次なる目的地・北海道へと向かっていた。

豪炎寺が抜けた事で、チームは致命的に攻撃力が不足している。本来司令塔の鬼道が急遽FWに回される事もあるほどだから推して知るべしだろう。染岡一人で押し切れるほど甘い敵ではなく、目金では役に立つかがまず怪しい。新たなストライカーを探し出す事は急務であった。

そんな時、瞳子監督が持ってきた情報が、北海道にいるという雪原のストライカーの話である。吹雪士郎――別名、熊殺しの吹雪。彼を仲間にして、豪炎寺の穴を埋めようというのである。

問題は。その事に納得していないメンバーが多数いた事だ。

無理もない。豪炎寺は半ば瞳子監督に追い出されるような形でチームを去ったのだ。その直後にすぐ代わりを持ってこようだなんて反発を受けるのも当然である。ましてや瞳子監督は、豪炎寺を追いつ出した明確な理由を誰にも告げていないのだ。

鬼道や塔子は、財閥の家もあって（塔子の場合はSPという名の優秀な兵隊もいる）情報網が広い。ジェミニストームとのセカンドマッチから豪炎寺の様子がおかしいのは気付いていたし、彼が離脱した理由もおおよそ見当がついていた。しかし、それはあくまで自分達だからこそ知れた事実でもあるのである。

そして豪炎寺が脅迫されていた可能性があるのなら、軽々しく皆に吹聴する訳にもいかない（キャプテンなので円堂にだけは話したが）。歯がゆいところだが、皆の不和を解決する手段がないのが実情だった。

そんな時、春奈を始めとした数名が、病院に寄りたいたいと言いつ出したのである。

「…みんなの足を止めて申し訳ないんだけど。私の場合、早めに花

花粉対策しないとまずいんだよね…」

市販の薬では、強すぎて喉を痛めるらしい。早めに病院の薬を貰っておけば、症状自体を出さずに済む事もある。瞳子監督の許可も出たので、東京に寄ったついでに近場の小さな診療所に立ち寄ったのだ。

実は、案外大切な事なのである。

試合中にほんの一瞬集中力を切らしただけで命取りになる――エイリアはそういう相手だ。肝心な時に花粉症でくしゃみが止まらなくなったりしたら目も当てられない。幸い鬼道はこれまでの人生で花粉症になった事はないが、佐久間や洞面や辺見がいつも可哀想なくらい症状に悩まされていたので、辛さは多少理解できる。

「…壁山。お前椅子座るなよ。お前一人で三人分使う、絶対」

「き、鬼道さあん…！」

壁山が涙目になり、ついつい鬼道は吹き出してしまった。鬼道は壁山、春奈、塔子と共に保健証を出す。

土曜の午前。大隈医院は混み合っていた。狭い待合室は、なんとか人が全員座れるような状態である。お年寄りと親子連れが多いが、若い少年少女もいる。ピンク色の椅子の上に立ってふざけた男の子を母親が叱り、老婦人が知り合いと世間話に花を咲かせる。

あまり来た事はないが、耳鼻科・眼科というのは基本的にこんな和やかモードなんだろうか。確かに内科と違って風邪を引いた人間や深刻な病の人間はそうそう来そうにないのだけれど。

花粉症に縁のない鬼道が何故ここにいいのかといえば、別件で目薬を処方して貰う為である。昔から眼が乾きやすい体質で、定期的に目薬を貰いに来ていたのだ。やはり市販の薬は合わなかった為である。まだストックはあるものの、現状次来れる日がいつになるかは分からない。ついでに寄っておこうと思うのは当然の流れだ。

「一時間待ちだつてさ、鬼道」

ストン、と鬼道の隣に座り。ため息をつく塔子。

「タイミング間違ったかなー。北海道で寄ればもっとすいてたかも。寒いから花粉症被害者も少なそう」

「確かに」

「私、いつか北海道に住んでみたいんだよね」

鬼道を挟んで反対側には春奈。何故そんな腕にひつつきたがるのだろうか？

「一面の銀世界！ってちょっと憧れるもの。あとゴキが出ないってのもポイント高い！あれは人類の天敵よ！！」

まあ、確かに北海道は寒すぎてブラックGもないという噂がある。羨ましいのは間違いない。鬼道もアレは苦手だった――得意な人間がいるとも思えないが。

その実春奈の部屋はあまり綺麗では無かったりする。汚い、というより物が多すぎて整頓が追いついていないのだ。脱ぎ散らかした衣服が落ちてないあたりは女の子だが、壁中に貼られた写真のせいでより部屋がごちゃりして見える。以前家に呼ばれた時は呆れたものだ。

ゴキを気にするならまず無駄に物を買ひ込む癖を直した方がいい。と、既に何回も言っているのだがどうにも効果はないようだ。いつそ次の誕生日に、小型掃除機でもプレゼントしてやろうか。

「……ところで塔子、春奈」

「何だ？」

「なあに、お兄ちゃん」

「お前達は何故俺を挟んで睨み合っているんだ」

さつきから、バチバチ火花が散っているように見えるのは――気のせいだと思いたい。ぶっちゃけ、怖い。

「塔子さんがお兄ちゃんに変な事しないか見張ってるだけでーす」

フン、と鼻を鳴らす春奈。あれ、何か黒いオーラが見えるような……アレ？

「第一くつつきすぎなんです！離れて下さい塔子さん。そしてお兄ちゃんの半径百メートル以内に入らないで下さい」

「半径百メートル！？広っ！！」

「無茶言ってるなよ春奈。それじゃサッカー出来ないだろうが。あたしはチームメイトとして、鬼道と親交を深めたいだけでー」

前半分のツツコミは正論だが後半はどうなんだ、と鬼道は頭を抱える。どう見てもスキンシップが激すぎるだろう。塔子の存在が気にかかっているのは鬼道も同じなので、好意を寄せてくれる事は嬉しいが――若干、行き過ぎ感が否めない。

「そーゆーお前はどうかんだ。その距離は越権行為だぜ？その年で妹の特権振りかざすのは流石にキモいってかヤバイだろ。お前のブラコンぶりは今に始まった事じゃないけどよ？」

「な、な、なんですってー！！」

春奈が金切り声を上げて立ち上がった。ちょ、塔子言い過ぎ！春奈もここが病院の待合室だって事忘れてないか！？

「売られた喧嘩は高値買い取り返品不可ですよ！そんなに私のスピニング・カットでブチのめされたいんですかあ！？」

「おーおーやれるもんならやってみやがれ！あたしのザ・タワーをお前ごときがどう破るのか楽しみだぜ！！」

「お、お前らな！」

スピニング・カットもザ・タワーもブロック技なんですが――とそういう事ではなくて！

サッカー技をフル活用して喧嘩するのはマジでやめて下さい。お前らが全力出したら死人が出る、絶対！

「いい加減にしろ！場所を弁えろ、他の患者さんの迷惑だぞ！！」

これも保護者の務め。鬼道は一喝した。ああ、既に遅かった気がするが（他の患者さん達が明らかに恐怖にひきつった顔でこちらを見ている）こんな公共施設を戦場にされたらたまったもんじゃない。

「鬼道…」

「お兄ちゃん…」

二人の少女はさすがにしょんぼりした顔で黙り込んだ。ちょっと強い口調で言い過ぎただろうか。しかし。

「…あたし、トイレ行って来るわ。どーせ当分呼ばれねえし」

「私もー」

前言撤回。何ですかその胡散臭い爽やか笑顔は。そして何故連れ添って二階のトイレに行く。まさかそこで第二ラウンドいくつもりじゃなかるうな？

だが鬼道がツッコミを入れるより先に、二人は猛スピードで待合室から姿を消してしまった。あまりに不自然すぎる退場。不安だ。非常に不安だ。

残念ながら今自分にできる事は、上の階から爆音が聞こえてこないのを祈る事だけのようである。

理不尽だ。この上なく理不尽だ。

春奈の機嫌は降下の一途を辿っていた。どうして妹の自分が兄にじゃれついてはいけないのか。赤の他人の過剰接触の方が立派なセクハラである。なんなら訴えてやろうか。

「春奈」

「なんですかつ！」

塔子に名前を呼ばれ、つい陰のある声で返事をしてしまう。幸い

二階の女子トイレは一階より広く個室が多い上（大隈医院は二階建てで、一階が眼科二階が耳鼻科の受付だ。待ち時間が長いのと鬼道と一緒にいたいのが為に、一階にいた自分達である）、現在他に使用者はいない。多少騒いでも迷惑にならないだろう、多分。

頭に血が上っているが、止まらない。そんな春奈を鏡越しにちらと見て、塔子は一息をついた。

「…さっきは、言い過ぎた。ごめん」

「え？」

てつきり第二ラウンド突入かと思いきや。突然の謝罪に困惑してしまう。

「言っている事と悪い事はあるだろ。場所も場所だ。流石に大人げなかったと思ってさ」

塔子は気まずそうに目を反らした。

「あんたが嫌いなんて事ないんだ。でもやっぱ、羨ましくてさ。あたしがどんなに鬼道に構って欲しくても、結局は他人じゃんか」

春奈はつい、まじまじと彼女の顔を見てしまう。黙ってれば美人なのに、ガサツで、男勝りな言動が目立つ乱暴な女の子。少なからずそんな印象があった事は否定しない。過去に兄と面識があり（自分とも、だが）それなりの仲だと知ってから余計フィルターがかかったのも確かだ。

だが彼女は、大人だった。自分なんかよりもずっと。それは財前財閥の令嬢として、SPフィクサーズのキャプテンという一人の社会人として、磨き上げられてきたものなのだろう。

「…羨ましいのは、私の方ですよ」

つい、本音が零れていた。鬼道有人の妹である事は、自分の誇りだ。しかしそれは同時に、妹以上のものにはなれない事も意味する。

「だって私は…お兄ちゃんの一番にらなれない」
「え？」

だって兄の一番になるのは、きっと。

「……え？」

その時だった。階下から悲鳴と、何やら罵声が聞こえてきたのは。聞き間違いかと思ったが、そうではない。春奈と同じように、塔子も固まっている。

二人は顔を見合わせて一二次の瞬間、春奈の身体は塔子の手で強引に個室に押し込まれていた。

稲妻だよ！全員集合！！（前書き）

二期キャラ達は何やら会議を始めた模様。鬼道視点の馬鹿馬鹿しいギャグです。別名、風丸一郎太の暴走。キャラ崩壊が激しいので、イメージを壊されたくない方は注意して下さい。

稲妻だよ！全員集合！！

鬼道は憂鬱だった。

ものすごく憂鬱だった。

隣では風丸が妙にキラキラした顔で“台本”とか書かれた紙を握っているし。周りにはむっつりした顔やら不機嫌な顔やら訳が分かってない顔やら妙に黒笑顔な顔やらがいっぱいで。

この場にいるのは十四人。鬼道、風丸、豪炎寺、円堂、吹雪、染岡、一ノ瀬、佐久間、源田、グラン、ガゼル、バーン、デザーム、レーゼ。

敵味方ごっちゃまぜで、共通点なんかまるっきりないメンバーだ。それが何故かこの会議室で、机を囲んで座っているのである。

ハッキリ言って空気が重すぎる。そして怖い。

「風丸：一体これは何だ。何が始まろうとしてるんだ」

ぶっちゃけ聞きたくない。でも聞かないと話が進みそうにないので、訊く。

すると風丸はさらって言い放ってくれた。

「暴露大会もといブチ撒け大会」

うわぁ。

響きからして、もの凄いイヤ。

「日頃の鬱憤を晴らすべく、秘密を暴露しまくったり不満をブチ撒ける会なわけ。ただし、自分の秘密をバラせて言ってもバラす人はいないだろうから」

何やらみんなに紙と筆記用具を配っている。あーもう読めたぞこの展開。

逃げたいんですが駄目でしょうか。

「書くのは人の恥ずかしい秘密ね☆俺を一番楽しませた人が一等賞だから!!」

逃げたら殺します、と風丸の眼が言っている。

怖え。ちよう怖え。

「一等になったら何か特典があるの?もしかして最下位には罰ゲームがあるとか?」

「はいグラン君、いい質問!」

わーグランの眼もなんか輝いてる!やめて下さいマジで!!

「一等の人は、一日主人公を円堂からブンどる事ができます」

「ちよっとお!」?

円堂がぎょっとした顔で身を乗り出すが、風丸は聞く耳持たず。

「で、最下位は一日、一等の人の下僕ね。パシリに使うもよし、SMプレイに使うもよし、何でもあります。うわあい☆」

「「「うわあい☆じゃねえっ!!」」」

「何?何か文句でもあるの?二期ラスボ様の風丸様に向かって?」

絶対零度、ブリザード!!!

こうかはばつぐんだ!!

あのカゼルですら凍えてる。うわあ。

マズい。非常にマズい。

一日主人公権はともかく(円堂には申し訳ないが)下僕だけは何としてでも避けなければ!!

ってか二期ラスボスって黒歴史じゃないのか!?開き直るなよお前!!

「俺が闇落ちしたのは元はといえば円堂のせいだからな。円堂が豪炎寺の心配しからないから!!」

「何で聞こえてんの心の声!？」

あ、今豪炎寺が凄まじい勢いで円堂の後ろに隠れた。

やめてくれ、お前一応クールでカッコイイ系キャラで売ってんだから!!

「俺以外のここにいる全員強制参加だよ。匿名で構わないけど、書かなかつのが分かったら無条件で最下位だからよろしく。どんな秘密が出てくるか楽しみだぜ♪」

ようは風丸サン、アンタが楽しみたいだけですわ分かります。

鬼道は頭を抱えて机に突っ伏した。

誰かバファ●ンをくれ、頼むから!

――数分後――

「さあ、お楽しみの発表タイム!」

楽しみなのはアンタだけだってば、と内心呟く鬼道。

げっそりしてる一同をよそに、嬉々として皆の書いた紙を読み上げる風丸。

「えーっと何々…」

『佐久間の携帯の待ち受けは鬼道の隠し撮り写真』

『豪炎寺はお化け屋敷で気絶した事がある』

『円堂に近づく女子は夏未が裏で手回しして遠ざけてる』

『マスターランクトリオの喧嘩の勝敗は、グラン六十勝ガゼル十二勝バーン0勝』

『ゴーグル外して髪を下ろして私服着たら、鬼道は普通に女の子に見える』

『帰ったら窓から侵入したりカが部屋のクローゼットの中にいた。誰か助けて!』

『雷門サッカー部部室とイナビカリ修練場には盗聴器と発信機が百二個。仕掛けたのは音無』

『イプシロンの男性陣はマキュアのパシリと化している』

『バーンの部屋にはゴキブリホイホイが五十三個あるけど間に合っていない』

『ガゼルの部屋の設定温度はマイナス10℃』

『アツヤの字は円堂大介並に下手』

『士郎の甘党ぶりは異常。ケーキバイキングで、帰ってくれと店長に頭下げられた事がある』

『音無に秘密がバレると、三十分で他校にまで知れ渡る』

『最近メインキャラなのに豪炎寺が空気。キャストクレジットに名前も出ない回があった』

『雷門の七不思議の一つに、“風丸一郎太を怒らせると不慮の事故に遭う”というのがある』

：うーん、みんな思ったより普通だなあ。つまんない」

「「「どこがだ!?!」」」

全員立ち上がった同時ツツコミ! おお素晴らしい。

そして風丸、頼むから最後の一つ（書いたのは鬼道）を否定してくれ!!! 不慮の事故ってなんだ不慮の事故って!!! 七不思議になるレベルなんかい!?!

「何か枚数多いと思ったら、アツヤと士郎が別々に書いたんだ」

「おう！」

手を挙げるアツヤ。

うん、今はアツヤだな。髪が白っぽいし逆立ってるし金眼だし。

「つてか兄貴！俺の字んな汚くねえぞ！！何勝手な事書いてんだよ
っ」

「汚いじゃない。僕読めないよ？」

「読めろよ兄弟なんだから！」

「関係ないし。アツヤだって何人の話バラしてるわけ？」

「事実じゃねえか。あの店の店長半泣きで“二度と来ないでくれ”
つて土下座してただろ」

「失礼しちゃうよなあ。お客さんに対して」

「店内のケーキ全部消失させという何を言う」

「ちよっとしか用意してないのが悪いよ」

「どこがちよっとだ！大体なあ…」

…あのー。

頼むから一人兄弟喧嘩は…やめて下さい。顔やら眼やらがくるく
る変わるとか怖すぎる。端から見てるの相当ホラーな光景だぞ。

「風丸は退屈だと言ったが」

源田が、胃薬を飲みたそうな顔でげっそりしている。

「どれもこれもツツコミ所満載で何から言えばいいのか分からん。
そして匿名にしてる意味があまり無いな」

「イプシロンのネタなんて間違いなくデザームだし…。何、マキ
ユアってあんたの事もパシるのか？」

「私自身はあまり。…というか私までパシリに使うと、マキユアの
散らかし放題の部屋を片付ける人間がいなくなる」

はあ、とため息をつくデザーム。同情する、もの凄く。鬼道は内

心で合掌した。

帝国イレブンは基本みんなマメなので、部屋からゴキブリが沸くような事態は無かった。掃除当番を徹底していたせいもある。

だが雷門に来てから、部室の汚さに卒倒しかけたものだ。転校初日に、風丸、マックスと共に大掃除を敢行したのは記憶に新しい。

「ゴキブリといえば…」

皆の視線がバーンとガゼルに向く。バーンの部屋に大量にゴキブリホイホイが…というのを書いたのは十中八九ガゼルだろう。

「バーンの部屋はジャングルだ。三步踏み出せば黒い物体と遭遇できるぞ」

「や、やめろ！想像させるなっ！！」

ゴキブリホイホイが五十三個仕掛けてあっても追いつかないってどんだけヒドいんだ！！

「あと足の踏み場がないからな。たまにゴキブリじゃなくてバーンがホイホイされてる。…この間は剥がすのが大変だった」

「うっせえよガゼル！」

思い出しか真っ赤になってバーンが吠える。

「てめえの氷点下の部屋のが異常だっつもの！！なんで凍え死なねえんだ！！」

「零度超えたら暑くてたまらないじゃないか」

「病院行けやああっ！！」

バーン、正論なり。しかしガゼルに喧嘩をふっかけるのはお勧めしないぞ、お前の勝率の低さを考えると。

その秘密——『マスターランクトリオの喧嘩の勝敗は、グラン六十勝ガゼル十二勝バーン〇勝』を書いたと思いきレーゼは、一人ツッコミを放棄して茶を啜っている。

こいつ、案外大物か？

「喧嘩はどうかおやめ下さい、バーン様ガゼル様」

みしり、と。彼の手の中で湯飲みが嫌な音を立てた。ドス黒いオ
ーラを撒き散らして低い声を出すレーゼ。凄い、マスターランクの
二人がビビってる…!!

「だって迷惑なんですよ…。あんたらが喧嘩した後、毎回毎回面倒
な掃除や事後処理に走り回ってんの、私達ジェミニストームなんだ
よ…いい加減にしやがれ馬鹿上司どもーッ!!」

「「ちょ…ま…ぎゃあああ」」

きらりーん。

怒りと共にレーゼがぶっ放したアストロブレイクで、ガゼルとバ
ーンはお空の星になった。

「はっ…し、しまった、ついやっちゃった…!」

我に帰ってか青ざめるレーゼ。

「壁にこんなに大きな穴が…!この会場レンタルなのに…!」

ああ、上司二人の心配はまったくしてないわけですね。

まああの二人は殺しても死にそうにないが。樹海を手ぶらで彷徨
くぐらいたし。

鬼道は呆れ果てながらも、再び暴露用紙を見る。佐久間の恐ろし
いまでの信者っぷり（後で携帯没収だ!!）とか、自分は女顔なん
かじゃねえ!!とか、いっぱいツツコミたいところはあるが。

とりあえず一番重要そうな事だけ口にする。

「一ノ瀬…お前そろそろ警察に相談しとけよ…?」

リカの一ノ瀬ラブっぷりは公式で充分凄まじいが。

まさかストーリーカーの域に達していようとは。帰ったら自室のクロ
ーゼットで…怖すぎる。

「無事だったのかお前…？」

「襲われかけて…それになっちゃったけど命懸けで逃げた…」

もーやめてー！！と一ノ瀬は半泣きだ。さすがに哀れに思っ
てか染岡が慰めている。

落ち込んでるのは分かるが伏せ字しなくちゃならないような単語
は控えてくれ。コレ一応、子供向けアニメのジャンルだからな？

「警察に言ったけど！鬼瓦刑事が大阪ギャルズに返り討ちにあった
のに、俺に何ができるって言うんだあ！！」

「…もうSP頼んだ方がいいレベルだな…」

すまない。俺に出来る事は何もありません。

とりあえず秘密ネタの中で、春奈と夏未の黒い噂は見なかった事
にするとして（盗聴器なんて信じない…お兄ちゃん信じないぞ！）。

「さりげなく扱いが不憫だな豪炎寺…クーデレキャラの面影が無い
ぞ」

「俺の中の豪炎寺のイメージが…ううっ」

染岡がややマジで泣いている。気持ち分かる、もの凄く。あの
豪炎寺がお化け屋敷で気絶とか、考えたくもない。

あとアニメで空気すぎるのは、もはや秘密でも何でもない気が。

噂の『円堂VS豪炎寺』回なんて完全にタイトル詐欺だったし。豪
炎寺の台詞数えるほどしかなかったしあの回。

無口設定だからって、メインキャラなんだからもう少し喋れ。フ
アンが泣くぞ。

「その豪炎寺なんだけどさあ…」

風丸の不機嫌極まりない声に、びっくりと全員が反応する。

「何でいつの間にかいなくなってるわけ？」

「「何っ!？」」

本当だ、いねえ! いつの間にか逃げてる!!

さすが空気、全然気付かなかったぞ。

「決定だな。下僕は豪炎寺で決定。見つけた人が一日主人公!!」

「えー俺メリット無いじゃん!!」

「やだよ円堂君とじゃなきゃ」

「最後の最後で危ない発言すんなグラン!!」

ぎゃいぎゃい騒ぐ面々を見て鬼道は思った。駄目だまともな人間
いない。吹雪はまだ一人喧嘩続行中だし。

マジで大丈夫かイナズマ?

夢の終わりに見る空は（前書き）

イナズマイレブンGOの初小説です。といっても出てくるのは円堂と久遠監督のみ。サイトにもまだ載せてない新作になります。

公式ではつきりしてしまう前に妄想を形にしてみました。巷で噂の聖帝Ⅱ“彼”説が前提の話。違ってたらまあ一つネタという事で。シリアスで暗いです。

夢の終わりに見る空は

夜の公園に、人気はない。密談というほどではないが、大人が“内緒話”をするのには十分適した場所と言えるだろう。ベンチに座る、かつての恩師の姿を見下ろして円堂は思う。髭が濃くなった以外、久遠の姿は十年前と大差ないように見える――表向きは。

しかし月日は確実に自分達の間横たわるものだ。恩師はどこかやつれていた。願っても願っても届かないモノを追い続け、その度に裏切られてきたであろう男。疲れきっていたには違いない――無論そんな後ろ向きな気持ちだけで、円堂を呼んだつもりはないだろうが。

「円堂」

俯き、黙りこくっていた久遠が漸く自分の名を呼んだ。

「お前に：どうしても訊きたかったことがあってな」

ついに来た、と思った。久遠が自分を呼んだ訳も、話を持ちかけていた理由もおおよそ想像がついている。誰に彼の下にっていた訳じゃない。

「お前：どこまで知っている？」

本当はもっと直球で疑問をぶつけたかっただろうに。彼は変化球ではぐらかした――不器用で、優しい男。万が一円堂が“真実”を知らなかったら。その為に用意された、遠まわしの問いかけ。だから、円堂は。

「そうですね」

真正面から言葉を投げ返す。自分にそんな気遣いは要らないのだと示すように。

「フィフスセクターの現聖帝の正体：くらいは知っていますよ」

思ったより平静な声が出た。久遠は顔を上げて円堂を見、深く深いため息で吐き出した。

「何故：こんな事になったのだろうか。あの頃は誰もこんな未来を望んではいなかったのに」

「そうですね、でも」

思い出す、十年前の遠い日。

「遅かれ早かれ、何かは起きると思ってましたよ。十年前、オーガが八十年後の未来から襲来してきた時からね」

八十年後――いや、今から計算すれば七十年後の未来になるが。サッカーを憎み、滅ぼすと言ってきたあの子供達は、今の日本とはかけ離れた世界に生きていた。詳しく尋ねた訳ではないが、憲法九条は改正されてしまったと見て間違いないだろう。あんな年端もいかぬ子供達に軍事教育を施すほどだから。

そしてサッカーも。オーガの彼らは“サッカーは悪であり、国を衰退させるもの”と教育されていた。その正否はともかくとして、サッカーがそれだけ国に影響力のあるスポーツになっていた事は確かである。そのきっかけは良くも悪くも現在――彼らから見た七十年前の現状にあるのは想像に難くない。

「…何故こんな事になったのか。俺なりにずっと考えてはいたんですよ」

円堂は空を振り仰ぐ。星の瞬きはいつだって変わらない。十年前、キャラバンの上から眺めたものと同じ。

「サッカーがもっと栄えれば、とは思ったけど。サッカーが絶対であれなんて望んでたわけじゃない。こんなサッカーの広まり方、優勝を目指していた頃は誰一人想像もしなかったし：願ってた筈もない」

自分達イナズマジャンプの優勝が、爆発的なサッカーブームの火つけ役になったのは否定しない。自分達の優勝まで、日本のサッカーレベルはさほど高いものではなかった。U-17だけは活躍していたものの、プロや中学サッカーでは優勝など夢のまた夢であった筈。

それを叶えた自分達。己で言うのもなんだがなかなか輝かしい功績だろうと思う。それをきっかけにサッカー人口が増えたのは純粋に嬉しい。

だけど。何が契機になってしまったのだろう。

サッカーの強さが学校の価値、人の価値へと結びついてしまうようになるなんて。発想がまずぶっ飛びすぎている。日本のサッカー思想が激変した頃、偶々留学でコトアールに飛んでいた円堂には詳しい事情を把握しきれていないのだが。

もしかしたら何か、裏に黒幕がいたのかもしれない。サッカー思想を過激化する事で誰が得をするかなど知った事ではないけれど。ただそうとでも仮定しなければ納得しがたいほど、ここ十年で急激に日本は変わってしまったている。

残念ながら今円堂が知っているのは二つだけだ。人災であれ何であれ、サッカーは破滅に向かいつつある事。そしてどんな非道と罵られようと、サッカーを守るべく立ち上がった友がいた事だけである。

「サッカーは、誰かを傷つける道具じゃない。精神的な意味でも、身体的な意味でも」

サッカーにおける弱者は虐げられ、人権さえ踏みにじられる時勢。それを変えたいと願っても、円堂には何もする事が出来なかった。他の多くの仲間達もだ。

行動を起こせたのは。円堂の一番の親友である、彼一人だった。

「サッカーが大好きだから…守ろうとしたんです。豪炎寺は」

豪炎寺。その名前を出した途端、ピクリと久遠が反応を示した。

「…いつ知ったんだ。インドシユウジが…聖帝が豪炎寺であると」

「そんなに前じゃないですよ。ただ…気になって調べてみたら行き着いたってだけで」

「気になった？」

「ええ」

サッカーの管理組織、フィフスセクター。そのやり方に対しての人々の感想や反応は大別して三つだ。利益を得られ、護られるようになったと喜ぶ“旧・弱者”達。こんなものは正しいサッカーの姿ではないと反発する“サッカー愛好家”達。

そしてサッカーそのものに興味がない、無関心な“その他大勢”である。

「サッカーを愛する者達はよく言います。フィフスセクターは利益しか考えてない、サッカーの事など欠片も愛さない連中に違いない、と」

それは実際、神童も口にしていた事だ。サッカーは支配されてしまった。連中はビジネスの為にサッカーを利用しているだけで、本

当はどうでもいいのではないかと。

円堂は彼らの会話を偶々立ち聞きしていただけたが――実際その場にいた所で何が言えたのか。真実を伝えれば彼らをもっと傷つけるだけかもしれない。

神童にしろ天馬にしろ、多かれ少なかれ十年前のイナズマイレブに理想や幻想を抱いているのだから。自分達から本当のサッカーを奪ったその筆頭が、かつての黄金時代のエースストライカーだなんて――考えたくもないに違いない。

「最初は俺もそう思いました。こんなサッカーは認められない、奴らは平気なのか……って。でも、思い込んだり決めてかかったら、眼に映る景色はいくらだって変わってしまう」

十年前の自分は本当に浅はかで無知だった。エイリア学園の件などいい例だ。連中が超次元な能力を駆使し、宇宙人だと名乗り、それをあっさり信じて敵意ばかり向けた。サッカーを破壊の道具にし、人を傷つけても平然としている冷酷な奴らなんだとすら思った。でも。

隠されていたのは、ただ当たり前のように愛されたくて手を汚すしかなかった、孤児達の素顔。後から思えば気付けるきっかけは山ほどあったというのに、自分は思い込みから全てを見落とし、あるいは見て見ぬフリをしてしまっていたのである。なんて偽善的な勇者なのか。酷い話ではないか。

ヒロトの件だってそうだ。彼が何故、敵である自分の前に何度も現れ、別れまで告げに来たのか。命じられて、円堂を騙そうとしていた。そう決めてしまえばそこで全てが終わってしまう。しかし真実を知った後ならばその真意も紐解く事が可能だ。彼は傷つけあうサッカーなどしたくなくて――でも愛する父の為には従う他なくて。

それは叫び。

それは嘆き。

彼は円堂に救われたがっていたのだ。無口に意味を重ねながら、訴えかけていたのである。お前は自分達の救世主たるのか、と。そして終わらせたいと願っていたのだ。全ての悲しい事を、悪い夢を。円堂は後悔した。他人に知らされるまで、自分から何一つ知ろうとしなかった事を悔やんだ。眼を曇らせ、真実が見えなかった自らを恥じた。その上で誓ったのである。

知ろうとする事を畏れてはならない。目に見える全ての叫びを心に焼きつけて生きよう。思い込みや先入観で何かを決めつけるなど論外だ。何故ならば。

「真実は愛が無ければ見えない。だから俺は：もう、見えないフリはしない」

愛を持って、客観的な眼で見れば、フィフスセクター及びその頂点に立つ者の真意が見えてくる。

「そうやって見つめ直した時、フィフスセクターの行動には矛盾する点がいくつもありました。ただサッカーを管理し、冷酷な判断を下すだけならばあまりにも不必要かつ不似合いな感情が」

今回。円堂が雷門の監督に就任したのは当然理由がある。本来フィフスセクターから別の人員が派遣される筈だったのを、久遠が目に依頼してデータを改竄、円堂が赴任するよう仕向けた為だ。

こんな真似、すぐに相手方にバレる。フィフスセクターもすぐ不正に気付いただろう。彼らはそこでも手の打ちようがあったのである。ハッキングの疑いで円堂の逮捕状を請求するなり、そうでなくともみすみす円堂を監督に落着かせる必要は無かった筈である。

しかし彼らは何の動きも見せない。即ち、黙認したのである。あからさまな不穏分子、邪魔でしかない筈の円堂を、一体何故？

実は調べてみれば似たようなケースは今まで数件起きている。フイフスセクターは、反抗的な監督や顧問の就任をあえて見逃しているのだ。どうしてなのか？

加えて。時折見られる勝敗指示のない試合。選手達の裁量と技量に全てを任せた一戦――去年のホーリ―ロード決勝戦がそれに当たる。綿密な計算が狂う、面倒しかない試合を何故組むのか。ただ管理しただけなら、自由な試合などさせないに限るではないか。

それらの疑問を積み重ねていった時、答えもまた見えてくる。フイフスセクターがサッカーを管理するのは、目的ではなく手段なのではないのかと。

「もしフイフスセクターが存在しなかったら、どうなっていたか？日本の治安悪化や、格差社会に大きく拍車をかけていたかもしれない。サッカーの影響力は、良くも悪くも大きくなりすぎました」

少なくとも――サッカーは再び破壊と政治の道具になっていただろう。皆を幸せにできる“楽しいサッカー”は永遠に失われていたかもしれない。

「フイフスセクターは、正しいサッカーの姿を奪ってしまったかもしれない。でもフイフスセクターのした事はまだ、人々にサッカーへの希望を残したんです」

豪炎寺は――護ろうとしたのだ。他に手段は見つからなくて、闇の中もがく中で。サッカーを管理する事で治安を維持した。いつか全てを壊してくれる者が現れると信じて――かつてのサッカーが取り戻せる日が来ると信じて。

「フイフスセクターを叩く前なら。同時に俺達を変えなくちゃいけない……サッカーで全ての価値が決まってしまうようになった、この

世界を」

それが豪炎寺の願いでもある筈だから。

「お前に、出来るのか。絶望しきった…今の雷門で」

「やってみせますよ」

まだ暗い表情の久遠に、円堂は微笑んでみせた。

「俺が巻き起こしてみせる。暗い未来なんて吹き飛ばす…とびっきりの革命へカゼ」を」

天馬の顔を思い出す。彼がいればきつとなんとかなる。
大丈夫。希望はまだ、死んではいないのだから。

私は貴方のマリオネット（前書き）

実は一番初めに書いた短編がコレでした。白翼を書くにあたりプロットになった作品かもしれません。原作設定ではありますが捏造過多なウルビダさん視点のシリアス話。ジェネシス戦の衝撃のまま書きなぐった記憶があります。拙い文でもよろしければどうぞ。

私は貴方のマリオネット

ウルビダ。

それが新しく、私に与えられた名だった。そこに込められた想いなど知る由もない。大好きな父さんがつけてくれた名なら、何でも良かった。

私にとって、父さんが全て。

顔も知らない両親が、せめてもの情けと言わんばかりに置いていった名前より余程価値があるだろう。彼らは自分をこの世に捨て置ただけで何もしてくれなかった。何かをしてくれたのは父さんだけだ。

親に捨てられたか親戚に見放されたか、あるいは家族と死別したか。お日様園に集まったのはそんな子供達ばかりだ。

正直最初は、私は自分を不幸な子供だと思っていたが――もっと不幸な子供達がたくさんいる事に驚いた。

私は親に捨てられたが、赤ん坊の時であり、すぐこの園にやってきた。だから酷い目に遭った記憶もないし、大人達の凍りつくような闇も見えていない。

黄緑色髪の子は、親に虐待されて保護された。

黒い髪の子は、震災で家族を喪った。

赤い髪の子は、親に駅に置き去りにされた。

銀髪の子は、親戚中をたらい回しにされた。

そして、父さんの死んだ息子によく似ているというあの子は――記憶喪失になっていた。

世界は残酷だなんてよく言うけれど。彼らほどそれを体現している存在もない。他にも遠い地の戦災孤児やら、スラム出身者やら。その殆どに共通していたのが、生きる事に疲れ絶望しきった顔をし

ていたこと。

私達は誰もが一人では生きれない、か弱く非力な存在だった。

父さんに出逢うまで、私達はずっと一人ぼっちだった。

父さんが私達を拾ってくれなかったら、おそらく遠くない未来に野垂れ死んでいただろう。

だから――誰もが薄々行き過ぎていると気付きながらも、父さんに依存し、心酔していたのである。それは私とて例外ではない。

「ヒロトばかりずるい」

そんな子供達の中で。特に可愛がられていたのがヒロトだった。それは傍目からも明らかで、父さんの愛を請う多くの子供達が彼に嫉妬した。

特に一番顕著だったのが晴矢。父さんに頭を撫でられて嬉しそうな顔をしているヒロトを横目に口を尖らせ、私にも愚痴を零すのだ。

「俺の方がサッカーだってうまいし！なんであいつばかり誉められるんだ！」

放っておくと駄々をこね始める晴矢を宥めるのは、大抵私と風介の役目だった。

嫉妬したい気持ちは分からないでもない。しかし私達は、ヒロトに嫉妬するのはお門違いである事も知っていたから、そういった感情を抱かなかったただけだ。

むしろヒロトに同情すらしていた。

彼は父さんにとって、亡くした愛息子の身代わり人形でしかないのだ。ヒロト自身がそれを一番よくわかっていて、しかし決して表には出さなかった。

「父さんが自分を愛していなくても、自分が父さんを愛していれば

それで、いい」

いつだったかヒロトがそんな風にこぼした事があって――私は酷くいたたまれない気持ちになったものだ。

それは幼い子供に言わせるにはあまりに酷な言葉だった。本当なら――当たり前のように与えられるべき親の愛。それが得られない現実を、それが不幸である事を気付かないよう、自分を誤魔化す為の言葉。

彼に限った事でもない。誰もが多かれ少なかれ自分を誤魔化してきたのだろう。それが生きていく為の唯一の手段と知っていたから。それでも私達は幸せだった。父さんと出会い、仲間と出会い、孤独ではなくなったのだから。

その全てが崩れ落ちた瞬間を。一体何人が覚えているだろう。

私は数少ない、真実を理解していた人間の一人。

晴矢はバーンになった。

風介はガゼルになった。

ヒロトはグランになった。

そして私は、ウルビダになった。

私達からすれば始まりは五年前だが、父さんからすれば十年前に全ては始まっていたのだろう。

十年前。遠い地で我が子が無残な殺され方をしたその日から。彼を殺した咎人が大人達の謀略により見逃されたその瞬間から。グランに、息子と同じ名前をつけたその時から。

それでも――エイリア石なんてものがこの星に墜ちてこなかったなら。父さんの復讐の焰は、その胸の内を焦がすだけで終わったかもしれない。

何故あの石は地球を選んだのか。

神なんてものが在るとしたら何故こんな運命を選びとったのか。

その石を研究する段階から。私達は実験体にも等しい存在になった。

いや、私はまだいい。元々身体能力の高かったメンバー——後にマスターランクチームに所属する事になる面々——は、エイリア石そのものの実験からは免れられたのだから。問題はそれ以外の子供達だ。

「痛い…痛いよっ…痛いよおお——っ！」

今でも——実験室で泣き叫ぶあの子の声が耳から離れない。

外で運動するより、屋内で本を読む事の方が好きな、大人しい子だった。あの子が最初の捨て駒の一人として選ばれてしまったのは、その性格と性質、たったそれだけの事だったにすぎない。

椅子に縛り付けられて血反吐を吐いて泣き叫び、やがてぐったりと動かなくなったあの子。それでも研究者達は容赦なく薬物を投与して、コードに繋いだ。

私はただガタガタ震えて見ているしかなかった。目の前の光景が信じられない。こんな惨い事を、本当にあの優しかった父さんが命じたというのか。

なんで。どうして。

あの子は何をした？彼らが何をした？私達は何をした？

「我が名は、レーゼ」

それから暫くして——久しぶりに見たあの子はすっかり変わってしまった。言葉使いも、人格も、記憶に至るまで。人間らしさの消えた暗い瞳は、残された私達の心臓を射抜いた。

彼だけではない。何人もの子供達が実験の果てに洗脳され、自分を失っていく。彼らは自分達が人間であった事も覚えていなかった。エイリアという星の使徒であり、父さんという皇帝陛下に仕える戦

士であると信じきっていた。

身も心もねじ曲げられたかつての仲間達を見て、私はようやく理解させられたのだ。やはり、残酷な世界は残酷でしかなかったのだと。自分達は運命に抗う力も無い、無力な子供でしかないのだと。

「お父様！こんな事、やめさせて下さい！！」

頭脳明晰で、計算が得意で、皆の良き兄だった彼は。勇敢にもたった一人で父に抗議した。本来ならば、マスターランクチームのいずれかに加えられる筈だったあの子。だけど。

父さんに逆らった結果、レーゼと名乗るようになったあの子と全く同じ末路を辿った。違ったのは彼は自分を失う最後の瞬間まで、涙を流さなかったという事だけ。

デザームと名乗るようになった彼は、その強い正義感を失った。その悲しい姿を見て私達は、彼の代わりに泣いて――それ以降、涙を流す事をやめたのだ。

泣いても、泣いても、現実は何一つ変わりはない。ならば、感情など凍らせてしまえばいい。何一つ疑問を持たず、ただ運命に忠実であればいい。

逆らえば皆、デザームと同じ結果が待っているなら。自分達は抵抗を捨て、目の前に在る現実を受け入れていくしかない。

そうだ。何が不幸なものか。

私達二ハ、オ父様が、イルジャナイカ。

父さんがエイリア石と復讐にとりつかれたように。

私達は父さんの存在と、与えられる偽物の愛情にとりつかれたのだった。

ジェミニストームやイプシロンとは違う。我々が人間でしかない事も、全ては愛息子を失った父の復讐である事も、最初から最後まで理解していた私達。

だけどもある意味、私達も洗脳されていたのかもしれない。あるいは洗脳されていると、思い込もうとしたのだろうか。

「お前達は、この世界を変える為に、選ばれた戦士なのです」

父さんが語れば、それが全て真実になる。

まるで危険で甘いドラッグのよう。酔いしれて、酔いつぶれて、角砂糖のようにとろけるような幻想を見せてくれる。

そしてもっと、欲しくなる。

「愛していますよ。お前達は、私の誇りです」

語りかける声は優しい。昔と何一つ変わらないかのように。

実際はその細められた眼の奥には、澱んで歪んだ陰が潜むというのに。あの頃確かにあった筈の光は、もはや何処にも見えないというのに。

「さあ：ジェネシス計画の始まりです」

逆らわなかったのは、逆らえなかったからだだけじゃない。

仲間達があれだけ酷い目に遭わされるのを見ていながら、それでも私達は父さんを愛していたからだ。それでもまだ愛されていたか

ったからだ。

なんて自分勝手に、自己中心的なのだろう。

「我々は遠き星、エイリアからこの地に舞い降りた…星の使徒である」

後はもう、墜ちていくだけ。墜ちても墜ちても闇には底が見えない。

優しかったあの子が“レーゼ”として、瓦礫の上から宣戦布告した。その光景を遠くで見ながら、グランが空虚に呟いた。

もうこれで、戻れなくなったね、と。

私は聞こえないフリをして耳を塞いだ。揺らされてはいけない。何かを感じてはいけない。人間達に同情などしてはいけない。人並みの幸せに焦がれてはならない。

戒めて戒めて。私達は愛する人のマリオネットになる。

エイリア学園となったお日様園の子供達の手で繰り返される破壊。それを止めようと足掻き倒れる者達。それでも尚立ち上がる稲妻の戦士達。

ジェミニストームの子供達が記憶を消されて捨てられた。

イプシロンが本来の目的より、雷門との試合を楽しみ始めた。

ガゼルとバーンがジェネシスの座を巡って争いだした。

グランが時折ふらりと姿を消して、ヒロトの格好で戻って来る事があった。

変わってゆく世界の流れから置き去りにされようとも、私達はおの人に尽くすのみ。それ以外にもはや道などありはしない。だけど。

「もうすぐ円堂君達が来るよ」

何処か愉しげに、何処か切なげにグランが語った時――もしかしたら私はとうに終末を予見していたのかもしれない。

グランは父さんを敬愛しながらも、別の場所を見るようになっていた。自分のやっている事の正当性を疑うようになった。無意識に終わりを望み始めた。

なんと妬ましい事か。全て、私には考えようの無い事だというのに。偽りとはいえあれだけ私達が焦がれた父さんの寵愛を受けておいて、何故。

だから私は、グランが嫌いなのだ。この感情をそう結論づける他なかった。一体誰への嫉妬であるかも語れないまま。

「ふざけるな……」

私達の世界が音を立てて碎け散る。

ホイッスルが齎したのは緩やかな絶望。

勝ちたかった。お父様の為に。そう涙を零す私達の目の前で、貴方はなんと言った？

“ジェネシス計画そのものが、間違いだった”？

では私達は何の為に？

私達の苦しみと悲しみは何処に？

「これ程までに愛し！ 尽くしてきた私達を……よりもよって貴方が否定するなああーッ！！」

愛していたのです。

愛されたかったです。

力任せに蹴りつけたボールには、殺意と同等の愛があった。

L o s t w o r l d (前書き)

佐久間視点＋源田のダーク。アニメ世界の佐久間が、白翼世界の悲劇を夢に見る話です。

ぬるいですが流血と嘔吐描写があります。苦手な方は閲覧をご遠慮下さい。

Lost world

闇が照らす闇。黒の中の黒。悪夢の中の悪夢。佐久間はそんな中にぽつんと立たされていた。何一つ、抗う術も無いままに。

真帝国学園にやって来て。佐久間を支配したのは自分達を捨てた鬼道への憎しみと、彼を見返してやりたいという闘争心。そして暗く淀んだ勝利への渴望。

その全ての欲望を満たす為に、一度は決別した男に再び忠誠を誓い。体を痛めつけてまで禁断の技を学んだ。

あとは奴らが愛媛にやって来るのを待つのみ。試合で鬼道を、雷門を徹底的に叩き潰すだけ。それで自分達の今日までの苦悩は全て報われる。

その筈、だったのに。

――何でこんな事に、なった？

隣には自分と同じように、愕然とした様子で立ち尽くす源田。カラン、と音を立てて金属が地面を転がる。ドス黒い色が柄まで染み込んだナイフが。

薄暗い闇。埃っぽい体育倉庫。闇に慣れた眼は、その姿をはっきり捉えていた――皮肉なほどに。

跳び箱の影。

打ち捨てられている、細い身体。

明るい茶色の髪はほどけて緩やかなウェーブを描き、地面に散らばっている。滅多に見る事の叶わなかった切れ尾のルビーの瞳は、光を失い、虚ろな眼で天井を見上げている。

いつもマントを翻す背中ばかり見ていたから、気付かなかった。彼はまだまだ幼い、とても小さな子供の身体をしていた。投げ出された手足は考えていたよりずっと華奢で、ほっそりとしたものだった。

その足首はおかしな方向にねじ曲がっている。左手も折れているのが明白で、鬱血し、白い肌を黒く染めている。

何よりも異様なのは、少年の胸や腹や太ももを中心に無数に刻まれた切り傷。肌ごと切りさかれた服はビリビリになり、赤い滴を垂らしながら僅かにまとわりつくのみ。半裸の少年の身体はまるでゴミのように放り出されている。

ズタズタの青いマントも、雷門ユニフォームも、レンズの碎けたゴーグルもトレードマークだったドレッドヘアも、見る影もない。

「……あ……」

佐久間の喉からは、掠れたような音しか出なかった。

顔が綺麗なままでなかったら、それが誰か分からずに済んだのに。いや——どちらにせよ同じ。自分と源田はこの場にいて全てを見ていたのだから。それどころか荷担した。全ての悲劇に、暴虐に。

自分達が、鬼道有人を殺した。

まるでボロ雑巾のように、打ち捨てられた鬼道の遺体。その死んだ赤いに責め立てられている気がした。

恨まれていない筈がない。彼だってまだ生きたかった筈なのに、自分達がそれを奪い去ったのだから。

さっきまで憎む側だった自分達の立場は、あっという間にひっくり返った。

さっきまで佐久間の胸をあれほど焦がしていた黒い焰が、今は跡形もなく消え去っている。そして消え去って初めて理解した。自分達は鬼道を憎んでいたが、それは殺意ではなかった。

自分達は愛していたからこそ憎んだ。

本当はただ彼とまたサッカーがしたかっただけで――その想いが強すぎて裏切られたように感じてしまっただけなのだ。

鬼道が死んでしまってから、漸く。

「ち…違…」

みしり、と胸の奥から鳴った音。ずっと気付きながら無視していた音。

歯車が噛み合わずに擦り切れていく、音。

「こんな…こんな事したかったわけじゃ…」

源田の弦きが聞こえた。それまそのまま佐久間の心の代弁。

憎しみが消えて今、残っているのは喪失感と恐怖。そして深い深い、絶望。一番の望みを自らの手で断ち切ってしまった、逃げ場のない後悔。

鬼道は喋らない。笑わない。怒らない。もう二度と。

「いや…嫌だ…っ」

こんな筈じゃなかった。

ただ鬼道が気付いてくれればそれで良かったのに。

「うわあああっ!!」

血の匂い。死んだ人間の血と肌の感触。責め立てる赤い眼、眼、眼。

喉が潰れるほど絶叫して頭をかきむしって――佐久間の意識はブラックアウトした。

「嫌だあああっ!!」

「佐久間っ!？」

瞬間、世界は反転していた。さっきまであんなに暗い場所にいたというのに――辺りは真白い光に満ちている。

そして一番最初に目があった源田は、夢の中より髪が短くて、何より困惑した眼で自分を見ていた。

「あ…」

混乱の波が過ぎ去っていく。佐久間は呆然としたまま、周りを見回した。

漂っていたのは生臭い鉄錆の匂いではなく、病室特有の薬くさい空気。自分のユニフォームをうっすら汚しているのは血ではなく、見慣れた土と砂。

どうやら自分が帝国学園の保健室にいて、そのベッドに寝かされているらしい事を理解する。

――さっきのは…夢？あれが…？

まだ心臓が煩いくらいバクバクと鳴っている。現実を認識したというのに、未だに信じられなかった。

それくらいあの黒い景色には、リアリティがありすぎた。

「だ、大丈夫か佐久間？滅茶苦茶魘されてたぞ」

心配そうに自分を覗きこんでくる源田。

「覚えてるか？お前、練習中に熱射病で倒れたんだ。水分補給もしないで無茶するから」

源田の声が、遠い。全身を冷たい汗が濡らしていた。頭がガンガンと痛む。本当なら夢で良かったとほっとするべきなのに――喜ぶどころか未だに恐怖が拭い去れない。

気持ちいが、悪い。

「……佐久間？」

真正面から源田の顔を見て。その眼が虚ろに開いた鬼道の遺体、その赤い瞳と重なって――。
ハッキリと、全てを思い出してしまった。

「――ッ!!」

口元を抑えて、ベッドから飛び降りた。腹の底から突き上げる感覚。保健室を飛び出して、走り出す。

辿り着いた一番近い水場で、強かに吐いた。胃には殆ど何もなくて（昼食前だから当然と言えば当然か）、こみ上げるのは酸っぱい胃液ばかりだったが。

えずくたびに涙が溢れ、視界を滲ませた。頭の痛みは酷くなるばかりだ。ふと背中に温かな感触があつて、振り向くと源田が立っていた。

「ゆっくり息をしろ。とりあえず、落ち着け」

背中をさする手が温かくて、別の涙が溢れそうになる。背中をゆっくりさすられて、頭痛と吐き気が少しずつなりを潜めていく。

「……悪い、源田」

「構わないさ。困った時はお互い様だ」

たかが夢。そう笑い飛ばせない自分が惨めで、虚しくて、苦しかった。

しばらくの時間をえて。気持ちが悪く着くのと同時に、動悸もあらゆる苦痛も遠ざかっていった。源田に支えられながら、保健室へ戻る佐久間。

「…あんな酷い夢、初めてだったんだ」

源田には、話さなければならぬ気がした。単に不調の面倒を見

て貰ったからだけではなくて。

彼はその最低最悪の悪夢の登場人物で。あの時の痛みを唯一共有できる人間だったから。

帝国で、共に墜ちた事があるのは彼だけだ。

「真帝国学園の時の夢だ。：雷門と戦う為に、俺達ずっと愛媛で特訓してただろ」

「……ああ」

源田も思い出したいくない話だろう。やや眉をよせて、佐久間の話聞いてる。

「ある時な。：俺達、帝国学園に連れてかれるんだ。で、グラウンド横の体育倉庫ってあるだろ。あそこに入ったら：そこで鬼道が一人で待ってて」

誰に連れて行かれたがよく思い出せない。影山ではなかった気がする。ただ、がっしりした三人の男達が一緒にいたのは確かだ。

「俺達：怒りに任せて、鬼道に暴力を振るうんだ。何度も殴ったし、何度も蹴り飛ばした。なのに：鬼道は全然抵抗しなくて」

覚えてる。覚えているのだ。

手首を折られても肋骨を砕かれても、夢の中の鬼道は悲鳴一つ上げなかった事を。

その上で謝るのだ。自分のせいで苦しめてすまなかった、と。どんなに殴られても恨み言一つ言わないで。

「それが面白くなかったのかな。一緒にいた男達が、ナイフを出してきて：それで鬼道を…」

鬼道の体を滅茶苦茶に斬りつけた。さらに身体中の骨を打ち砕い

た。血まみれになった鬼道に代わる代わる乱暴した。

あらゆる苦痛に涙を流しながらも鬼道は最期まで自分達を責めず、謝り続けた。自分達はただそれを見ていた。

「気がついた時には、俺達の前には…鬼道がボロボロになって…死んでた」

自分で口にした言葉が、胸を引き裂いた。あの瞬間の恐怖が蘇り、ガチガチと奥歯が音を立てて鳴った。

あの後がどうなったかなど考えたくもない。ただ間違いなく自分達は、本物の絶望というものを思い知ったのだ。

最悪な過ちを悟っても、全ては後の祭りで。

「……どんなに恐ろしい内容だったとしても」

その光景を想像してか、源田の顔も青ざめている。それでもしっかりとした口調で佐久間に言う。

「所詮夢なんだ、現実じゃない。…実際、そんな悲劇は起きちゃいないだろう」

「分かってる。分かってんだ…でも」

ガラガラと保健室のドアを開ける源田。風に揺れる白いカーテン、窓の向こうには澄んだ青空が見える。

「一步間違えれば…ああなってた。ああなってもおかしくないって気付いたんだ…っ！あの時の俺はどうかしてた。何であんなに鬼道が憎かったのか分からないんだ…」

自分もみんなも。こんなに鬼道の事が大好きなのに。失う事など誰一人望んでいないのに。

それでも冷静になった今ならば。あの時の自分達の未来がどれだ

け危うい均衡の上に立っていたかが理解出来るのだ。あと一步憎しみに我を忘れていたなら、本当に自分は鬼道を殺してしまっていたかもしれない。

そして完全に後戻りができなくなっていたかもしれないのだ。

「でも…い…今だって！今だって、心のどこかで俺は鬼道を取り戻したがつてる。雷門を妬んでる。この気持ちかもしれないまたあんな…あんな風に歪んだら…！！」

怖い。怖くてたまらない。まだこの手の中には夢の中の、恐ろしいほどリアルな感触が残っている。

耐えられない。あんな悪夢がもし現実になったなら。

「…平行世界ってのが、あるらしいんだ」
「え？」

唐突に源田が言い出したことに、佐久間は目を見開く。

「本で読んだんだ。…俺達が何か一つ決断するたび、世界は枝分かれしていくつも存在してるんだと。…だからもしかしたら…どこかの世界では起きたのかもな。お前が見た悪夢のような、惨劇が」

ベッドに佐久間を下ろし、源田は微笑む。

「悲劇的な未来の俺達が…佐久間に教えてくれたんじゃないか？悲しい過ちを、俺達が犯す事のないように」

そうなのだろうか。確かにあの夢は、ただの夢とは思えぬほどリアルで。それを見た自分は絶対にそんな事が起こらないようにと、心から今祈ってるけど。

「…そうか」

だとしたら。感謝しなくてはならない。悲劇を見せてくれた、どこかの世界の自分に。

「大丈夫さ。俺達はもう、気づいてる」

「…うん」

回避されたのかもしれない一つの悲劇。その先の自分達は今、ありきたりな毎日を送っている。

喪われなかった世界の中で、きっと自分達は真剣に考えるべきなのだ。本当の幸せとは、一体何であるのかを。

僕らの明日は未だ遠く【長編試し読み】（前書き）

これもまた長編の書きかけ。白翼の番外編です。白翼の話の中でちらつと出てきた“かつて雷門がアルルネシアに勝利した”話がコレ。うみねこパロ要素が強いです。当然、暗い雰囲気。この続きはグロと死ネタまみれになる予定ですが当分まだ書けそうにないのでお蔵出ししてみました。

ちなみに、ディシディアファイナルファンタジーからアルティミシアさんがゲスト出演してます。

僕らの明日は未だ遠く【長編試し読み】

ようこそ、我が愛しのアルティミシア卿。

ここは魔女の館、あたしが用意したあたしの為のゲーム盤。

このゲーム盤からはね、ある世界の様子を覗く事ができるの。

世界はヒトツじゃない。世界を渡る存在を知る貴女ならご存知よね？

この世界の子供達は、とても面白い運命を背負っているの。そうまるで、複雑に絡み合ったピアノ線のような。

だから目を付けてみたわけ。お生憎様。いや、むしろ幸せかしら。この災禍の魔女の暇潰しになれるのだから！！

…ああ、そんな怒った顔しないで。悲しいわ、一緒に楽しみましようよ。

貴女も励ましが欲しいのではなくて？

運命も、無限の神の力も打ち破れると！

ええ、あたくしが保証して差し上げますわ。

貴女が——このゲームであたくしに勝てたのなら！

「……くだらない」

その不思議な茶室には、ドレス姿の二人の女性の姿があった。

一人はたった今長い口上を述べた、赤茶に短い髪、紅い眼の女——災禍の魔女、アルルネシア。

もう一人は白い長い髪に金眼の女——時空の魔女、アルティミシア。

名前のとてもよく似た二人の魔女には、しかし大きな違いがある。アルルネシアは喜悦に満ちた笑みを浮かべており、対しアルティミ

シアは不愉快極まりないといった風にその美貌を歪めている。

実際、アルティミシアは不機嫌絶頂だった。なんせ今まで世界していた場所から、半ば無理矢理にこの場所に召喚されてきたのだから。それも、アルルネシアの遊びに付き合わされる為に、である。

尤も、不機嫌の理由はそれだけではない。

元々アルティミシアは、アルルネシアの事が苦手だった。嫌い、と言ってもいいかもしれない。魔女として、愛や情にすぐほだされてしまう自分の方が異質かもしれないが――アルルネシアの残酷趣味は到底理解できるものではなかったからだ。

数多の世界に数多く存在する魔女達。その誰が多かれ少なかれサディスティックな趣味を持つ変わり者だ。だがアルティミシアは、アルルネシアほど冷酷無慈悲で残虐な魔女を知らない。

彼女は魔女というものを選民意識が強い。殊に魔法の力を持たない人間達を特に軽蔑し、見下す傾向にあった。彼女にとって人間とは、踏み潰す為に存在する芋虫以下なのだ。

人間に多少以上の情を持つアルティミシアとは、相容れる筈がなかった。だから決別した。それなのに。

「私は忙しいのです。貴女の遊びに付き合う暇などありません」

何故今になって、自分呼び出したりするのか。彼女と二人きりでお茶会なんて息が詰まりそうだ。忙しい、というのも嘘じゃない。早く帰らなければ。やるべき事は山ほどあるのだ――。

「いいじゃない、別に。どうせ貴女まだ、鳥籠からの抜け出し方なんて分かつちやいないでしょ？」

ただでさえイラついているというのに。アルルネシアは嬉々として地雷を踏んでくれた。

「貴女がいない間に誰が死んでようとトチ狂ってようとか関係ないじゃない。どーせまた神竜サマが生き返らせてくれるんでしょお？」

ブチリ、と血管が切れるような音。アルティミシアは振り返り、殺気を漲らせてアルルネシアを睨みつけた。

殺してやりたい。自分があの世界でどれだけ長い間苦しんできたかも知らないくせに！！

アルティミシアは、仲間達と共に百年近く一つの世界に囚われている身だった。その世界では終わりなく殺し合いが続く。全員が死に絶えようとも時間が何度でも巻き戻り、また殺し合いに明け暮れる日々が続く。

全ては、神竜という大いなる意志のせい。その神竜に打ち勝つ為に、犠牲に血と涙を流しながらも奔走してきたアルティミシアにとって、命を軽んじる彼女の発言は許し難いものだった。

無限の力を持つ災禍の魔女たる彼女には、死んだ人間を生き返らせる事など造作もないのだ。だからこそ理解できない。なんと哀れで、虚しい事か。

「残念だけど。この茶室には結界が張られてるわ。貴女は此処から出られない：ゲームであたしに勝たない限りは」

どうやら本当らしい。どれほど魔力を集中してみても、外に繋がるドアはピクリとも動かない。

「安心して。この世界の時は停止している：貴女の世界の時もね。時間なんか気にせずにゲームを楽しめるというわけよ」

あたしってなんて親切。アルルネシアはまるで自分の言葉に酔いしれるように言った。

腹を括るしかないのか。アルティミシアは諦めて椅子に座り直し

た。彼女は今回、特に大きな目的があったわけではないようだ。ただ自分と遊びたいだけ。だからこそ迷惑だとも言えるが。

ならば時間をかけるだけ無駄。こんな茶番さっさと終わらせなければ。自分には帰るべき場所がある。迎えに行きたい人がいる。待っていてくれる人がいる。

茶髪で無愛想な獅子と、金髪で横柄な暴君の顔が、脳裏をよぎった。

「私とどんなゲームがしたいのですか、アルルネシア」

こんな所で、足踏みなどしてられない。

「簡単よ。…このゲーム盤を覗いてご覧なさいな」

アルルネシアが杖を振ると、チェス盤が載った丸テーブルが出現した。チェス盤の上には無作為に白と黒の駒が並べられている。

彼女が杖でテーブルの端を叩くと、チェス盤はまるでスクリーンのように透けて、一つの景色を映し出した。

「これは…?」

「あたしが目を付けた、ある世界の風景よ。此処がゲームの舞台になる」

それは、古びた西洋風のお屋敷のようだった。壁には蔦が這い、レンガや壁はあちこち崩れて罅が入っている。無人のお化け屋敷といったイメージだ。

時間は夜か夕暮れか。雨が強く降っている。雨に打たれて、屋敷はみすぼらし姿を晒していた。

「…アルティミシア卿。貴女達が運命を打ち破ろうと足掻く姿が本当に面白くてね!…あたしも神竜サマの真似をして、無限の力を使用した“実験”をしようと思うの」

その言葉に、アルティミシアはぎょつとして目の前の女の顔を見た。アルルはニィ、と唇の端を吊り上げる。

「今回、あたしが使う“無限”には制約がある。その制約が護られなければ、あたしの“無限”は打ち破る事ができるわ。でもそれができなければ…この世界は永遠に同じ時間と惨劇を繰り返す事なる」
「な…なんて事を…！」

みるみる顔から血の気が引いていく。百年、殺し合いの時を繰り返えさせられたアルティミシアは知っている。その無限の拷問がどれほど苦痛で、恐ろしいものであるのかを。

この女は、見ず知らずの他人にアルティミシアと同じ苦痛を味あわせるつもりなのか。それも、自分の楽しみの為だけに。

「この世界の住人達を救いたいでしょ？ 貴女、なんだかんだでお人好しだものねえ？」

災禍の魔女は優雅に紅茶を飲む。狂った笑みを貼り付けたまま。

「貴女の勝利条件は簡単よ。あたしの“無限の力”にかけられた制約を見つけ出し、ループする世界を阻止すること。…その為に必要な、全ての謎を解き明かす事よ」

駅から遠い我が家を、今日ほど恨んだ日は無かった。ピンク頭の
コワモテ少年（野球部頭、と言われた事もある）染岡竜吾は、空を
見上げて舌打ちする。

遠い、と言ってもせいぜい十五分。けして歩けない距離ではない
のだが――いかんせん日が悪かった。電車を降りたら土砂降りの雨。
しかもよりによって傘は持って来ていない。

「あーもー…ちつくしよー…」

ズブ塗れ決定。走っても意味はあまり無さそうだが、いつまでも
冷たい雨に打たれて歩くのは御免だった。仕方ないので早歩きで商
店街を進む。

このあたりの路地は滑りやすい。先日試合の帰り、我らがキャ
プテン・円堂守が見事に転んでひっくり返ったのを見ている。濡れ
たくないからといってダッシュするのは得策じゃ無い。

霧のように霞む町の向こうに、フットボールフロンティア会場の
スタジアムが見える。実は染岡の家は学校より、スタジアムの方が
近い。私立の雷門中には、染岡のような電車通いも少なくなかった。

――何処の誰だよ、今日は夜まで快晴ですとか抜かしたのは！

派手に外れた天気予報。信用して遅くまで練習に居残ったらこの
ザマだ。まったくツイてない。夕立をまったく予想しなかった自分
も自分かもしれないが――だからってこの強さはないだろう。

不幸中の幸いは、染岡のバックには今スポーツ用品とペットボト
ルくらいしか入ってない事か。教科書をいちいち家に持ち帰るほど
勤勉な性格ではない。もしそうなら今頃ドロドロのグシャグシャで
悲惨な事になっていただろう。

携帯電話だけは、しっかりビニール製のポーチに入れてある。先

代の携帯が雨のせいで死んだ為その教訓からだった。

「ベタベタして気持ち悪い……」

早くシャワーを浴びて着替えたい。ガラにもなくそう考えて、商店街を抜けた。その先をしばらく進むと家のある住宅街に出る。

商店街を出てすぐ右手には、この間整備されたばかりの小さな公園がある。その真正面には、近所の子供達の間では有名な“お化け屋敷”があった。

お化け屋敷といっても無論本当にお化けが棲んでいるわけではない。元は有名な資産家が住んでいたが、持ち主が自殺したとかで買い手がつかなくなっている屋敷だ。噂なので染岡も詳しくは知らないのだが。

昔は近所の悪ガキどもとこっそり探検しに来て、親達に叱られたものだ。実際は何もない、ただの空き家だったのを覚えている。ガラスも割れていない、ただ埃っばいだけの小さな洋館。実に勿体無い。

「ん？」

洋館の正面。門の前を横切る時、何気なく染岡は屋敷を見上げ一日を見開いた。

気のせいだろうか。今、何か光のようなものがチラついたような――。

「！」

はっとする。今度は見間違いはなかった。二階の窓。右端に、光のようなものがチラついている。

すわ、火の玉か――と思ったのは一瞬。よくよく見れば炎より、

もつと人工的な光のようだ。懐中電灯か何かだろうか。

「何だ……？ 誰かいんのか？」

雨のせいもあってよく見えない。昔の自分のように、探検しに来た子供か何かが忍びこんだのだろうか。しかし――こんな土砂降りの雨の日に？

目を凝らして見ていると、なんと今度は端の部屋に電気がついた。電気が通っていたのか――空き家である筈なのに。

――そういや……誰か話してたっけな。あの家に誰かがこっそり住んでんじゃないかって。

お化けはいないが、ホームレスならいるのかもしれない。いや、電気代を払えるくらいならちゃんと引っ越してきた人間か。曰く付きでも家は家だ。

――俺なら御免だけどな……あんなボロ屋に住むなんて。

雨の冷たさを思い出し、染岡は足早にそこから立ち去った。

それは――おぞましい惨劇の起こる、三日前の出来事。染岡が見たのは人か、幽霊か、それ以外の“何か”か。あるいはただの錯覚か。

全てが発覚するのもまた、三日後のこと。

ペロニカが囁う（前書き）

連載作品『ブレイブ・ハート〜戦士よ、誇り高くあれ〜』番外編。本編前の物語でちよつとオリジナル色の強い話。名前のないオリキヤラ視点。もはやイナズマイレブンじゃないかもなレベルです。

ミストレの潜入任務。女装要素あり、流血・微グロ要素あり。ついでにドシリアスでダーク。最後まで読まないと意味不明かもしれない。まだ自サイトにならない新作です。

ペロニカが囁く

そのウイルスは、エボラウイルスとインフルエンザウイルス、天然痘ウイルスなどを掛け合わせて開発された。自分は科学者でないから詳しい事は分からないが、開発が成功するまではかなり紆余曲折あったらしい。失敗は赦されない。感染爆発アウトブレイクなど起こせば自分達が最初の犠牲者になってしまう事間違いないのだ。反対を押し切って研究を勧め、開発に成功したのが自分の父であった。

その最強の武器の名は、“ベータドロン”。父の母国では破滅の女神の名だという。正義は必ず勝つ、が父の口癖だった。神は必ず我々に味方する、と。世界を変える事こそ我々に与えられたる使命である。父も自分も仲間達も、皆がそう信じていた。

計画実行まであと三日。青年は最後の準備に取りかかっていた。“ベータドロン”に感染すればほぼ100%助からない。抗ウイルス剤がなければ感染して三十分以内に発病し、約二時間苦しみ抜いて死んでいく。全身の穴という穴から血を吹き出し、肌を腐らせながらのた打つ姿は壮絶だ。この国の、腐った政府の連中に相応しい死に様だろう。

「…まだ起きてたの？」

不意に後ろからかけられる甘い声。パソコンとにらめっこしていた青年は椅子ごと振り返る。立っていたのは、思った通りの人物だ。

「ミスティ。すまないね、眩しかったかい？」

名前を呼ぶと、白いネグリジェの少女は花のように微笑む。ミスティ。まるでこの世のものとは思えぬ、美しい娘だった。濃い緑の髪を肩まで垂らし、同じ色の瞳は驚くほど睫が長い。肌は真っ白で

大理石のよう。小柄であるゆえ見目は幼いが、放つ色香は大人の女性にひけをとらない。

彼女はこの組織に、1カ月ほど前に入ってきた。雨の晩、必死の様子で門を叩いてきた彼女。全身が傷だらけで、息も絶え絶えの様子だった。何者かに暴行されたのだろう。フェミニストの多い組織は、心良く彼女を迎え入れた。

ミステイは自分達と同じように、この国と政府を憎んでいた。彼女を陵辱したのも政府の連中だったという。復讐してやりたい、と彼女は言った。疑う者もあしたが、リーダーはあっさりと彼女を仲間にする決めた。ミステイの色香にあてられたのかもしれない。

1カ月経ち。その判断は正しかったと証明された。ミステイは優秀だった。元は南の国で通信士をしていたというだけあり、無線の扱いに長けていた。また医療の知識もあり、今や後方支援に欠かせない存在となっている。その麗しい容姿と思いきや深い性格もあって、今では組織の人気の的だ。女のメンバーもいたが、ミステイは誰より美しかった。

「平気よ。ただ気になって…見に来ちゃった。あなた、最近ずっと夜遅くまで起きてるじゃない。働きすぎだわ」

ミステイは不安そうにこちらを見る。青年は嬉しかった。一目惚れから始まった恋。努力のかいあって1カ月でぐんぐん距離は縮まり、告白したのが四日前。彼女は恥ずかしそうに笑って、頷いてくれた。思い出すだけで天にも登る心地である。

彼女に心配して貰える。キスをして貰える。そうして愛される。そのなんと素晴らしい事か。この大仕事が終わったらすると決めている事があった。告白はしたがプロポーズは別である。指輪はひそかに買ってあった。

「ありがとう。…僕は大丈夫。長年の夢が叶う日がもうすぐ来るん

だ、寝てなどいられないよ」

ミステイの体を引き寄せ、キスをする。柔らかな緑の髪は絹のように指をすり抜けた。彼女ははにかみ、やがて真面目な顔で画面を見る。

「“ベータドロン”のデータね。：私達にとっては頼もしい味方だけど：万が一を思うと、怖いわ。ワクチンを接種しても、確実に発症しないとは限らないんでしょ？」

「まあね。でも0・01%にも満たない確率だ。まず当たらないさ、それに」

計画は必ず成功する。青年には確信があった。何故ならば。

「勝利の女神は、必ず正義を行う者に微笑むんだ。神の意志を代行する僕達は正義だ。ならば負ける筈などないじゃないか」

「そうね。でも神は気紛れよ。時に残酷な運命を課す事もある：抗ウイルス剤、絶対に忘れちゃ駄目よ？あなたにもしもの事があったら、私：」

「ミステイ：」

潤んだ瞳で見上げてくるミステイ。扇情的で魅惑的。つい、ごくりと喉が鳴る。彼女の胸は小さかったが、ほっそりとしたうなじも脚も、充分に女性としての魅力を放っていた。

その真っ白な肌にむしゃぶりついてしまいたい。肌に噛みついて、自分のモノだという跡を残したい。むくり、と凶暴な感情が頭をもたげ――つい、ベッドに彼女を押し倒していた。

乱暴に、思うがままに――抱いてしまいたい。本当は、今すぐに。

「駄目よ」

ミステイは困ったように眉を寄せた。

「…結婚するまでは、だめ。：もう穢れてしまった身体だけど：愛

する人となら、尚更。だって…」

彼女は真っ赤になって、自らの腹を撫でた。子宮の真上。まるで既にそこに宿した命があるかのように。

「…赤ちゃんが、できたら困るでしょ。忙しい今、みんなの足手まといになるなんて耐えられないわ」

「ミスティ…」

どこまでも自分と仲間達を想ってくれる。そんな彼女が愛しくて愛しくて、また髪にキスをした。

「…ああ、分かってる。君が美しすぎるのがいけないんだ。つい食べてしまいたくなる」

「もうっ…」

くすくすと花のように笑う彼女を抱きしめ、青年はパソコンの前に戻った。ベータドロンの開発や研究は自分の仕事ではないが、国会にこれを撒き散らすのは自分、計画を練ったのも自分だ。その感染力や空気中に広がるスピードを計算して動かなければならない。己は無論、仲間を危険に晒す訳にはいかないからだ。

「ミスティ…今はキスまでで我慢するけどね。代わりに…約束して欲しいんだ」

「なあに？」

指輪の箱は、引き出しの中に入っていた。藍色の箱には、有名ブランドの名前が印字されている。彼女の為にとけなしの金を叩いて買ったものだ。青年は箱を取り出し、ぱかりと開いてみせる。

「受け取って…くれないか」

現れたのはダイヤモンドの乗った銀の指輪。そう大きな石ではないが、細工が細かく近くで見れば手の込んだものと分かるだろう。控えめで優しい、ミスティにぴったりだと思って選んだ品だ。

「私で…いいの？私なんかより、綺麗で聡明な女はたくさんいるのに…」

意味はすぐ理解出来たろう。謙遜する彼女はいじらしく、実に可愛い。

「何言ってるの。…君より綺麗な女なんかいない…優しい娘だっていない。たった1カ月の付き合いかもしれないけど、もう僕には君以外のパートナーなんて考えられないよ」

結婚してくれ。君は十六歳だから、法律上は可能な筈だろ？

そう言う彼女は見開いて――やがてその大きな瞳から、ポロポロと涙を流し始めた。青年は慌てふためく。まさか泣かれるなんて思わなかった。

「っ…ごめんなさい。もう、言葉が出なくて…。ありがとう、嬉しい…」

そっとその肩を抱き寄せる。ミスティの涙は宝石のようだった。出来ることならその涙を集めて、首飾りにしてみたい。きっと彼女の肌に映える筈だ。

「幸せになろう。平和になった世界で、きっと」

青年は幸せだった。そう、その晩までは。

次の晩。目が覚めた時、世界は一変していた。緊急事態のベルもアラームも鳴らない。それほどまで速やかに、殺戮は行われたのだ。いつも通りの時間に起きた青年が見たのは、血の海と化した屋敷だった。組織の本部だったその場所には、もはや屍しか転がっていない。まるで屋敷が仲間達を食らってしまったかのよう。臓物が、骨が、肉が、血が。廊下に、リビングに、玄関に、風呂にと散らばり飾り立てている。

「な、何で…!？」

どうして。セキュリティは完璧だった筈だ。外部から侵入者があれが、オートで撃ち殺すシステムが備わっているし、少なくとも誰も気付かないなんて有り得ない。では一体誰がこのようなことを。

「ミステイ！ミステイー！！」

まだ敵がいるかもしれない。そうは思ったが、叫ばずにはいられなかった。世界で一番愛しい人。彼女は無事なのか。もし彼女を失ったら、自分は――。

「あーあ。間に合わなかった」

居間に入った瞬間。後ろから声をかけられる。いつもより低かったが、その声には聞き覚えがあった。だって。

「君が起きる前に、全て終わらせてあげるつもりだったんだけど。失敗したなあ」

昨晚愛を語り合った――愛しい少女の、もの。

「ミス、ティ…？」

彼女は昨日までと同じ、真っ白なドレスを着ていた。似合うと思
って、自分がプレゼントしたものだ。そのドレスが――誰のかも分
からない血で真っ赤に染まっている。

「やっぱりドレスってのは嫌だね。動きにくいったらないよ。王牙
の制服のがずっとマシ」

「王牙…だって…！？」

王牙――王牙学園。憎き政府の軍人を育てる士官学校。中にはま
だ学生ながら前線に出て活躍する少年少女もいるのだという。

「冥土の土産に教えてあげる。“初めまして”、俺の名前はミスト
レーネ＝カルス。チーム・オーガの副隊長だよ」

青年は声も出ない。ミストレーネ＝カルス――その名前は聞いた
ことがあった。ライトニング・ファイター“閃光の拳士”と呼ばれ、拳と仕込み武器だけで千
の敵をなぎ倒すとさえ言われている美しい少年兵。そしてオーガと
いう名の最強最悪の部隊の名も。隊長のバダップ＝スリードの名は
自分達のような反政府組織にとっては悪魔のそれに等しい。

「ミステイ、そんな…嘘、だろ？まさか君が…」

ミステイが男だったこと以上に、とにかく彼女が敵であったこと
が信じがたかった。ミステイ――否、ミストレーネは微笑む。青年
が大好きだった、あの花の咲くような笑みで。

「ミステイなんて女はいないよ。俺が作り上げた幻。あんたが愛を
誓ったのは、ただの偶像」

そして彼女――否、彼は。自らの左手の薬指から指輪を抜き、暖炉の中に放り投げた。高価な指輪はあっという間に焦げた鉄屑になってしまっただろう。青年は膝をついた。誰か夢だと言ってくれ。目が覚めたら仲間達がいてミステイが寄り添ってくれて、そんな優しい毎日が待っている筈だと。

「俺は言った筈だね。神は気紛れ、時に残酷な運命を課することもあると」

ひらひらと彼女が手に持っているのは、抗ウイルス剤とデータの入ったチップ。自分達のウィルステロを阻止するべく送り込まれたのが彼女であるなら、一体いつから計画は漏れていたんだろう？

「そもそも君達は正義なんかじゃない。君達に平和な世界なんて作れやしない」

彼女の手が振り下ろされる瞬間まで、青年は夢の中にいた。自分は本気でミステイを愛していた。でも彼女は一度でも自分に好きだと言ってくれた事があっただろうか。

「バイバイ。君の事、嫌いじゃなかったよ」

ミステイ。青年は最後までその名を呼んでいた。悪い夢が、醒めると信じて。

白黒ハッキリつけませんか（前書き）

イナズマイレブンGOの嫁ネタ。馬鹿馬鹿しいギャグその2です。
夏未視点で、イナズマのヒロイン達がキャラ崩壊起こしてますので
ご注意を。

白黒ハッキリつけませんか

とりあえず煌はこういうパターン（みんなで会議系）なギャグを書くのが好きである。悪しからず。

「さあ、そろそろ視聴者の皆さんも気になってるだろう事を！ハッキリさせましょうよ！！」

春奈がなんだかものすごく楽しそうである。夏美は冷や汗をだらだら流しながら、ホワイトボードの前に立つ彼女を見つめた。

その実、裏で雷門中の生徒やら教師やらの弱みを握りまくり、某アメフト漫画の金髪悪魔よろしく皆を影で牛耳っている春奈である。どんなネタを持ってきて何を言い出すかわかったもんじゃない。

「白黒って…何のだ？第一何でこのメンバー？」

ウルビダが首を傾げる。春奈に集められたのは夏美、秋、冬花、ウルビダ、塔子、リカの六人。春奈を入れて七人の女子が今、会議室に集められている状態である。

…この時点でなんとなく想像はつくんだが。

「イナズマイレブンGO！誰が円堂さんのお嫁さんかって事です！見て分かりませんか？」

「なっ…！」

ああ、やっぱり。

「えー何で円堂？うちはダーリンとエドガーにしか興味ないんやけど、今のところ」

「まあ私もぶっちゃけお兄ちゃんにしか興味ありませんけどね」

「じゃあ何で始めたのよこのブラコン…」

ぐったりする夏美。明らかに人選がおかしい。どう見たってリカ

にフラグが立ってるのは一之瀬かエドガーだし（まあイナズマイレブンはあっさりきっぱりフラグをへし折る事で有名だが。ついでに一之瀬は秋ともフラグが立ってるので微妙だが）関係ないだろ円堂とは。

「では皆さんの同意も得たところで」

いや、誰も同意してねえよ？

「早速会議を始めましょう！」

聞けよ人の話。今日の春奈はいつにも増して強引グマイウェイである。そして弱みを握られてたら怖いので誰も何も言えないってゆーね。

「さて、まあ煌もいろいろ考察してたんですよね。円堂さんの妻が誰か」

ホワイトボードにかつかつと文字を書いていく春奈。

「円堂さんの名字が変わってないので、ぶっちゃけ塔子さん夏未さんは除外かと思って喜んでたらしいです。煌は秋さん推しなので」

「推し：ってあたしらAK●48かいな」

「まあまあ。：でも秋さんの反応からして、なんか違うっぽいと。」

：それで相当ショックを受けてたみたいなんですが：」

ショック、といえば。秋がさっきから一言も喋ってないのが気にかかる。見れば彼女は会議前からヘッドホンにサングラスに携帯装備で話が聞こえないようにしてるではないか。つまり、絶賛現実逃避中。：円堂の嫁に選ばれてないっぽいのがよほど残念だったらしい。キャラ崩壊？そんなもん今更だ。ちょっと可哀想である。

「うっうっ…一之瀬君と円堂君…両手に花計画が…うう」

前 言 撤回。あんた可愛い顔して何トンデモ発言しちゃってるんデスカ。

「そして冬花さんですが。キャプテンが久遠監督を“お義父さん”と呼ぶないあたり…違うのかと」

「いえいえそんな事ないですよ。私の可能性だってまだ十二分にありますって」 冬花は可愛らしく頬を膨らませてアピールする。大和撫子な彼女らしい控えめな態度だ。一般的な男子ならつい顔を赤くしてしまったり和んだり、あるいは萌えるのだと叫ぶかもしれない。

しかし。だがしかし。夏未はともそう思えない。理由は簡単、冬花がその手に持っているモノに気付いているからだ。

「願えばきつと叶うんです！私まだ、諦めません！！」

言っている顔と声は愛らしい――でも！

その手に持っている藁人形は、一体
なんでしょーか？

「あのだな…冬花とやら」

ウルビダの顔がひきつっている。

「その藁人形みたいなのは…しかも我々の名前が張り付けてあるように見えるのは…目の錯覚か？」

「あ、バレちゃいました？てへっ☆」

てへっ☆じゃねえええ！！

つまりそれは、“私以外のヒロインズが全員消えれば消去方で守君は私のモノになる筈だわ” っていうアレか！？ お約束のアレなのか！？

夏末、もはや元の面影もないほどキャラ崩壊必至である。

「そうか、その手があったんだ！」

ってそこで何かを思いついた素晴らしい笑顔で立ち上がるなよ秋
イイ！！

「私、負けない！」

「いやああっどっから出て来たのよその蠟燭と死装束はああ！！」

それ誰がどっから見たって丑の刻参りでないのかい！！

洒落にならないからやめてくれ、本気の本気でやめてくれ。呪われるなんて冗談じゃない！

「…木野先輩に久遠先輩。明らかにライバルじゃない人は外してもいいんじゃないですか？私とか私とか私とか…だってお兄ちゃんしか見えてないし！」

「それもそうですね」

「そうだね！」

「をいいいっ！！」

夏末、ついすっかり机に足をかけてツツコミ。はっ、お嬢様の自分としたことが！

とりあえず春奈は後で一発殴らせろ。さりげなく自分だけ助からうとするんじゃないか！

「…何ですか夏末さん。この私に何か文句でも？」

うわあ、ハリケーンがああっ!!

ぎらり。春奈がヤクザも逃げ出すような殺気に満ちた目線に向けてきた。ずさささっと思わず部屋の隅まで後ずさる夏末。ヤバい。本気で逃げたい。もうどっちが理事長の娘か分かったもんじゃない。「夏末さんの秘密：アレとかコレとかソレとか全部バラしても?」「すみません女王様春奈様。私が悪うございましたそれだけはホントマジ勘弁して下さいごめんなさい!!」

夏末、ジャンピング土下座。バック転して地面に這いつくばるのがコツである。素晴らしければ素晴らしいほどミジめさアップだ。春奈が情報魔である事をすっかり忘れていたこの一瞬。雷門を平穩無事に卒業し生きて帰りたいと思ったら春奈に逆らうな、兄貴に手を出すな。これ、暗黙の了解である。

「まあ話は逸れちゃいましたけど」

冬花が藁人形をひらひらさせながら軌道修正。話逸らせた原因アンタですけどね。

「考察の続きしませんか? 円堂さんのお嫁さんを知りたい人はたくさんいる筈です」

「そうだね。続けようよ」

話を逸らした人物その2こと秋があっさり言う。とにかくあんさんらはまずその物騒な藁人形をなんとかして下さい。可愛らしく振り振りしないで下さい。

「なんかもうあたし、どうでもいいんですけど」

塔子がげんなりして言う。

「あたし達がいくら論争してもさあ、結局公式が発表してくれなきゃ意味ないじゃん。多分もうちょいでイナGOで明らかになるしさ

あ

「それじゃあツマラナイじゃないですか塔子さんっ!!」

ダンッに足をかけて力説する春奈。今気がついたが制服のスカートでそれやるとパンツ見える。イナズマでお色気要素は御法度だからお気をつけあれ（実際子供向けアニメは胸のラインがハッキリ出たり女の子を撮るカメラが少しローアングルになるだけで規制がかかる事がある。豆知識）。

「それに対策も必要だと思いませんか？誰かが円堂さんの嫁に選ばれたら、絶対アンチが騒ぎますから!!」

「だからあたしらはA●B48じゃねえっての…」

だがアンチが騒ぐ、のはまず間違いない気が。だからカノンの曾祖母はハッキリさせないでおけば良かったのに、と思わざるをえない。そうしたら各々勝手勝手に「円堂はあたしの旦那よ!」妄想ができたというのに。

なんせ相手は世界各地に二千超えの嫁がいる円堂大司教だ。もうこの際“世界まるごと円堂の嫁”でいいではないか。

まあ、本心を言えば夏末だってぜひ円堂を婿に貰いたいところだけれど。それが公になった日の秋と冬花の呪いとリカと春奈の冷やかしが物凄くイヤなわけで。

「…もう帰らせて貰っていいか？私なんか元々敵だし、アニメで直接の接点なんかないようなもんじゃないか」

げんなりした顔でウルビダが言う。まあ彼女には“ヒロト”って名前の嫁（違）がいるわけだし、円堂とのフラグも立ちそうにないけれど。

「いやいや、ウルビダにも可能性はあるで!」

ここでリカが割り込んでくる。

「ゲーム版イナズマイレブン2の驚異の侵略者」を見てみい！崩れる星の使徒研究所から円堂に助け出されとるウルビダ…立派にフラグ立ててるやん！！あーもう、何であのシーン消えてもうたんかいな！！」

DS（ほんとどっから出してるんだ）を取り出し、ずばばばっというスピードで操作するリカ。イナズマイレブン2はクリア後にムービーが確認できるから、件のシーンを出してくるのは簡単である。

「…ゲームにあっても、アニメで消えてれば公式がフラグへし折ったようなものじゃないか…」

「あつまーい！フラグへし折った当時は、円堂の十年後なんぞ描く予定なかっただけかもしれへんやろ！！」

あ、それはあり得る。

通常ゲームにせよアニメにせよ、企画自体は相当前から動く筈である。シリーズモノのアニメなら尚更だ。が、あの社長様なら無茶ぶりもやりかねない気がしている。それが凄さでもあるのだが。

「まあ客観的に一番の本命はなんだかねで夏末さんっぽいんですよ。消去法的に」

「そ、そうかしら？」

「ええ。少なくとも私は無いでしょう。名字も変わってないし」

春奈がここにきてまともな事を言う。実際、春奈はもうほぼ無いのだろう。名前も音無のまま、円堂を見て驚いていたし。で、イナズマで推されていたメインヒロインは残り三人。秋はアメリカの電話云々から相手は一之瀬くさいし、冬花は円堂の久遠への態度からして微妙。となれば夏末の可能性は高いような気がする。

夏末の脳内が薔薇色に染まりかけた。秋と冬花の呪いは怖いがやっぱり円堂が好きなのだ。彼のお嫁さんになれるなら嬉しくない筈がない。

「でも製作側からすると、アンチがあまり騒ぎそうにない&無難な人を嫁にしたいってのもありそうなんですよね」

が。ここで春奈が爆弾投下。

「ってなわけで、塔子さんあたりが無難な気がする。よし決定」

「無難って理由であたしかいな！？ってか結論いい加減&早すぎ！」

塔子がついツッコミを入れる。便乗してリカまでポーズをとる。
もはや立派なギャグキャラだ。

「そもそも円堂ってホンマに結婚してるか怪しいわ！既婚言うてんのに結婚指輪してないやん！！」

「「あ」」

え、まさかそういうオチ？確かに結婚しても結婚指輪をしない人間もいなくはないが、円堂と年を考えれば高確率で新婚の筈。なのに指輪をしないって？

「…作画ミス？」

「ま、まさかそんな恐ろしい事態が…あるわけが…あはははは」

塔子の笑みが乾いている。さすがにそれは無いだろう。無いと信じたい。作監も演出も抜けて制作の目もかいくぐっちゃってOAなんて――いや希にあるから恐ろしいのだが。数話連続で抜けるならミスである筈はない、意図的だ、多分。

「…結局本放送を待つしかないんだよねえ…残念。口実に夏未さんを呪い殺せるかと思ったのに」

「そうですね」

「ちよっと待てやその二人いいっ！！」

夏未は絶叫する。え、発覚したら死人が出るって？いくら超次元でも勘弁して！

L i a r g a m e (前書き)

緑川と不動。不動Ⅱ元エイリアという特殊設定ありますが、白翼の世界ではありません。世界編が始まった頃に書いた、なにやら暗い話。不動がやや病み入ってるかも。

L i a r g a m e

“偽物の景色も描き続けたなら
いつかは本物にもなれると 夢を見てた”

【L i a r g a m e】

イヤだ、と思ったのだ。ただ無性に。

「ナイスチャージだ、不動」

風丸に後ろからチャージをかけた不動を、あの監督は誉めて。鬼道が非難の眼差しを向けるのを意にも介さず、不動は得意げに鼻を鳴らした。

リュウジはその様子を、離れた場所から見ていた。風丸に駆け寄るべきだったと思う。でも、動く事が出来ない。

後ろからあんな風にスライディングをかけたら、高確率でファウルをとられるのではないか。いやそれ以上に、相手に怪我をさせるかもしれない。

勝利さえ得られれば、相手選手がどうなろうと構わないとでも？

一分かつてる。俺にそんな事言う資格なんか無いって事くらいは。

ギリギリと、握りしめた拳が軋む。

自分達エイリア学園――特に、リュウジがレーゼであった頃、率いていたジェミニストームは。学校破壊を繰り返し、そのたびに怪我人を量産してきた。

日本代表として集まった彼らは、驚くほどあっさり“緑川リュウジ”を受け入れてくれたけれど。

罪の重さは、自分が一番よく分かっている。本当なら簡単に赦されていいはずがない。怨まれていない筈もない。

武方がつかかってきた時、その当たり前の反応にむしろ安堵していたというのに。あれ以来武方ですら何も言って来なくなった。壁山に至っては自分に懐き始めてすらいる。

――あいつらは、優しい。罪なほどに。

だけどその優しさに、甘えすぎる事は赦されない。引いた線は守らなくてはならない。

自分はまだ心から謝る術すらないのだから。

――だったら、せめて。

他に出来る事を。自分にしかできない事をするべきではないか。不動に対して、皆が不信感を抱いているのは明白。その理由も、自分は聞かされている。いや、聞かされていなくとも予想くらい立てられた筈。

まだヒロトしか知らないけれど。彼と自分達は、前々からの顔見知りなのだ。

意を決したように、リュウジは顔を上げる。不協和音の種は、自

分がなんとかしなければ。

どのみちこんな鬱々とした気持ちを抱えたままでは――落ち着いてサッカーなど、出来そうにない。

「…何か、用かよ」

チームに馴染めていない不動は、練習時間以外の殆どを一人で過ごす。それを知っていたリュウジは、人気の無い廊下で声をかけた。

「単刀直入に言うよ」

細くて小さな、子供の身体。しかし捻れた凶暴性を孕むその背に、静かに投げる声。

「チームの和を乱すの、やめてくれないか。わざと、だよ。どう見ても」

尋ねる形をとっていても、それは断定に等しい。

「みんなの気に障る発言だけじゃない。…監督が認めても、それ以外の誰もが認めないさ。他人を破壊する為のプレーだなんて」

単に危険、という言葉では収まらない。不動にとってサッカーはスポーツでないのだ。勝利を得る為の武器であり、他者を虐げる凶

器でもある。

実際彼は真帝国学園において、味方の筈の佐久間と源田に禁じ技を与え。結果、命に関わるほどの怪我を負わせている。

最優先の基準が、自分達と彼とでは根本的に違うのだ。

それを理解できるほどには、リュウジは不動の事を熟知していた。次に彼が言うであろう言葉も。

「随分と偽善者になったもんだよなあ？」

ぐるん、と振り向き。笑みの形に歪んだ赤い瞳と眼が合う。

「アンタがそれを言うのかよ？ ええ、“レーゼ”様あ？」

そう、充分に予測の範疇である言葉なのだ。それでも、身体が震え出すのを止められなかった。心臓が軋みを上げ、背中を冷たい汗が濡らす。

レーゼ。その名前はもはや、リュウジにとってはトラウマそのものののだ。不動はそれを分かった上で傷口を抉って来る。乗せられてはならない。嵌められたら、抜け出せなくなるから。

「そうだ。：俺に、奇麗事を言う権利なんか、無い。だって数であれば君よりずっと、俺はたくさんの人を傷つけて来たんだから」

微かに残る、忌まわしい過去の断片。魂をズタズタに引き裂くような記憶の欠片を、リュウジはあえて思い出そうとした。

上がる悲鳴。泣き叫ぶ声。命乞い。破壊音。逃げ惑う背中。地に伏す身体。

吐き気がする。喉元までこみ上げた胃液を、どうにかして押し戻す自分。きつと今、情けないほどみつともない顔をしているのだろう。

それでも自分は、苦痛を与えられなければならなかった。マゾヒ

ストの趣味などないが、そうせねばならないと自分の中の自分が命じる。

それ以外にどんな罰が相応しいのか、と。

「あんな事：望んでなんかいなかった。けどお父様の為だからって言い訳して：エイリア石に頼ったのは俺自身の意志。そして弱さ」

罪深い事には。

リュウジは“レーゼ”であつた時の事を、断片的にしか覚えていないという事。最初は意識して作り出していた“レーゼ”の人格が、いつの間にか取り消せないものになってしまっていた。

何が嘘か本当か。夢なのか現実なのか。その境界も曖昧なまま、ひたすらサッカーを破壊の道具にしていた自分達。

最終的にはエイリア石と生体実験の後遺症で、記憶がかなり破壊されてしまっていた。

円堂達にはああ言い訳したが。

本当は、レーゼは自分であつて、自分でない存在だったのかもしれない。これ以上余計な同情も心配もかけたくなくて、本当の事は半分も語らなかつたけれど。

だから。全てを思い出すまで、ちゃんと謝る事が出来ないのだ。今謝罪したら、それは嘘になってしまうから。

「だからこそ：俺はもう、嫌なんだ。何かを壊す為のサッカーなんかしたくない：！やりたくないよっ！！」

罪を犯し、罰を知ったから。

そんな自分だからこそ、重さが理解できるのである。サッカーは楽しいものだ。そう言い続け、立ち上がった者達の強さが、どれほど貴いものであるかも。

「はははっ！随分イイ子ちゃんのフリが上手くなったよなあ。昔はビービー泣いてばかりだったくせによお」

ひび割れた声で高嗤う不動。はっとした時には遅かった。ドンッ、
と思い切り肩を掴まれ、背中を壁に叩きつけられる。

細腕に似合わぬ力の強さに、息が詰まった。けほけほと咳込みながら、手を外そうともがくも、指の先すらピクリとも動かない。

「無駄無駄！力じゃお前、俺に勝てねーよ」

愉しげに歪む不動の顔。その瞳の奥に潜む感情は、見覚えのあるものだった。

「どんなな可愛いフリしたって、お前のココにはドロドロした汚えもんがいっぱい詰まってるんだ。認めちまえよ。他の誰を蹴落としたってレギュラーになりたいんだってなあ！！」

空いた拳で、グリグリと胸の中心を抉られる。肋骨が軋みを上げる。痛みに歯を食いしばった。

「俺様がスタメン確定しそうだからって…やる事セコいんじゃない？焦ってんだろ。レギュラーどころかいつ候補落とされるかわかんねえもんな」

それは、確かに事実だった。

自分は焦った。久遠監督に眼をかけられる不動を見て、こいつの代わりに自分がベンチに下げられるんじゃないかと。

元々同じMFで、ポジションを争う立場。破壊の為のサッカーを肯定する彼に負けてしまったら。自分が与えてしまった傷も受けた痛みも全て無意味になってしまいそうで。

怖くなった。どうしようもなく。

「否定は、しないよ。君がスタメンになって俺が落ちたら、さぞかしショックだろうなって思うね。でも」

恐怖を押し殺し。リュウジは凄絶に微笑んでみせる。そして不動を一番逆撫でする言葉を、あえて吐く。

「やっぱり、君のサッカーじゃ駄目。ねえ、まだ分かってないんだ？ どうして君が…ジエミニストームのメンバーからも外されたのか！！」

ダンツと大きな音。リュウジの身体は思い切り肩口から、地面に叩きつけられていた。

リュウジを力任せに突き飛ばした不動は、さっきまでの余裕綽々な顔から一転、憤怒の表情でこちらを見ている。

「うるさいっ…負け犬！」

「負け犬？ それこそ君にだけは言われたくないね。エイリア学園からも、お父様からも逃げ出したくせに！！」

「黙れっ」

地面に倒れながらも、上半身を起こしてリュウジは叫ぶ。

「君のサッカーは、お父様の理想に必要無かった！ だから認められなかった！！ 君が仲間さえ傷つけるサッカーを…自分の事しか考えないサッカーをするからだよ！！」

「黙れっ…ってんだろーっ！！」

馬乗りになり、首を締められた。ひゅっ、と空気が抜ける音。喉が絞られ、頭に血が上る。息が、出来ない。

「てめえに何が分かる…！？ あの方の為なら何でもやると誓ったのに…駒にすらされず、捨てられた俺の気持ちがお前に分かったた

まるかよ!!」

惨めだな、と。霞み始めた意識で、リュウジは思った。

本当に惨めだ。自分も彼も、同じくらい。違いがあるとすれば、その惨めさを認めているかいないかという事くらい。

不動はあの人に認められない現実に絶望して、エイリアから逃げ出した。そして影山に縋って再び希望を掴み取ろうとしたのに、結局彼にも見放されたのだ。

最初から別のサッカーを探していたなら、こんな事にはならなかったかもしれないのに。それに気付けないのは、度重なる悲運に不動が心を歪ませてしまったせいなのだろうか。

――俺を殺したきゃ、そうすればいいさ。

哀れだ、実に。

――でもどのみち、誰も救われやしないんだ。

今から取り戻せるモノがあるとしても。過ぎた時間が還る事など、二度と無いのだから。

「リュウジ!!」

「不動：お前っ！何やってるんだ!!」

窒息して、意識を失いかけた時。悲鳴に近い声と駆けてくる足音を聴覚が拾う。不動の身体の下から引き出され、リュウジは激しく咳き込んだ。

「だ、大丈夫!？」

目の前に心配そうなヒロトの顔。向こうでは暴れる不動が、円堂と風丸に取り押さえられている。

「ブツ殺してやるっ…！てめえだって、捨てられたくせに…捨てられたくせにっ！！」

不動が吠える。

可哀相な子。でも端から見れば、自分もそう分類されるのだろうか。

「もう…嫌だ…。もう嫌だよ…」

「リュウジ？」

視界がぼやけるのは、酸素が足りないせいじゃない。

「ねえ、ヒロト」

あの頃は触れる事すら赦されなかったほどの、格差があつて。なのに今はこんな風に彼の胸にしがみついて泣く事が出来るだなんて。でもそれを、幸せだなんて誤解してはならないのだ、自分は。

「俺達のサッカーはもう…誰かを傷つける道具じゃないよね？」

どうか、信じさせて。自分達はもう、人の形をした兵器などではないのだと。

「…うん」

ヒロトはただ抱きしめてくれた。その温かさに甘えなくなる自分が呪わしくて、涙がさらに溢れ出す。

闇は何処まで行っても闇なのか。世界はこんなに眩しいのに。

自分達はいつになったら、出口を見つけ出せるのだろうか？

青空はまだ遠すぎて（前書き）

『Liar game』から繋がってる話。白翼世界の話ではありませんがやや捏造設定あり。

微流血&ダーク注意。リストカッターなヒロトがいるので嫌悪感を抱かれる方は速攻逃げて下さい（この話はリストカットを推奨・擁護・否定するものではありません。また一部煌の過去経験談もモチーフにしております）。

青空はまだ遠すぎて

日本代表のユニフォームは、嫌いじゃない。

青は空の色で、かつて自分の副将を務めてくれていた彼女の髪の色でもある。また、天才ゲームメーカーたる彼のマントの色もそうだし、何より自分達の大好きな円堂のイメージカラーでもある。

それとも、円堂には黄色の方が似合うだろうか。お日様の色だ。彼にはびったりだと思う。

「…困ったなあ」

そう、好きか嫌いか、ではない。

ヒロトにとって困る事が一つある。ガイアのユニフォームはピッチリした長袖（と呼ぶのも些か語弊があるが）だったが、日本代表のそれは半袖なのだ。

自分は日焼けに弱い体質である。元々あまり体が丈夫な方ではない。ゆえにやや病的なほど肌に色素が無いのだ。

日に当たりすぎると、あっという間に日焼けが真っ赤な火傷に変わる。以前熱射病と日射病と火傷の三連コンボをくらって見事にぶっ倒れた事があった。

あれは辛い。

次の試合の日はいかにして乗り切るか。天気予報にはほとんどとうんざりした。八月並の気温だなんて馬鹿げてる。今更温暖化に文句を言ってもどうしようもないけれど。

きっと吹雪あたりも今、同じ問題に直面して悩んでいるに違いない。北海道育ちにはキツイ筈だ。

「どうしようかなあ…」

そして。

日焼け以上に大きな問題がヒロトにはある。

円堂達には詳しく語っていないが（鬼道あたりは薄々勘づいてるかもしれない）、エイリア学園には表向きの事実以上に深い闇がある。

その一つが、エイリア石に絡む幾つもの生体実験。最終的にダークエンペラーズの面々は石を首にかけるだけで効果を発揮したようだが。その段階に至るまでは幾つもの実験と改良があったのだ。

マスターランクである自分達は、直接エイリア石の力は借りていない。よって、下位ランクと比べれば実験の数は明らかに少ないが、それでもあちこち注射針やメスの跡が残っている。

誰かに見られたら面倒だし、見られたいとも思わない。ヒロトよりさらに傷跡の多いリュウジは本気で頭が痛いだろう。最近は二人ともクリームでどうにかごまかしている現状だ。

だが、いくらやっても隠しきれない傷もある。それが目下自分にとって最大の悩みであった。

「リストバンド、もっと大きいの買って来ないと……。でも変かなー
」

手首に走る傷。リストカット、という奴だ。

ただし誤解されないように言っておくと、ヒロトは鬱病ではないし死にたいわけでもない。誰かに心配されたくて傷をつけたわけでもない（そういう人もいるらしいが、正直自分は心配されたくないタイプだ）。

自分で言うのもアレだが。こういう傷を作るわりには、自分は真つ当な精神構造をしていると思う。

よく、聞く話は、切っても全然痛くないだとか。気付いたら切ってたとか、そういうもの。そのレベルまで行くと、早急なカウンセセリングが必要になるのだろう。

だとすればむしろヒロトのやり方がおかしいと人は言うかもしれない。理性的な自傷行為なんてそっちのが病んでるだろう、と。

――そんなに変かなー俺。

元はといえば、自分の中にくすぶる破壊衝動を抑える為に始めた事だった。ストレスが溜まると、とにかく色んな物をブツ壊したくなる気持ちは、多かれ少なかれ誰にでもあるだろう。

意外と思われそうだが。ヒロトはその破壊衝動が、人よりやや強い。ストレスを溜めやすいのかもしれない。ヒロトはそんな己の中の闇を、酷く恐れていた。

だからそれを発散させる為に、リストカットを始めたのだ。他人を壊せないなら自分を壊して発散させればいいなんて、我ながら単純思考である。

切ればそれなりには痛いし、血が出れば出るだけなんだかスツキリする。なんだか“ざまあみろ”という気分になる。自分を傷つけているのにおかしな話だ。

でも、それで他人から変な目で見られるのも嫌だし、仲間心配かけるのも嫌。別に死にたいわけでもない。だからいつも手加減に手加減をかさねて切った。すぐに跡が消えるように。

そして上手に隠れる場所を切るのが常だった。ジェネシスウェアは肌の露出が少ないので便利だったのである。

が。そこに来て今回の世界戦。半袖は悩みの種以外の何者でも無かった。

足首の傷は靴下で隠れるが（その実手首より足首を切る事が多かった。ごまかしやすいからである）、手首はそうもいかない。

大半の傷は目を凝らさないと分からないが、二三本の大きな傷がどうにも目立ってしまう。雷門との最後の試合の前に切った傷だ。うっかり力を入れすぎたのと、やや斜めに切ってしまったのが敗因である。

リストバンドから少々はみ出してしまふ。まだバレていないようだが、いつまで隠し通せるか。誰かと一緒に風呂にでも入ったら一発でアウトだろう。

――だったらやめろよって話だけでも。

なんとなく、古傷に爪を立ててみる。ちり、とした痛みが走って、瘡蓋がちよっとだけ剥がれた。

指先に付着する赤。こんなもんじゃ満足できないのが本音。サデイストな自分からしてもマゾヒストな自分からしても。

――他に壊していいもんなんか、無いし。

物を壊しても人を壊しても虚しくて、辛いだけ。唯一自分に傷をつける事だけがさほど辛くなかった。半ば消去法。

中毒になってるかもしれない。それはきっと良くない事だと、ヒロトの中の良心が、罪悪感が告げる。でもいつまで経ってもやめられない。習慣を変えるのはなかなか難しいものだ。

――どうしたもんかな。

ぼんやりと思う。自分が“エイリア学園”の生徒で無くなった事で、減ったストレスと増えたストレスがある。

円堂達の手前、自傷行為を控えなくてはいけない事自体がストレスだった。だが、大好きな義父と離れた事で、気が軽くなってしまった自分もいる。

酷い話だ。どんなに歪んでいても間違っている、義父を愛していたし義父が愛してくれていたのも確かなのに。

吉良が自分を見る眼が、いつも苦しくて。思い出すだけで何かを壊してしまいたくなるのだ。彼はいつも自分を愛しながらも、自分

の中にある別の誰かを見ていたから。

遠き日に、消えた幻。ヒロトに酷似した、別のヒロトを。

――どうしよう。また…やりたくなっちゃった。

救急セットと工作用カッターナイフ。どちらもスポーツバッグの中に入っている。ごそごそと中を漁り、カッターを出した、その時だ。

「ヒロト様」

突然開くドア。こんな無遠慮な真似をする人物は一人しかいない。ヒロトは抗議の眼差しで、そこに立つ人物を見る。

「いい加減ノックくらいしてよ、リュウジ」

リュウジもリュウジで、やや非難気味の眼だ。カッターと救急セットを用意していれば、自ずとしかそうとしている事は分かる。

そして彼は数少ない、ヒロトの性癖を理解している人物でもある。

「ノックしたら不意を打てないじゃないか」

「そりゃそうだけど。あとちよくちよく“様”付けしたり敬語喋りする癖は直して」

「…そっちは善処します」

「ほらゝまた」

「……」

呆れたようにため息をつくりュウジ。その顔には六割の疲れと、三割の悲哀と、一割の諦めがある。

その半分くらいの原因は自分だ。だから素直に、ごめんね、と謝った。謝ったところで繰り返すなら意味など無いが、彼にそんな顔をさせたいわけではないのだ。

申し訳ない、という気持ちもあるにはあるのだから。

「…それ、本格的に常習犯だね」

それ。リストカット。

リストカッターに無理に“やめろ”と言うのは逆効果。何故なら自傷行為で心の安寧を保っている例が大半だから——とどこぞのTVで言っていた。

ヒロトにもそれが当てはまるかは分からないが。実際リストカットでストレスを発散させているのだから、あながち間違いでもない気がする。

やめろ、と命令されても気が滅入るだけだ。ストレスの根本的原因が解決されない限り、どうしようもないのだから。

リュウジもそれが分かっているのだろう。だから悲しい顔はしても、言葉にして制止はしない。

否、出来ない。

「…偶には思い出してよ。見てる周りも、悲しいんだからさ。君だって…分からないわけじゃないでしょ」

そう言われると、正直キツイ。もしリュウジが自分と同じ事をしたら、きっと自分は悲しむ。

それが分かっているながら止められない自分は身勝手で、とても罪深い真似をしているのだろうけど。

「努力は、するよ」

それ以上に答えようがなかった。いけないこと。やめられるに越したことはない事だとは理解しているのだから。

「話変わるけどさ、リュウジ。不動に関して、そろそろ円堂君達か

らツツコミが入る頃だと思うんだよねえ」

「不動…」

ああ、まったくリュウジは分かりやすいつたら。さっきとはまた別の嫌な顔になる彼。

本当に不動が嫌いらしい。いや、嫌いとはまた違うのか。不動の方も妬みはあっても、リュウジを嫌っているわけではあるまい。

自分は確実に、嫌われてるし憎まれているだろうけど。

「意外だな。円堂君達、とっくにあいつの正体知ってるんだと思ってた。不動が何も語らなかつたって事だろうけど」

あのお喋りな不動が、重要な情報を何一つバラしていない。そればかりか彼がエイリア石を使っていた事すら、円堂達は気付いてなかつたらしい。

まあ、話によれば当時円堂達は影山絡みで手一杯だっただろうから――深く観察する余裕も無かつたのだろうが。

「それでも、聡い子達はなんとなく察しただろうし…不動の境遇もさ。だからって赦される事と赦されない事はあるけど…まあ確かなのは」

ベッドから体を起こすヒロト。これからの事を考えると面倒だし厄介だとは思うが。

「いつまでも現状維持とは行かないだろうね。チームの士気に関わるし」

どうせなるようにしかなるまい、と諦めの感情が先に立つ。悪い意味で達観しているのだ、自分は。

しかしリュウジや鬼道は、今後不動に関して多いに悩む事になる

だろう。さらには昨日の出来事。リュウジが不動に殺されかけたのであればもう、周りも問題から眼を背ける事は出来ない。

不動明王を追いつ出すか、受け入れるのか。どちらも難しく残酷な選択になるだろう。

不動は歪んでいる。故に、ジェミニストームから除籍され、影山に縋り下克上を図った。しかしその歪みは元はといえば不動本人のせいではないのだ。

「不動は俺よりもっと…病んだ自傷行為を繰り返すタイプだと思うなあ」

刃物より、無意識に爪で腕や首を引っ搔いてしまうタイプだ。苛々して、血が出るまで。ヒロトのその喩えに、リュウジは俯き、呟いた。

「幾ら傷をつけたって、辛い気持ちが消えるわけじゃないのに…」

ヒロトは嗤う。嗤うしかなかった。

「そんな綺麗事じゃ救われないって、君が一番よく分かってるでしょ」

そんな当たり前な言葉は聞きたくない。自分も、リュウジも。

「リスカする人間は、みんなそんな事分かってんだから」

なかない君と、嘆きの幻想。（前書き）

ファイフスセクターに制裁れた剣城と円堂の話。完全新作のシリーズです。白翼世界の話ではありませんが、あちこちそれっぽい捏造設定あり。

痩せっぽちの背中で、罪も罰も背負い込む子供に。円堂が語る、十年前の彼らの物語。

なかない君と、嘆きの幻想。

ずきり。ずきり。ずきり。

歩く度に体中が軋みを上げる。左腕が上がらない。左胸のあたりが時折刺すように痛む。肋骨に罅でも入っているのかもしれない。いっそ心臓まで粉々にしてくれれば良かったのに――剣城京介はそう思い、自嘲の笑みを浮かべた。

フィフスセクターに逆らい、雷門を勝利させてしまったその晩。京介は黒木に呼び出され――罰を受けた。冷たい牢に閉じ込められ、暴行され、折檻された。

昔、訓練に耐えきれず脱走したシード候補生が同じ目に遭わされていたのを思い出す。その時漠然と思ったものだ――自分もきつと最期はああなるんだろうな、と。地獄に墜ちるのは最初から分かっている。本当ならとっくの昔に、自分は死んでいた筈なのだから。

――まあ…今回はまだ生きてますよっ…と。

脚に傷をつけられなかった。そして翌日夕方の今、解放されてすぐ雷門の様子を見に行けと放り出されたという事は、自分はまだ見放されていないのだろう。聖帝の考えなのか、黒木達の考えなのか。いずれにせよ京介が知る由もない事だ。

ろくな応急処置もされていない体を、学ランでどうにか隠しながら敷地を歩く。放り出されたのは雷門のすぐ側だったが、今の京介は部室棟の場所に行くだけでも至難の業だった。目眩が酷い。水やら考えたくもない液体やらを飲まされ続けたせいで吐き気と寒気も酷い。傷はあちこち血が滲んで熱を持っている。こんな状態でも生き長らえるとは、つくづく自分は悪運が強い。

万能坂中のサッカーを潰した事に、後悔はない。だが、これから先を考えると怖くて仕方がなかった。自分の事はどうでもいい。し

かしこれで兄の体が一生治らなくなってしまうたら。兄に危害が及ぶような事になってしまったら。

耐えられる筈が、ない。あの日から自分はその為だけに生きてい
ると言っても過言ではないのに。

「くっ…あ…」

ついに身体が悲鳴を上げ、京介は膝をついた。一度止まってしまう
ったら身体はもう動かない。雷門のグラウンドは目の前なのに――
あと少しの距離だというのに。

――ああ、そういうこと？

唐突に理解が追いついた。何故フィフスセクターの大人達が罰と
いう名目で自分を暴行し、雷門のすぐ傍に放り出したか。偵察と言
われても、この身体じゃ満足な成果を得られる筈もない事は分かっ
ていた筈。ではどうして？

答えは単純明快。見せしめ、だ。ボロボロにされた京介の姿を雷
門の連中に見せて、絶望させ、その心を叩き折る為。フィフスセク
ターに逆らえばどんな目に遭うか。京介は都合のいい生贄羊という
わけだ。

――なんか、奴らの思惑通りになんのも癪だな…。

直前で気付いてラッキーだった。このまま隠れていれば、雷門の
奴らには見つからない。自分が我慢して、息を殺して、誰にも助け
を求めなければそれでいい。

なんだ簡単な事じゃないか。今までと何も変わらない。ほんの少
し痛いのに耐えればそれでいい。フィフスセクターは“様子を見て
こい”と言っただけで、“雷門の前に姿を晒せ”とは言っていない

から、命令違反にもならない。その真意が、どこにあるにせよ。

——って…何あいつらの心配なんかしてんだ俺は。別にどうでもいいだろが。

雷門なんかどうなっても構わない。潰してやると言ったのはフィフスセクターの指示であると同時に京介自身の意志だった。のうのと健康体でサッカーをやって、それでいて“自分達は不幸です”といった顔をしてる奴らが恨めしくて仕方がなかった。

本当の地獄など、何も知らないくせに。奇麗事ばかり並べて、自分達は正しいですと主張する。実に苛つかせてくれるじゃないか。どうぞ御勝手に。好きなように滅んで下さいな。そう高見の見物を決め込んでいた——その筈だったのに。

定められていた筈の何かが狂い始めていた。松風天馬と円堂守。あの二人のせいで。

「…最悪だ」

「何が最悪なんだ？」

「!？」

南校舎の陰に座り込み、毒づいたなら思わぬ反応。京介はぎょっとして振り向き、直後盛大に舌打ちをした。

何であんたがこんな場所にいる、円堂守。

「心配したんだぞ？部活どころか学校にも来てないって言うから」

そして京介の姿を上から下まで見て、やや顔を強ばらせる。

「随分派手にやられたな」

「…うるせえ。アンタに関係ないだろ」

伝説の二代目イナズマイレブンのキャプテン。十年前少年サッカーで世界一になったチームの守護神。そして——その言葉とプレイで見る者を次々虜にしていた“浄罪の魔術師”。

フィフスセクターでも要注意人物として名前が挙がっていたし、情報も叩き込まれている。正直、第一印象からして悪かった。円堂と同じチームにいた“豪炎寺”には懂れていたというのにおかしな話だが――彼の眼も言葉も恐ろしく純粋で、ゆえに嘘くさく思えたのだ。

奇麗な夢だけ信じて大人になれる人間などいない。そう見える人間がいるならそれは余程の馬鹿かともないペテン師のどちらかだろう。コイツは後者に違いない。宗教めいた言葉で雷門を洗脳し、一体何を企んでいるというのやら。

それとも本気で十年前のサッカーを取り戻せると信じてるドリマーなのか？ いずれにせよ京介にとって不愉快である事に違いは無かった。

「関係ないわけないだろう？ 俺はこれでもお前らのカントクなんだから」

はあ、とため息をつく円堂。お節介なこの男のこと、手でも差し伸べられるのかと思った。そうしたら思い切り払ってやる、とも。こんな無様な姿を見られただけで腹が立つのに、お情けまでかけられたら屈辱なんてもものじゃない。

だが円堂の行動は京介の予想を超えた。なんとそのまま“ひよい”っと言わんばかりに京介の身体を抱えあげてしまったのである。

「ちよっ：何すんだ！ 降ろせ！！」

「はいはいイイ子だから静かにな」

大人といえど、そうガタイがあるわけでもない。寧ろ細身にさえ見えるというのに、かつて世界制覇を成し遂げたキーパーの腕力は伊達じゃなかった。

もう恥ずかしいなんてものではない。ジタバタ暴れるも力で叶う筈もなく、そもそも重傷の身で出来る抵抗などたかが知れている。

「暴れるなよ。治療するだけだ。いくらなんでもその怪我ほついたらヤバイだろ」

グラウンドを通られたら、とヒヤヒヤしたが。円堂はまるで京介の危惧を読み取ったかのように、人目につかない裏口から校舎の中へ入っていった。向かった先は保健室。

「今保健の先生いないんだ。見られる心配ないぞ」

誰も何も訊いてないのに、そんな事まで言ってくる。京介は混乱した。なんなんだコイツは。その名の通り本当に魔術師だとも言うつもりか。

「お前を見てるといろんな奴を思い出す」

京介をベッドに下ろし、薬品棚を漁る円堂。もうどうにでもなれ、と京介はベッドに身体を預けた。抵抗する気力体力が物理的に無かった、が正しいかもしれない。

「昔話をしてやる。…十年前の事だ」

化膿止めを片手に、唐突に円堂は話し始めた。

「ある少年には、両親がいなかった。いたのは妹が一人だけ。少年にとって妹を守る事が世界の全てだった。やがて別々の里親に引き取られた後も、少年は妹と共に暮らす為なんでも耐えた。教育係の指示のまま妹と連絡を絶ち、虐待まがいの教育に耐え、サッカーを勝利の為の道具にして」

でも少年は、再会した妹に拒絶されたんだ。円堂の言葉に、京介

は目を見開く。

「何故ならば妹の願いはただ一つ。離れ離れでも昔のように…笑顔の絶えない家族でいる事だったから。妹を守る為に本当の笑顔を失くしかけていた兄が、妹はショックで堪らなかったんだろうな」

円堂の手が、京介の動かない左手に触れる。ズタズタになった白い腕にその手が触れた瞬間、走った痛みは。傷のせいだけでは、無かったかもしれない。

「また別の少年。…彼も両親がいなくて、義理の父の元で育てられた。義理の父に愛される為に、父が望むままサッカーを破壊の道具にし、過酷な生体実験に耐え、人形として生きようとした」

人形。その言葉が胸にずしりとのしかかる。自分も――フィフスセクターの人形？ いや、違う。京介は一瞬よぎった考えを否定しようとして首を振った。自分は自分の意志でフィフスセクターに従う事を選んだ。人形なんかじゃない。だって自分が望んでいるのは――。

「少年はやがて気づいた。自分はただ、誰かの身代わりとしてじゃなく…自分の望むままのサッカーがしたかった事に」

がんっ、と。頭を殴られた、気がした。身体が震えるのは何故だろう。円堂はそんな京介をちらりと見て、しかし何事もなかったように手当を続けた。

腕に、首に、胸に。包帯を巻く、その手が――痛い。

「三人目。…その少年には、自分にそっくりな弟がいた」

弟。きょうだい。

やめろ、と言いかけた喉が乾き、掠れる。やめてくれ、もう。
昔話にかこつけてこれ以上自分を追い詰めるな。剣城京介を暴こうとするな。

「少年の弟と両親は目の前で死んだ。それは不可避の災害のせいだったけれど、生き残った少年は自分を責め続けた。“どうして自分が生き残った？”」

『どうして僕が無事だったの』

「“どうして自分よりずっとサッカーが上手くて、強かった弟が死ななくちゃならなかった？”」

『どうして、僕よりずっとサッカーが上手い兄ちゃんの足が、動かなくならなきゃならなかったの？』

「“自分さえいなければ良かったのに”」

『僕さえいなければ良かったのに』

「少年はその果てに心を病み、自分の中に弟の人格を作り出した。自分が弟になろうとしたんだ。でも…生きた人間が死者になれる筈はない。…何より少年は他の誰の代わりでもない」

お前は、優一の代わりにはなれない。そう断言された気がして、目の前が真っ暗になった。違う。自分はそんな、そんなつもりでは。

「…何が言いたんだよ、アンタ」

頭が痛い。心臓が痛い。気がつけば、京介は怒鳴っていた。

「そうやって人揺さぶって追い詰めて！一体何のつもりだ、何がしたいんだ！！」

兄との事は円堂も知らない筈だ。なのに、さっきから不愉快でたまらない。まるで当てつけた。お前なんぞそいつらに比べたら幸せなんだとでも言いたいのか。

「…剣城」

やがて円堂は口を開く。

「俺はお前が、何故そこまで苦しんでるか分からない。俺の仲間達がそうだったように、お前も地獄を見たんだろう」

でもな、と彼は微笑んだ。

「これだけは知ってる。あいつらが自分のサッカーを取り戻せて笑えるようになった事。…お前にだってそれが出来るって事」

「……！」

「忘れるな」

円堂はぼん、と京介の頭を撫で、保健室を出て行った。

「助けてって、言っていないんだ。お前にも幸せになる資格はあるんだから」

呆然と。京介はその背中を見送った。どうして視界が滲むのだらう。

助けてやる。もしかしたら生まれて初めて、誰かにそう言われたのかもしれない。

マリアは神に祈らない【長編試し読み】（前書き）

活動報告でぼそつと呟いてました、遊戯王5D's×イナズマイレブン混合長編の一場面です。：よく考えたら白翼の後の物語なので、中途半端に連載を始めると白翼の盛大なネタバレになる気がしてなりませぬ：！どうしたものか。

とりあえず、吹雪君が氷結界デッキとシンクロ使って鬼柳さんとデュエルしてます。煌はデュエル知識が乏しい超のつく初心者なので、デュエル内容についてのツツコミはしないで頂けると助かります（汗）

マリアは神に祈らない【長編試し読み】

かつて崩壊の名を冠した街に、静かに砂塵が吹き荒れる。鬼柳は困惑していた。今対峙しているこの、吹雪士郎とか名乗る少年。一体何者だろう？

そして何故デュエルを持ちかけてくる？

「デュエルで俺がお前に勝ったら、真実を教えるって事…か？」

今の流れだとそう受け取るのが自然だろう。だが吹雪は首を振った。

「いいえ。勝敗に関わらずお教えします。…というか僕はデュエルを始めたばかりの初心者なので、とても鬼柳さんには勝てないと思いますし」

「勝てないと思うのに戦うのか？」

「ええ」

鬼柳自身、勝てない勝負はしない——なんて質ではない。皮肉な事に一番勝率が高かったのは、死神と呼ばれ自暴自棄になっていた時だ。そうでなくとも考えるより動くのが性にあっていたので、サティスファンクション時代も無謀な勝負を仕掛ける事がしょっちゅうあった。

しかし、吹雪はパツと見そういうタイプではなさそうである。負けて本望だとか、後先考えないだとか、そんな言葉からほど遠い人種に見えるのたが。

「デュエルは相手を知る手段であり、誇り高きデュエリストは挑まれた勝負を断らない。そう聴いています」

吹雪は真っ直ぐ鬼柳を見て言う。

「その上で伺います。僕と闘って頂けますか？」

なるほど――ぼんやりした見た目で随分と肝が座っているではないか。さりげなく鬼柳の自尊心をも煽っている――誇り高きデュエリストならば断るまい、と。

どうやら、彼は彼なりにデュエルを通じて知りたい事があるらしい。

「：いいぜ。デュエルだ、吹雪」

吹雪が着けているのはこの街で主流のショットガンタイプのディスクではない、通常タイプだ。こちらもそれに倣うべきだろう。

気が利く事に、鬼柳を追いかけてきたウエストが既に用意してくれた。

「サンキュ、ウエスト」

「うん：頑張ってたね、鬼柳さん」

「おう」

何やら不安げな顔のウエスト。多分さっき青ざめていた鬼柳の様子を見ているからだろう。

大丈夫だ、心配しなくていい。そんな意図をこめて鬼柳はウエストの頭を撫でた。改めて吹雪に向き合い、ディスクを構える。

相手を見定める、ほんの一瞬の間の後。

「デュエル！」

神聖なる戦いの議が始まった。ライフは互いに4000。コンピューターがランダムで先攻が決まる。選ばれたのは、吹雪の事の方だった。

「僕の先攻、ドロー」

さて、彼はどんなデッキを使って来るだろう。初心者だ、と言うからにはそう面倒な戦法は使ってきまい。

「僕は“氷結界の舞姫”を、攻撃表示で召喚」

青い髪に紫のマフラーをした少女が、粉雪を舞い散らせながら出現する。☆4、魔法使い族で水属性、攻撃力1700守備力900のモンスターだ。

先攻は攻撃出来ない為、吹雪のバトルフェイズはスキップされる。彼はカードを一枚伏せた後、魔法カードを発動させた。

「“氷結界の紋章”を発動。このカードの効果で、僕はデッキから“氷結界”と名のつくモンスターを一体手札に加える事が出来ます」
デッキを取り出し、カードを一枚選ぶ吹雪。

「僕が選ぶのは、“氷結界の水影”。これでターンエンドです」

これで吹雪の手札は四枚。場には攻撃表示の“氷結界の舞姫”と伏せカードが一枚になった。どうやら吹雪はその名に相応しく氷結界デッキを扱うらしい。

“氷結界の水影”――☆2、水族で水属性、攻撃力1200に守備力800のモンスターだ。攻撃力は大した事はない。問題はこのモンスターがチューナーであるという事。

――シンクロ狙いか、こいつ。

ならば、次の吹雪のターンまでに舞姫を破壊しておかなければ。

厄介なシンクロ召喚などやられる前に防ぐに限る。

「俺のターン…ドロー」

さて、どうするべきかな。鬼柳は考える。

自分のお気に入りのカードと戦略によってデッキは組まれる訳だが、その時その時で欲しいカードは異なる。望んだカードが来るか否かは時の運だ。しかしたとえ望まないカードが来たとしても、その時配られた手札で戦術を練られるのが強いデュエリストである。

今鬼柳が欲しかったのは、吹雪の伏せカードを破壊できるカードだった。チューナーを手札に加えたならば当然、次のターンにチューナーを召喚してシンクロを狙ってくる。その為には場にいる“氷結界の舞姫”をなんとかしても守りたい筈だ。

とすればあのカードは恐らく、鬼柳がモンスターを召喚した時発動する“落とし穴系”か、攻撃した時発動する“ミラフォ系”のトラップである可能性が高い。モンスターを召喚する前にあの伏せカードを除去したかったが――残念ながら狙ったカードは手札に来てはくれなかった。

――ま、仕方ないか。

「俺は“インフェルニティ・ビースト”を攻撃表示で召喚」

不思議な黒いオーラを放つ犬が出現する。獣族で闇属性。攻撃力1600に守備力1200のモンスターだ。

「さらに俺はこいつに、装備魔法“黒いペンダント”を使う」

“黒いペンダント”。装備したモンスターの攻撃力を500アップさせることの出来るカードだ。またこのカードが墓地に送られた

時、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与えることも出来る。

これで“インフェルニティ・ビースト”の攻撃力は1600から2100にアップした。“氷結界の舞姫”を倒すことが出来る。

――仕方ない。誘いに乗ってやるさ。

“インフェルニティ・ビースト”の効果はこのカードの攻撃宣言時、相手の罠・魔法の発動を封じるというもの。ただしこの効果は自分の手札が0の時にのみ発揮されるという制約がある。

現在まだデュエルは序盤、鬼柳の一番最初のターンの為、手札はたくさんある。効果を発動させることは出来ない。

吹雪が動かないところを見ると、伏せカードは召喚トラップではなかったのだろう（もしくは“インフェルニティ・ビースト”が条件に当てはまらなかったか、だ）。とすれば攻撃トラップである可能性が高い。

このまま攻撃宣言は気が引けるが仕方あるまい。それにせめて一矢報いる策としての“黒いペンダント”だ。攻撃カウンターで“インフェルニティ・ビースト”が破壊されれば“黒いペンダント”も墓地送りになる。吹雪にまず500ダメージを与えられるという寸法だ。

「バトルフェイズ！俺は“インフェルニティ・ビースト”で“氷結界の舞姫”を攻撃するぜ！」

鬼柳の声に呼応し、ビーストが吠えて舞姫に襲いかかる。

さあ、どう出る吹雪？

「トラップ発動！“くず鉄のかかし”！！」

やはりと言うべきか、吹雪は舞姫を護って来た。だがまさか“くず鉄のかかし”が来るのは。あれは面倒なトラップだ。遊星のお気に入りカードなのでよく知っている。

場に出現したかかしによって、“インフェルニティ・ビースト”の攻撃は阻まれた。“くず鉄のかかし”の効果は一ターンに一度相手の攻撃を無効果するだけなので、“インフェルニティ・ビートル”は破壊されない——つまり“黒いペンダント”もそのままだ。吹雪にダメージは与えられない。

問題はこのカードが発動後墓地に行かず、再セットされるということ。つまり“くず鉄のかかし”を除去しない限り、鬼柳の攻撃は一ターンに一度必ず無効果されてしまうのである。

意図してか偶然か。吹雪は鬼柳がある意味一番嫌な手を打ってきただけだ。

「：俺は永続魔法“インフェルニティガン”を発動」

甘くみない方がいい。鬼柳は判断した。自分のこのテの勘はよく当たるのだ。“インフェルニティガン”も万全を期す為のカードである。

このカードにより、自分は一ターンに一度手札から“インフェルニティ”と名のつくモンスターを一体墓地へ送ることができる。また、自分の手札が0の時フィールド上に存在するこのカードを破壊して、墓地に存在する“インフェルニティ”を二体まで自分フィールドに特殊召喚できるのだ。

「このカードの効果により、俺は手札の“インフェルニティ・ガーディアン”を墓地に送る」

“インフェルニティ・ガーディアン”。悪魔族閥属性、攻撃力1200に守備力1700のモンスターだ。それを吹雪に見せて、鬼

柳は墓地スロットへ入れる。

「カードを一枚伏せて、俺はターンを終了するぜ」

これで鬼柳の手札は一気に残り一枚に。

伏せたカードは“チャリオット・パイル”。便利な永続罠だ。一ターンに一度自分のメインフェイズ時相手ライフに300ポイントダメージを与えることができる。また、一ターンに一度相手が攻撃宣言した時、800ポイントのライフを払う事でそのモンスター一体を破壊できるのだ。

次のターン、もし“インフェルニティ・ビースト”が破壊されて場がガラ空きになっても、このカードがあればなんとか凌ぐ事が出来る。

「僕のターン、です」

再び吹雪のターンになった。吹雪がカードをドロし、彼の手札は五枚になった。それを見つめ、しばし考え事をしている様子である。頻繁に長考するのは、始めたばかりなら仕様のない事だ。

「……僕は、先ほど手札に加えた“氷結界の水影”を召喚します。攻撃表示です」

“氷結界の水影”――水を纏った紫色の衣の忍者がフィールドに現れる。チューナーモンスターの水影の☆は2。吹雪の場にいるもう一体のモンスターである“氷結界の舞姫”の☆は4。これで吹雪は☆6のシンクロモンスターを呼ぶ条件が整ったわけだ。

――見せてみる、お前のエースを。

それは予感。きつとこのターンで、自分は吹雪のエースモンスターを拜めるだろう、という。

柄にもなく、鬼柳はわくわくしていた。

「永遠の名を冠す者よ、我が名の元にその姿を示せ…！」

吹雪は高らかに、その名を叫んだ。

「シンクロ召喚！降誕せよ、“氷結界の龍 ブリューナク”！！」

それは――水色に煌めく、とても美しい龍だった。遊星の操る“スターダスト・ドラゴン”に似ているが少し違う。スターダストが流星の美ならば、こちらは流水の美。思わず見とれてしまいそうなほど神々しい姿に、つい嘆息してしまった。

“氷結界の龍 ブリューナク”。☆6、海竜族で水属性。攻撃力2300に守備力1400――数字だけみれば大した事はない。だが鬼柳は身を以て知っている。デュエルにおいて上辺の攻撃力は大きな問題でないという事を。

「紹介します。僕の一番お気に入りドラゴンがこの子なんです」

「綺麗だな」

「でしょ？でも綺麗だけじゃないんですよ」

ね、と吹雪がブリューナクを見る。なんだかモンスターと会話しているようだ。実際それができるデュエリストも稀にいと聞く。

「僕はまだ初心者だけど…この子がいればっなんとかなるかな…なんてそう思っちゃうんです」

だから、と吹雪は続ける。

「鬼柳さん、貴方相手でも…ただ負けるだけの勝負なんかしない。勝ちにいきますよ！」

「…面白え」

鬼柳は思った。

久々に、楽しいデュエルが出来るかもしれない。

「この俺を満足させてみる、吹雪士郎」

最期の嘘と、誰かの愛と【前編】（前書き）

突発的に書いてしまいました、イナズマイレブン三期と爆丸バトルブローラーズ（二期…ニューヴェストロイア）のクロスオーバー中編。四部作になります。一応爆丸かイナズマイレブンのどちらかを知らなくても読めるはず…。

ヒロト&緑川VSプリンス・ハイドロン。ヒロトと緑川のチートっぷりがハンパない&二人が爆丸とリアルファイトする話なんで要注意。

またさりげなく爆丸三期四期のネタバレを含んでますのでそれもご注意くださいませ。

（とりあえず爆丸知ってる人は友達になって下さr y）

最期の嘘と、誰かの愛と【前編】

待ち合わせまで、あと十分。緑川はあれでマメだから、何もなければきつと五分前には来る事だろう。噴水広場の前で、ヒロトはソフトクリーム片手に立っていた。今日はじんわりと暑い。こんな時は多少値が張っても、アイスに手を出したくなってしまう。

「暑いなー…」

ヒロトは今、鳩留町という町にいる。休日のちょっとした遠出だ。最近出来た宇宙科学館にどうしても来たいと緑川がごねたのでその付き合いである。本当は瞳子に連れてきて貰う筈だったらしいのだが、彼女は急遽仕事が入って行けなくなってしまったらしい。

ヒロトは半ば保護者代わりだった。同い年で保護者も何とも言われそうだが、実際そうなのだから仕方ない。緑川は危なっかしいのだ。熱中すると周りが見えなくなって時間も金銭感覚もすっ飛んでしまう。買い物も大好きで、以前ふらふらと裏路地に入ってしまった危ない目に遭った事もあった。

ついでに言えば。緑川の中性的で愛らしい容姿（ポニーテールも問題じゃないだろうか）は、何やら男のセンサーに引っかかるものがあるらしい。女の子に間違われてナンパされる事が頻繁にある。そんな時他に誰かがいれば対応可能なのだが、そうじゃないと半ばパニックになったまま流されてしまうのが緑川だ。フォローが絶対いる。残念ながら。

ヒロトはその点、自分で言うのもなんだが完璧だった。瞳子の手伝いで、孤児院経営の仕事を回したり事務処理したり電話対応したりはお手の物。トラブルには非常に強い。悲しい事にヒロト自身も女の子に間違えられてナンパされた経験があったりするが、“丁寧迅速にお断り”が出来るので面倒になった事は一度もない。

――できれば此処に来るのも一緒に良かったんだけど。仕事がない。
…。

瞳子のフォロー及び、エイリア事変の事後対応。それでヒロトこの町の近くまで来ていたので、午前仕事を片付けて昼過ぎに落ち合おうという話になったのだ。

元エイリアのメンバーは殆どが同じ家で同居している。その住所から此処に来るには、電車を二本乗り継いで一時間はかかる。順調に辿り着ければいいのだが。

――ん？

その二人組が視界に入ったのは、偶然だった。

一見普通の警察官に見えるが、随分と若い。まだ十代――片方に至っては十代半ばに見える。銀髪に紫眼の目つきの悪い青年（こちらは二十歳手前といったところだ）と、淡い金髪に碧眼の爽やかな笑顔を張り付けた青年（こちらは十五歳前後だろう）。が、何やら違和感があるのは気のせいだろうか。

どちらも整った容姿ではあるが、銀髪男の方はどうも不良じみている。道を聞いてきた男性がガンつけられて逃げていた――あれは駄目だる警察官。お巡りさんというよりあれじゃあヤクザだ。

もう片方の金髪は女の子達にキャーキャー言われて笑顔で手を振っていた。対応は間違っていないが、なんだかホストみたいだ。まあ世の中警察官にもいろんな人間がいるだろうから、細かなツツコミはしないけれど。

彼らを観察してみるのも暇つぶしだ。ヒロトはしゃくり、とソフトクリームのコーンをかじる。これももうすぐ食べ終わってしまうだろう。

「…なかなか連中、尻尾を出さないね」

ふと、その声が耳に飛び込んできた。発したのは金髪の青年だ。

「何処に籠城してるんだか。早く探し出さないと父上のご機嫌を損ねてしまう」

――父上？

さっきの爽やかな笑顔から一転、青年はイライラした様子で髪を弄くっている。恐らく無意識にやってしまう癖なのだろう。

「六属性エネルギーの入手…ってな。地球くんだりまで来て面倒くさいぜえ」

「そう言ってくれるなシャドウ。全部入手しないとBTシステム起動しないって言うし。まあ科学者じゃない僕に分かることも少ないんだけど」

「ヒヤヒヤヒヤ、プリンス・ハイドロン様にも分かんねえ事があるとはなあ！」

「大丈夫だよ。少なくとも君より脳みその容量はあるからね」

「ああ！？」

金髪はハイドロン、不良というかヤクザのような銀髪がシャドウ、というらしい。何やら雲行きの怪しい会話だ。六属性エネルギー？ BTシステム？ いやそれよりも、“地球まで来た”って？

――こいつら異世界の人間か？

世界はとても狭く、知覚できる範囲などたかが知れているが。それを知る者にとっては世界は一つじゃない――即ち、並行世界乱立論。または多次元世界説。ヒロトも論文を読んだ事がある。なかなか興味深い学説だった。

世界がいくつもあるなんて、馬鹿げてる。今までそう言って切り捨てられてきた論だったが、ある出来事をきっかけに事実である事が証明された。それが一年前の、“爆丸騒動”である。この騒ぎについて説明する為にはまず、“爆丸”というイキモノについて話をしなければならぬ。

一年前の冬。空からたくさんのカードが降ってくるという、不思議な現象が起きた。カードを拾ったのは一部の大人と大多数の子供達。大人は得体の知れぬカードに、殆ど興味を示さなかったのだ。

カードから現れたのは、不思議なモンスターだった。普段は丸い球の形をしているが、条件を満たすと実体化するモンスターである。その生き物達を、球になる形状から“爆丸”と呼び、子供は慣れ親しんだ。

爆丸でバトルゲームを作ったら面白いのではないか。そう考えてコミュニティを立ち上げ、爆丸バトルの公式ルールを作った子供達がいた。バトルブローラーズ。十歳から十四歳の少年少女六人組である。

――爆丸バトルは世界中で流行した。お日様園にもカードは落ちてきたけど……誰も拾わなかったんじゃないかな。

あの頃は一年後の計画に向けて、最終調整でピリピリしていた。娯楽なんでもってのほか。毎日生体実験とサッカー訓練に明け暮れていた頃だ。ぶっちゃけ、世間の騒動についてもテレビで見た僅かな知識しかない。

爆丸の正体は、異世界一ワンダーレボリューションを生きるモンスター達だった。どうやらその異世界で事件が起き、爆丸達が地球に弾き出された結果、カード化して空から降ってくる事態になったそう。

爆丸の能力は実体化する。無闇にバトルを行えば、その地域一帯が焼け野原になりかねない。異世界トラブルから始まった事件は地

球にも及び、実際日本にも被害が及んだ。最終的にはバトルブローラーズの子供達が、爆丸バトルを広めた責任をとって――かは知らないが、自ら事の収拾に奔走したそう。それが一年前の爆丸騒動である。

その後。地球にいる爆丸達の数は相当減ったと聞いている。バトルの危険性も考慮し、大多数をワンダーレボリユーションズに帰した結果だそう。バトルブローラーズだけはまだ爆丸を所持しているという噂もあるが、真偽のほどは確かではない。

――まあ何にせよ。あの騒ぎのおかげでみんなが知った訳だ。異界は確かに存在する……ってね。

こちらから異世界に渡る技術はまだ開発されていない。少なくとも表向きに発表されたものはまだない。しかし、異世界からこちらに渡る技術のある者がいても不思議ではないだろう。

――つまりあいつらは異世界から来て、警官に成りすまして……とそりや言動もおかしくなるよねえ。

ヒロトはぶしつけにならない程度に、観察を続ける。異世界から来たエイリアンが、この星に一体何の用だと言うのだろう。

「ヒロトーお待ちせつ！遅れてごめんね」

パタパタと足音を立て、緑川が走ってきた。きっかり五分前。にも関わらず“遅れた”と表現するのが緑川らしい。ヒロトの律儀さを知ってるからこそその発言だろう。

「大丈夫だよ緑川。丁度ソフトクリーム食べきったところ」

「あー、いいなあ俺もほしー」

「お小遣い貰ってるでしょ。自腹でどうぞ何千円でも買っておくれ」

「……俺が超甘党なの知っててそれ言う？」

膨れっ面な緑川。たが事実だ。緑川と吹雪と風丸に甘いモノを奢ると地獄を見る。イナズマジパンの暗黙の了解である。彼らをスイパラに放り込んだらエラい事になったのは記憶に新しい。

もう帰ってくれなんて店長に土下座される事になるなんて、一体どんだけ凄まじいんだと言いたい。

「？何見てるのヒロト」

「リアルエイリアン」

「……まじ？」

緑川は眼をぱちくり。やっぱり可愛いんだよなコイツ、と思うヒロトである。俗に言う“弟にしたいタイプ”だ。砂木沼に可愛がられるのが分かる気がする。

「あの二人の会話、現在進行形で立ち聞き中。特にあの銀髪の彼は声がデカイ」

ちよいちよい、と指であちらを差し示す。そうこうしている間に、あちらさんは口論になっていた。シャドウがほぼ一方的に怒鳴っている。こちらの視線にも気付く気配がない。

「シャー！だーかーらお前のやり方はまだるっこしいんだよ！いいじゃねえか、このへんの街適当にぶっ壊してあぶり出せば！」

「相変わらず君はやり方が下品だね！そんな事して目立って、地球人どもに警戒されたら厄介じゃないか！」

「そしたら片っ端から！皆殺しにしてやらあ話は終わりだろお！？」皆殺し。その単語に思わずぎょっとして顔を見合わせる。その直後、ヒロトの脳にあるビジョンが叩きつけられた。

広い荒野のド真ん中。バリアに守られた黒い卵形の機械。

逃げ惑うのは、球になった爆丸達。

機械から放たれる光。

爆丸達が次々消し飛んで――。

「ぐっ…」

「ヒロト!？」

突然頭を押さえて呻いたヒロトに、緑川が心配そうな声を上げる。ヒロトには、不思議な力があつた。人の心を読み、悟り、操る力。超能力の分野ではESP―サイコメトリだとかマインドコントロールに分類されるらしいが詳しくは知らない。

ただこの力が異能である事は知っていて、あまり使わないようにしている。京都では邪魔をしてきた子供を穏便に退かす為、やむを得ず使っただけだ。ヒロトの意志できちんとコントロール出来るようになるまで、何年かかった事か。

それでも稀に、強すぎる感情や残留思念は意図せずにして流れこんでくる。今のはまさにそれだ。

「何? 何か見えたの、ヒロト?」

緑川はヒロトの力を知っている。ヒロトが突然頭痛を訴えた時は、なんらかのビジョンに当てられた可能性が高い事も。

「…全ての爆丸の抹殺。そして全次元世界の支配。父上の望みを確実に叶える為に…計画は慎重に運ばなければ」

ハイドロンは静かに、しかしどこか歪んだ声で意志を示した。もう間違いない。

「…尾けるよ、緑川」

シャドウがまた何かを喚き、大股でどこかに歩き去った。ハイドロンは呆れた様子で逆方向へ。チャンスだ。

「あいつら…とんでもない兵器を造る気だ」

自分達は爆丸に愛着はないけれど。でもこの世界は、違う。
やっとな楽しいサッカーが出来るようになったのに、それを何処の
誰とも分からぬエイリアンに滅茶苦茶にされてたまるものか。

「…仕方ないなあ、もう」

その緑川の言葉は、同意だった。二人は頷き合い、ハイドロンの
尾行を始めたのだった。

最期の嘘と、誰かの愛と【中編1】

父上は、僕を愛してくれてはいないの？

今まで何度そう問いかけたかった事だろう。しかし出来なかった。もし肯定されたら、もう立ち上がれなくなるのが目に見えていたから。自分はヴェスターの皇子。国王である父の命を忠実に果たし、父の望みの為に心血を注ぎ、いずれその意志を継いで王座に着くのが役目。それだけの為に生まれた筈だ。それを否定されてしまったら――後には何も残らない。

だから願ってはいけない筈だ。認めて欲しい。誉めて欲しい――など。

「はぁ…」

ハイドロンはため息を吐いて、一人歩を進めた。警察官の姿は意外と目立つらしい。自分の容姿レベルに自覚はある。女の子達に黄色い声を上げられるのは満更でもないが、今は一応潜入捜査中なわけ。目立つのはあまり好ましくない。

結局、私服姿で一人歩く羽目になっている。頭に血が上ったシャドウもどこかに行ってしまったし（だから奴の保護者はミレーヌに任せるべきなのだ、彼女相手なら何故かシャドウも大人しいし）、相変わらずバトルブローラーズも見つからない。ハッキリ言って、手詰まりだった。

ヴェスター国王である父は、野望と牽引力に優れたカリスマであった。あまり知られてはいないが爆丸バトルの腕も立つ。増える人口増加から、異世界への移住が決まったのは一年前。都市ごと移築するわけだから大変な事だ。準備には半年を要した。その移住先の世界を探すのも。

自分達が辿り着いたのは、ワンダーレボリユーションという世界。

人間のいない、爆丸というモンスター達が生きる地。爆丸は手懐ければいい娯楽と兵器になる――それを知った父・ゼノヘルドは、爆丸から意志を奪い、国民達に玩具として与え。兵士達には兵器として貸し出した。

しかし。爆丸が知的生物だと知った一部国民が、爆丸解放運動を展開。それにより爆丸を扱った生体実験の数々が明るみに出てしまい、国民の王室への批判が高まる結果となった。父はやむなく皇族と自らの専属部隊・H E Xを連れて亡命（シャドウもH E Xの一人だ）。今に至るといいうわけである。

『我々をコケにしおった連中め：今に見ているがいい！』

父は復讐と、全次元世界の掌握を野望として掲げた。その手始めに、まずはワンダーレボリユーションズの爆丸達を皆殺しにする兵器――B Tシステムを生産。その起動する為の“鍵”を自分達に持ってくるように命じたのである。

それはワンダーレボリユーションズを永きに渡り守ってきた、古の六爆丸の力。六種の属性エナジーだ。当初父は自ら六爆丸達を襲撃しエナジーを奪い取ろうとしたのだが、彼らはいまわの際に別の爆丸達にエナジーを譲渡。その譲渡先が、かつてワンダーレボリユーションズを救ったとされるバトルブローラーズが扱う爆丸達だったのである。

自分達が狙われていると知ったブローラーズは籠城を選んだ。バリアを張って自らを隠し、地球のどこかに立てこもってしまったのである。一刻も早く探し出さなければ。父の怒りに触れるのも時間の問題だろう。

――ほんと、骨の折れる作業だよな。

とにかく今は僅かでもいい、ブローラーズの居場所を探り当てる

為の手がかりが欲しい。結局のところ人海戦術で事にあたるしかないのが現状だった。

“ 貴方が望んでくれさえするのなら

誰かの身代わりでも構わないと思った

だって私は きっと貴方に逢う為に

生まれて今日 此処にいるのだから”

「……」

思わず振り返る。オープンカフェで流れている有線放送だ。確かにラストエデンとかいうグループが歌ってる曲だったはず。

『L i a r g a m e』。嘔吐き、遊戯。嘘でもいいから愛されたいと願う、そんな歌だ。

“ 幸せというパズルピースを

手探りで繋ぎあわせてきたけど

どうしてなの？ 時間をかけても

最期の絵が完成しないの”

「…忌々しい歌詞」

“ 嘘を吐いたなら

最期まで吐き通してよ

愛してるって聴かせて

偽りでもいいから

私は貴方の操るマリオネットだから
壊れるまでその糸を
離さずに握っていて……”

誰かの身代わり？冗談じゃない。嘘でいいだって？そんな訳ない。
自分が、自分自身が愛されてなきゃ意味がないじゃないか。
そう否定してみせても、正直なところハイドロンは動揺しきって
いた。たかが歌じゃないか。たかが歌詞じゃないか。百万人の為に
歌われた曲が、自分のモノであるかのように聞こえるなんて――馬
鹿げてる。

――私は、貴方のマリオネット……か。

自分もまたゼノヘルドのマリオネットなのかもしれない。嘘でも
いいから愛していると一言貰えたら、自分は幸せなフリくらい出来た
のだろうか――そこまで考えてしまっただけで。違う。違う。
違う。そんな訳がない。自分は父に誉められたくて頑張ってるわけ
じゃ――自分はちゃんと必要とされてる筈で、だから――。

「くそっ……」

イラつきながら、足下の石を蹴っ飛ばした。思い出してしまった。
愛に飢えて餓えて、それでも手に入らなかった幼き日々を。虐待じ
みた“お仕置き”に耐えて流した涙さえ、頬の傷に滲みて痛かった
記憶を。

そうしてそれらを諦めて享受しながら、まだ諦めきれずに父の為
奔走する今を。

「…大丈夫、大丈夫、大丈夫だ」

まるで言い聞かせるかのように呟く。人のいない、廃ビルの中に入る。

「願いが叶えば…俺が叶えて差し上げれば。きっと愛される…そう言って貰える…っ」

かつんかつんと、足音が響く。

「だから僕は」

ハイドロンは立ち止まり――ぐるん、と振り返った。

「なんとしてもブローラーズから…属性エナジーを奪い取る。奴らの希望を根こそぎ奪い取ってやる」

かつん。ハイドロンではない、別の足音がした。それも、二つ。逆光の中、二つの人影が物陰から出てくるのが見えた。どちらも小柄で、しかも片方は少女のようだ。

「やっぱりバレてた」

その少女の方が、ぺろりと舌を出して言う。段々と光に眼が慣れてきた。緑の髪をポニーテールにした彼女は、黒目がちな瞳が大変可愛い。年はせいぜい十四か三だろう。幼く見えるが、その口調はどこか達観したものを感じる。

「だからやめようって言ったのに…ヒロト」

「嘘吐いちゃ駄目。緑川だってノリノリだったじゃない」

「だって刑事ドラマみたいで楽しかったんだもん」

ポニーテールの少女は緑川、もう一人の少年はヒロトというらしい。ヒロトもまた切れ尾の碧眼に赤い髪、白い肌と大変美しい少年だった。随分お似合いな二人組である。ヒロトの方もまだ十四歳くらいのように見えるけれど。

「…何故僕の後を尾けた？」

気の抜けた会話をする二人に、ハイドロンは険しい声を投げる。

「バトルブローラーズの仲間…かい？」

その可能性は高いと踏んでいた。やられる前にこっちから殴り込んでやれ、が信条の空繰弾馬がリーダー。参謀には冷静な忍の末裔・風見駿と、頭脳明晰な歩くコンピューター・丸蔵兆治がつく。連中のバトルの腕はともかく、科学力とズル賢さはハイドロンも認めるところだった。仲間に偵察させるくらいはやりそうだ。年齢も近いのだし。

しかしハイドロンの予想に反して、緑川は肩を竦めた。

「残念だけど。俺達はブローラーズとは無関係だよ。爆丸バトラーでもないし」

「そうそう。ついでに誤解してるっぽいから教えとくけど」
ちよいちよい、とヒロトが緑川を指差す。

「緑川は男だからね？プリンス・ハイドロン」

ハイドロンは目を見開き、次に一步飛びずさってガントレットを構えていた。

緑川が男なのがちょっと残念でびっくり—とそうではなくて！こいつは今。ハイドロンの心を読んだ。いや、仮に単なる勘だっ

たとしても――普通の地球人が自分の名前を知っているとは思えない。ブローラーズの仲間でないなら尚更だ。

「…何者だ。何故僕の名を知っている」

頭の中で警鐘が鳴っている。ポケットの中、ドリアードの爆丸球を握りしめた。こいつらは、普通の人間とは何かが違う。なんだろう――この危険な香りは。

「あー：エイリアンなら知らないか。サッカー日本代表・イナズマジャパン。俺達はそのメンバーなんだけど」

サッカー選手？イナズマジャパン？そういえば地球に来てすぐ読んだスポーツ新聞に、そんな記事が書いてあったような気がする。スポーツにあまり興味は惹かれなかったから流し読みしただけだが――二人の顔は記憶の片隅に引っかかっていた。そういえば写真にあったような。

呑気なものだ。こちらら毎日バトルに明け暮れて、失敗一つが命取りになる生活だというのに。平和な顔でこのうとサッカーなんて、腹が立つ事この上ない。

どうせ普通の家族に普通に愛されて、平々凡々に生きてきたガキどもなんだ。ヒロトの力は気になるが、だからどうという訳でもない。そんな奴らに、興味半分で邪魔されるなんて冗談じゃない。

「その普通のサッカー少年が、何の用かな。僕は忙しいんだけど」

そして平々凡々な奴らに決まっていると見下しながらも、ハイドロンはそれ以外の“何か”を感じていた。こいつらを此処で見過ごしてはならない気がする。背筋がビリビリする――この警戒心がどこから湧いてくるのかも分からないのに。

「…君は俺達を、平凡な幸せしか知らない暢気な奴らと見てびっ
ているようだけど。俺達も俺達で、いろいろあるんだよね」

ヒロトは笑みを消して、ハイドロンの言った。

「だから…：やっとなにに入れた平穩を壊されるような真似されたら
堪らないんだよ。BTシステムって何？どう見たって大量虐殺の兵
器じゃない」

「……！」

もう、黙っている訳にはいかなかった。こいつらはBTシステム
の事まで知ってる。そしてブローラーズと同じ地球人。もし地球の
多くの奴らに余計な情報が伝わったら、どんな弊害が出るかわかっ
たもんじゃない。

BTシステムは通過点なのだ。最終的に父はこの地球の掌握をも
目論んでいる。邪魔な芽は芽のうちに摘んでおかねばなるまい。

「…ガントレット、チャージオン」

ハイドロンの決断は早かった。腕に嵌めたガントレットを起動し、
バトルの体制を整える。

「ゲートカードセット！」

一枚のカードを投げる。中央に投げられたカードを中心にオレン
ジ色の四角い光が地面に広がった。バトル中、敵味方が交互に地面
に仕掛ける切り札。その中身は、オープンされるまで分からない。

「爆丸シュート！」

同じモーションで、ポケットの中の爆丸球を投げた。 オレンジ

の小さな鉄球は地面を転がると、まるで卵から雛が孵るようにパカリと割れる。

「ポップアウト！サブテラ・ドリアド！！」

それが巨大化し、モンスター形の形をとった。橙色の巨人・ドリアドの横に立ち、ハイドロンは二人の少年を睨む。

「爆丸バトラーで無かろうと、構うものか」

邪魔する者は全て消し去る。非道と罵られようと構わない。何も変わらない。今までも、これから。

最期の嘘と、誰かの愛と【中編2】

自分達と敵対するバトルブローラーズ。当初ハイドロンの目的はその手がかりを探り出すことにあった。

今は違う。目の前の奴らを消し去り、口を封じる。ブローラーズの仲間でないにも関わらずここまでの情報を知られているのであれば、それもそれで危険。あちらも、大量破壊兵器を作ろうとしているハイドロンを逃がすつもりはないようだし、どっちにしろここでケリをつけなければならぬだろう。

「俺達爆丸バトラーじゃないのになあ」

ハイドロンが出現させたメカ爆丸、サブテラ・ドリアドを見上げて緑川が言う。まるで忍者のような風体の鋼の巨人を前にしても、彼らはさほど怯む様子がない。

そればかりか、皮肉げに笑っている。

「こういうのって卑怯って言うんじゃない、ハイドロンとやら」

「残念ながらこれが僕らの戦闘手段なんですね。爆丸を持ってなかった事、あの世で悔やみな！ドリアド！！」

ハイドロンの声に呼応し、ドリアドが拳を打ち下ろした。ついさっきまで緑川とヒロトが立っていた場所がひび割れ、大きく抉れる。

「生身で爆丸とリアルファイトとか！鬼！無茶振り！！」

「その割に楽しそうだよね緑川」

「誰かさんのお陰で無茶振りには慣れてるもんで！！」

とっさに後ろに大きく飛んだ二人は、わーわーと騒いでいる。見事な反応速度だ。サッカーをやっていたというだけあって、大した運動能力である。でも。

爆丸に人間が勝てただなんて話は聞いた事もない。増してやドリ

アードは、生態爆丸を研究して作り出された、強化型メカ爆丸だ。普通の爆丸バトルだって余裕で勝てるのに、人間たった二人倒せないわけがない。

「アビリティ発動！ムラサメブレード！！」

爆丸は、バトラーがガントレットにアビリティカードをセットする事で特殊能力を発動する事が出来る。基本バトルとは、このアビリティとゲートカード、場合によってはバトルギアなどの装備をいかに使うかが鍵となるのだ。

ドリアードが背中に隠していた剣を抜く。するりと抜けたそれは、ドリアードの土属性色（サブテラ、とは土属性を意味する）のオレンジ色に発光している。

「そいつらを八つ裂きにしろ！」

ドリアードが吠え、緑川とヒロトに向かっていく。わー！と大袈裟な悲鳴を上げてみせる緑川に、ヒロトが肩を竦めた。

「騒いでたって解決にならないでしょ。とっとと倒しておしまいにするよ」

そのまま――なんと自らドリアードに向かってきたではないか。その手になんの武器もない。空手で、剣を持った巨大な敵に立ち向かおうというのか。

爆丸はサイズからして段違いだ。ヒロトなど、ドリアードの足首程度までしかない小人のようなものだというのに。

「真・サザンクロスカット…！」

ヒロトの手に、紫色の光が集まった。それを振り抜きながら、ドリアードのムラサメブレードをひらりかわすと、一気に加速してドリアードを抜き去る。

一瞬、時が止まったかのような錯覚を覚えた。次の瞬間ドリアードの足下から十字の爆発が起きる。

「マジっ…かよ！」

さすがのハイドロンも愕然とした。思いのほかダメージが大きかったのか、ドリアードが膝をつく。馬鹿な、としか言いようがない。あんな力を持つ生身の人間がいるなんて聞いてない！

「まだまだっ！」

はっとした先。力を溜めている緑川の姿があった。その足元には黒いサッカーボールが。

「アストロブレイク・V3!!」

ギュルギュル、という音が聞こえてきそうだ。緑川の足下のボールに向けて、圧縮されたオーラが集まっていく。まるでブラックホールだ。

あれを食らったらドリアードとてただでは済むまいードリアードがなければ自分は丸腰。戦う手段がないわけではないが、こんなトンデモな能力者達相手に渡り合える筈がない。ハイドロンは冷や汗を掻いて、アビリティカードをセットした。

「あ…アビリティ発動！マルスシールド!!」

アビリティ発動を受け、ドリアードが防御態勢に入った。丸い橙

の光がドリアードを覆う。バリアが張られた直後、もはやシュートと呼ぶのもおこがましい強烈な一撃が、ドリアードへと放たれた。オーラとオーラがぶつかり合い、激しくスパークする。ドリアードはなんとか持ちこたえていたが、バリアに力を注いでる分足の踏ん張りがきかないのだろう。じりじりと後退し、やがて吹っ飛ばされた。その体はビルの壁に激突し、その向こうまで突き抜ける。

「ぐあっ…！」

ビル全体が軋みを上げた。爆風と飛んできた様々な破片が、ハイドロンを傷つける。ガラス片が腕を掠め、血が肘まで伝った。両腕でガードしなければ顔や首にも傷を負っていただろう。

幸い、まだ掠り傷レベルだ。ハイドロンは痛みに顔を歪めながらも、ドリアードが吹っ飛ばされたビルの外へ走る。此処が一階だったのが幸いと言うべきか。

「緑川：ちよっと派手にやりすぎじゃないかなあ」

「ウルサイな！外が空き地なの知ってたもん！あと爆丸バトル中はフィールドが外の空間から隔絶されるから、すぐ騒ぎになる事はない：でしょ？」

「まあそこまで知ってたなら問題ないけどさ」

ドリアードに駆け寄ってすぐ、後ろから歩いてくる話し声があった。ハイドロンはキッと彼らを睨みすぎる。ドリアードのダメージは着々と蓄積されている。所詮機械の爆丸だが、こうも一方的なのは面白くない。

「…サッカー選手、だって？とんだ大嘘つきだね君達は。ただのスポーツマンがこんな特殊能力持つてる訳ないじゃない」

ハイドロンが言うと二人は顔を見合わせ――何故か揃って微妙な顔をした。何だ。自分はそんなおかしな事を言っただろうか。

「あー：そっかアンタ異世界の人間だっけ。サッカーの試合、見た事ないの？」

「は？」

「どうでもいいけどさ。機会があったら見てみてよ。ビックリするから」

緑川は頭を掻きながら、苦笑いをする。

「ま。アンタが生きて帰れたら、の話だけどね？爆丸バトラーって、爆丸に全部任せっきりで自分は戦わないの？なんだかなあって感じ」

ぞくり、と背中に冷たいものが走る。こいつらは自分を殺す気か。あるいは捕まえて尋問する気か。どっちも冗談じゃない。

――此処は一気にたたみかけてケリをつける：！長引かせたらどんな不利になるだけだ。

「お前達バケモノと同じ基準で考えるな：！僕等は爆丸に頼るしか戦う術なんてないんだから：！！！」

自分でそう言ってしまい、ハイドロンは自分の言葉に傷ついた。爆丸がなければ何もできない。何も、ない。その事実に啞然とする。自分達は爆丸の恩恵を受けて戦争し、侵略し、何かを壊して作る。だが父はBTシステムを使ってワンダーレボリユーションの爆丸を全て死滅させ、地球もヴェスターもその他異世界も皆手中に収めるという。その仮定で邪魔する者、要らなくなった者を悉く切り捨てながら。しかしそうなった時、父の世界に残るモノはあるんだろうか。

そう――要らなくなった者。
もしかしたら、いずれ自分も？

一一駄目だ、駄目だ、駄目！！

考えるな。考えるな考えるな考えるな考えるな考えるな
るなかんがえるなかんがえるなかんがえるなカンガエルナカンガエ
ルナカンガエルナ！！

自分はちゃんと。

愛されて。

「ゲートカード・オープン！」

悲鳴のように、叫んだ。

「サブテラ・バトル・オーディエンス!!」

雑草と廃材だらけの空き地が、砂と石の荒涼とした大地に変わつた。サブテラ・バトル・オーディエンス。サブテラ属性専用のゲートカードだ。オーブンすると土属性爆丸のパワーを上げると同時に、力を発揮できる最適のフィールドへと作りかえる。

しかもそれだけでは、ない。

「!消えた…!？」

緑川が驚きの声を上げる。ドリアードの姿がまるで陽炎のように揺らめき、消えてしまったせいだ。

土属性フィールドは、ドリアードの庭も同然。その空間に溶け込み、姿を隠す事が出来るのだ。いくら彼らが強力な必殺技を持つていようと、当たらなければ意味がない。

「まさか生身の人間相手に、このカードまで使う羽目になるとは思わなかったよ」

本来ならばゲートカードは、対戦者が交互にセットする権利を得る。しかし今回は爆丸バトルであってバトルに非ず。なんせあちらは爆丸バトラーですらないのだ。つまりゲートカードはハイドロンの専売特許という事になる。

「やれ、ドリアード！」

ハイドロンの声と共に、緑川が悲鳴を上げて吹っ飛んだ。ドリアードの不意打ちを食らったのだ。姿が見えなければ避けようもあるまい。次にはヒロトがドリアードの拳を食らって転がった。さっきまでの展開が嘘のよう。いい気味である。

自分の邪魔をする方が悪い。可哀想だと思う気持ちがないわけでもないが、これもまた戦いの真理というもの。せめてなぶりものにはせず、一撃の元終わらせてやろう。

「アビリティ発動…！」

ハイドロンには、ドリアードの姿が見えている。アビリティの力を受け、ドリアードの光剣が輝きを増し、リーチを伸ばした。

「裂・ライトニング！」

威力を増した剣を振り回し、ドリアードが走り出す。まずはヒロト、お前から始末してやる。まあ向こうはねらわれてる様すら分からないのだろうが。

立ち上がったヒロトはハイドロンを見て一言言った。

「姿の見えない敵への攻略法、案外あるもんだよ」

「何？」

「例えば。気配やオーラといった不可視のものを感知取る。これは俺達みたいに戦闘訓練をつんでなきゃ難しい」

「戦闘訓練だって？」

やはりコイツ、ただのサッカー選手ではなかったのか。ではまさかその気配でドリアードの位置が分かるとでも？

「次に。ドリアード自体の姿は消せても、挟れる地面や壁は見える。それらが発生した位置からドリアードのスピードを計算し、所在を予測する事も可能」

「なっ…」

「さらに。ドリアードの姿はアビリティ発動者の君には見えてるんだろ？なら君の視線を辿った先にドリアードはいるよねえ」

まさか、と思った時。ヒロトは見えない筈のドリアードの攻撃をかわしていた。

「でも一番簡単なのは」

ヒロトの周りに、赤いオーラが集まった。そんな馬鹿な。ハイドロンは声に出して叫んでいた。こいつらは人間の筈だ。どんなに訓練を積んでいたって、人間がメカ爆丸にかなう訳が。

「この状況を作り出している装置……この場合はゲートカードを破壊する事！いくよ…シザーズボム！！」

ヒロトの足元から爆発が起こった。彼は華麗に宙を舞い着地する。バリバリと硝子が割れる音がした。

いや違う。割れたのは硝子じゃない——地面に設置していた、ゲートカードだ。

「俺達の方が一枚上手だったね」

ヒロトが妖艶な笑みを浮かべる。

「さあ次はどうするのかな？」

ハイドロンは戦慄した。もう認める他ない。

自分は怖れている。爆丸バトラーでもなんでもない――このサツカー少年達を。

最期の嘘と、誰かの愛と【後編】

超次元サッカープレイヤーをナメんなよ、といったところか。爆発に吹っ飛ばされるわ氷づけにされるわ焔に巻かれるわは日常茶飯事なのだ。ましてやヒロトと緑川は元エイリア学園である。最終的には戦場に駆り出される為にソルジャー訓練を受けていたわけで。この程度の修羅場をくぐり抜けるなど造作もない事なのだ。

ついでに言えば。エイリア石の効果がなくなったとはいえ、こちらとら50キロ超のサッカーボールで、五階建ての校舎を破壊して回っていたのである。いくら爆丸といえモンスター一体相手にするくらい訳もない。

――爆丸のルールは一応把握してる。

ヒロトが実情を知ったのは、エイリア学園訓練も爆丸騒動もひとしきり落ち着いた頃だったが。いつか爆丸バトラーを敵に戦う日が来るかもしれないという事で、ある程度の知識は与えられていたのである。

爆丸は一定以上のダメージを受けると、球になる事でそれを強制回復できるが次にシュートできるまで多少時間を要す事。

連中の切り札の一つであるゲートカードは、オープン&セットされている間は新たなカードをセットできない。また、破壊されて暫くの間もセットは不可能。

――あとは爆丸の装備であるバトルギア、ナノパック、そして爆丸とバトラーがエネルギーを放出して召喚するメクトガン…。

知識として知りうる限りの、爆丸バトラーの切り札を挙げてみる。しかし今それらが出てくるとは思えない。

何故なら相手はメカ爆丸。バトルギアは生体爆丸の遺伝子データから作られるので、遺伝子のないメカ爆丸では生成自体が不可能。ナノパックはまだ電子データ上でしか応用可能ではない筈だし、メクトガンもやはり生成爆丸でなければ召喚不可能。

結論。ハイドロンに残された手は、ドリアードのアビリティのみ。そのアビリティカードが尽きたら奴は完全に手詰まりだ。

――まあそれまで待ってやる気もないけどね。

アビリティを封じるスキルがこちらにあれば話は早かったが。残念ながら爆丸バトラーでない自分達には、アビリティを無効果する手段までではない。地面に直接設置されるゲートカードとは違うのだ。

「：どこまでも人をコケにしやがって……！ゴミくずどもが！！」

爽やかでおとなしそうに見えたハイドロンが、罵りの言葉を吐いてこちらを睨む。

「こんな世界、守ったところで何になるんだ！人は結局自分勝手だ：自分の事しか考えてねえクズばっかなんだよ！当たり前のように愛されて、平々凡々生きてる奴と：どんなに頑張っても光に触る事さえ出来ない奴と！！そんな格差で溢れた醜い世界なんだ：っ！！」

ハイドロンの言葉と共に、ヒロトの中へ流れこんでくるビジョン。それは綺麗に飾られた寝室で、いかにも王族といった姿の男に殴り飛ばされる少年の姿だった。少年は金色の髪をしている。まだ幼い、ハイドロンだと分かった。

ハイドロンの唇が動く。ごめんなさい。ごめんなさい、と。だが男は無情に、部下へと命じた。部下が引っ張ってきたのは数体のロボット。それらが少年を羽交い締めにして、身体に鋭い電流を流し

始めた。

幼いハイドロンが泣き叫ぶ。痛い。痛い。やめてやめて、お父様——と。

短い映像だったが、ヒロトが理解するには充分だった。ハイドロンが何に絶望し、何に怒り、何を願って世界を壊そうとしているのかを。

「お前らがそうやって頑張ったところで！誰も誉めてやってくれない……愛してくれない。どんなにボロボロになるまで努力したって、強大な力の前には全てが無力だ！！」

心を鎖で縛られた、僕らは操り人形。

私は父<アナタ>の装飾品。

もっと輝け、輝け、壊れて朽ちるまで。

「結局世界にボロボロに使われて、捨てられるのがオチなんだよ！だったらさっさと諦めちまえ！！無駄な努力なんかしないでさあ……！！」

誰の為に生きてるの？

自分の為だと言いたいの、言えなくて。

もう何もかも嫌になる前に

誰か愛して 僕を愛して。

「君は……」

現実世界の、ハイドロンの心の叫びが。ヒロトにはとても他人事だと思えなかった。隣の緑川が泣き出しそうな顔でハイドロンを見つめている。きっと自分も、同じ顔をしているのだろう。

「君は父さんに……愛されたかったんだね。だからボロボロに頑張っ

て頑張っ…でも認めて貰えなくて。痛めつけられるばかりで。そんな現実、絶望した」

「なっ…!!」

「俺には人の心が見える。勝手に覗いて、ごめんね」

驚愕するハイドロンに、ヒロトはなんとか微笑んでみせた。でも、上手に笑えたかは分からない。

「俺達ね。…家族、いないんだ。俺は物心ついた時にはもう捨て子だったし、緑川は虐待されて施設に来た子供だった」

声が震えた。あの頃を思い出していた。

エイリア学園で、過酷な生体実験と訓練を繰り返し、誰もが傷だらけになりながらひたすらに――父の愛を求めていた、あの頃を。

「施設の園長先生が優しい人でさ。その人を父さんって呼んでみんなが慕ってた。その父さんは段々と道を踏み外していったんだけど…愛される為なら僕等は何でもやったし何にも耐えたよ。生体実験のモルモットにされる事も…人を殺す事も」

寂しい子供達の成れの果て。

届かない向こうの色、恋い焦がれて。

重なる声と声を混ぜ合わせて、頭を搔き走る日々。

「…頑張っ頑張っ。それでも何かを変える事は出来なかった。当たり前前に家族がいて愛されて…そんな世界の子供達を、恨んだりもした」

問題ない、大丈夫。まだ頑張れる。

そう呟いて、言葉はまた殺された。

もうどうだっていい、間違いだって犯してしまえ。

それ以外に、生きていく方法なんてありはしないんだから。

「こんな世界、壊れてしまえ。みんなみんな呪われてしまえ。滅んでしまえ。救いなんかありはしない」

もう一回。モウイツカイ。

僕らは今日も転がって転がり落ちる。

子供達は言う。繰り返す。言葉に意味を奏でながら。

「もういいかい？」と尋ねても、「まだまだ駄目」と責められるだけ。

まだまだ先は見えなくて、口を塞ぐ。

この息が止まってしまえば、終われるのかと。

「でもね、いたんだよ」

そんな時。自分達を救ってくれたのは、たった一人の少年だった。

「救世主は、いたんだ。世界はまだ僕らを見捨ててはいなかった」

誰の為に生きればいいのか？ 問いかけたヒロトに、円堂は教えてくれた。答えは目の前にある、と。

お前の未来を誰かに奪う権利なんてない。だから。

もう、何もかも嫌になる前に鎖の鍵を解いて抜け出そう。自分達が手伝うから、と。

「…世界は残酷かもしれない。でも諦めた時、僕らは本当に絶望に負けてしまう」

呆然と佇むハイドロンに、ヒロトは手を差し出した。

「君が自分で風を起こそうとするなら：僕達は力になるよ。大した事は出来ないかもしれないけど：でも」

一人である事と、独りである事は違うから。

「……地球人って、どいつもこいつもお人好しだね」

ハイドロンは失笑して、柔らかにヒロトの手を払った。

「悪いけど。無力なくせに嘘ばかり吐く奴らはごまんといる。僕には君のように心を読む力なんてないから：君の言葉が真実か否かは分からない」

否定する内容だったが。さつきよりも穏やかで優しい口調だった。何もかも響いたわけではないかもしれないが、何かは届いたのかもしれない。そう思わせる、声だった。

「君に力はあるのか？全ての悲しい事を：悪い夢を終わらせる力があるなら：見せてみなよ。これで、最後だ」

ハイドロンがガントレットを構える。ヒロトは緑川を振り返った。緑川は目を潤ませてそこに立っている。彼にはさっきのビジョンは見えなかっただろうに一人の心に敏感な、優しい子だ。

そして誰かの為に涙を流せる者だけが。きっと誰かを救う事も出来るのだろう。

「緑川。あれ、行くよ。久しぶりだけどね」

「：うん」

誰かの優しさに救われた自分達だから。一度は闇に堕ちた自分達だから。

出来る事もあると、信じたい。

「ダブルアビリティ発動！フュージョンアビリティ、撃・ラストデビル！！翔・ドラゴンフライ！！」

「ユニバースブラスト・V3！！」

ドリアードの剣が紫色に光輝き。その巨体が凄まじいジャンプ力で空へと舞い上がった。

同時に、ヒロトと緑川は黒いサッカーボールを、二人同時に蹴り上げる。天に射止められたボールは宇宙の力を放出し、凄まじいエナジーが収束される。

「行けーッ！！」

ドリアードの一撃と必殺シュートが、空中でぶつかり合った。大爆発。粉塵の中、ドリアードがオレンジ色に輝き、球に戻ったのが見えた。しかしヒロトと緑川の身体も吹き飛ばされる。

地面に叩きつけられてはたまらない。なんとか体制を整えて、着地した。緑川は、と見ると、彼もどうやら無事だった様子。着地した後によろめいて、尻餅をついてはいたが。

「何も見えないよー！俺達ってば勝ったの？」

キョロキョロする緑川。砂塵が段々と晴れてきて、空き地の全容が見えてくる。ヒロトは目を見開いた。ハイドロンの姿がない。

「うわお、逃げられちゃったバージョン？」

「…みたいだね」

まあ予想出来なかった展開ではない。自分達もいっぱいだったし、結局勝負はつかなかったも同然だ。仕方ない事だが、少し残念ではある。

自分達は結局、何かを変えられたのだろうか。それでもただ無意味なだけだったのだろうか。次彼に逢う手段はない。その結果を、知る術も、ない。

「ねえヒロト…さっきの彼って…」

「……うん」

緑川の問いに、ヒロトは遠い眼で答えた。

「あの頃の俺達と、同じ眼をしてたよ」

世界は悲しい。どんな場所にいても、どんな環境であっても、報われない子供は溢れてやまない。その反面、幸せを幸せと気付く事もなく笑って過ごせる子供もいる。平等なんてない。世界には、理不尽な事だらけだ。

でも。そこから救われた時、人は空の青さを知る。世界が美しいと心から思えたら、それ以上に幸福な事があるだろうか。

「努力は必ず報われるなんて言えないけどね」

自らの手をじっと見る。汚れたこの手で奪ってきたもの。失ったもの。その全てが自分自身と、今なら胸を張って言える。

円堂が、今の仲間達が、教えてくれた。

「願ひ続ければ…可能性の道は繋がる。諦めない事で奇跡を起こしてきた円堂君達のように」

その後。ヒロトと緑川がハイドロンに再会する事はあったが。後にブローラーズと関わる機会があり、彼らからハイドロンの末路を聞かされる事となる。異世界で彼が父親と共に、爆死したという事を。

彼は最期に、どんな景色を見たのだろうか。その人生に幸せな瞬間はあったのだろうか。

生まれ変わったなら、もっと近い場所で出会いたい。ヒロトは空に、祈る。そうしたら今度こそ、本当の友達になりたい。

円堂が自分達を、救ってくれたように。

零還し、幸搜し【長編試し読み】（前書き）

いつか書きたい、と思ってるイナズマイレブンの長編ホラーの試し書きになります。零パロをやろうとしたら全く別物になった経緯が

（笑）

時期は三期、日本代表メンバー決定直後あたり。みんなの前世話を絡めたりまたしても性別転換ネタありになったりなドス暗い話になる予定。まだ触りだけです。よろしければどうぞ。

零還し、幸捜し【長編試し読み】

一一平成二十二年、八月。

暑いぞ暑いぞ、今年は猛暑だ！――な―んてキャッチコピーを、毎年のように聞いている気はするのだが。

「あっちいゝ…」

円堂守は、船の上で思い切り伸びていた。

暑い。ものすごく暑い。猛暑だなんて、今年“は”ではなく今年“も”だとは思うけど。単純に今日は昨日と比べて、暑さがハンパないと感じる。人間、結局は前日比で暑さ寒さを計っているのだ。

「天気予報見た？キャプテン」

パタパタと団扇で仰ぎながら、吹雪が苦笑いする。その隣では木暮と綱海が折り重なってぐったりしている。正直、見ているだけで暑苦しい光景だ。沖縄育ちの綱海ですら、今日は暑いと感じるらしい。

「この辺りの今日の最高気温、三十八度だってさ。午後から湿度も上がってもっと暑くなるらしいよ。お空はピカ晴れ、雨の降る気配なし」

「うへえ…」

「東京は三十六度だ。あっちにいた方がまだマシだったな」

最後のは鬼道の言葉だ。彼はgoogルマントという出で立ちにも関わらず、涼しげに文庫本を捲っている。一体何の本だろう。それにしても暑くないのか。

「何でよりによって今日選んじやったかなあ俺達…」

緑川は甲板でペットボトルをガブ飲みしている。その横で立向居も苦笑いしてポカリを取り出す。

「綱海さんが“ノリ”で決めちゃった日取りですから。天気なんて一週間も前に分かるもんでもないし、仕方ないですよ」

「そりゃそうなんだけど…」

会話が途切れると、クルーザーのエンジン音と波音、カモメの鳴き声が耳に届く。音だけでも真夏の海らしさを演出している。暑さというだりながらも、綱海がご機嫌なのはその為だろう。

円堂は船縁によりかかって、辺りを見回す。船には年老いた船長を覗けば、円堂を含め十二人が乗っていた。綱海、立向居、鬼道、豪炎寺、木暮、緑川、ヒロト、吹雪、虎丸。それに佐久間と源田である。自分達は今、FFI本戦の舞台となる場所、ライオコット島に向かっていた。

きっかけは、世界大会を行う場所が話題に上った事である。自分達は先日やっ和日本代表決定戦を終えたばかり。予選も勝ち上がってないのに気が早すぎるとは思ったが。

メンバーを決定したばかりで、まだまだお互いをよく知らない。イナズマキャラバンメンバーはともかく、虎丸のような新入りにも、一日でも早く馴染んで欲しいというのが円堂の本音だ。

だから、提案してみたのである。せっかくならみんなで、ライオコット島を観光しに行ってみればいいじゃないか、と。つまり、皆の親睦を深めるイベントのようなものだった。

とはいっても、イナズマジヤパンメンバーの中にはどうしても都合が合わなかったり体調を崩した者もいる。

土方は急遽家庭の事情で沖縄にすつとんでいったし、栗松は目金と一緒にイベントに行く約束をしていたとかで無理だった。

また、風丸はタイミング悪く風邪をひき、壁山は食べ過ぎで倒れて欠席。元より協調性に乏しい不動と鳶鷹は、一応誘ったものの断られてしまった。

逆に、選考に選ばなかったが一緒に行きたいと言いついたのが源田と佐久間である。なんでも二人は昔、ライオコット島に行った事があるのだという。

「といっても別に、一緒に行ったわけじゃないんだけどな。俺は七歳、佐久間は十歳」

七本、十本。源田は指で年を表す。

「自然が多くていい場所だぞ。確か今、人は殆ど住んでない筈だけどな。だからやれスタジアムやら街やらを作るって計画が出てても、反対意見が少なかったんだらうけど」

ライオコット島の領土がどの国に属するかは、実のところ曖昧になっている。元は日本領で日本人が多く住んでいたのだが、戦争中に一度徴収されてからはあやふやで、日本を始めロシアや中国、韓国、はたまたイギリスなどの国々が今なお権利主張しているらしい。あまりにややこしい状態の為、現在は形式上国連が領土を預かっているとかいないとか。残念ながら円堂の足りない脳みそで複雑な領土問題が理解できる筈もなかったのだけど。

まあ、とにかく。そんな面倒な場所をFFIの会場に選ぶとは、サッカー協会も思い切ったことをする。しかも、小さな観光施設があるだけの、森林だらけの未開発の土地をだ。最終的にはスタジアムのみならず、本戦出場したチームの母国をイメージした町並みを作るというのだからとんでもない話である。

「暑さがマシになるような話、してやろうか」

ニヤリ、と笑う鬼道。なんだか嫌な予感がする。怪談でも始める気か。それもとびつきり怖いヤツを。

「ライオコット島が世界大会の会場に決まったのは二年も前のことだ。なのに、スタジアムの工事などは中途半端なところで頓挫している。…何でだと思う？」

この流れだとアレだ、面倒な事故とか事件が起きただろう。円堂が言うど鬼道は、正解、と言って笑みを深くした。

「調査員に工事関係者。行方不明者が続出したんだ。それも原因不明。確かに自然が多くて迷いやすい場所もあるが…本島の広さなんてたかが知れてるし、死体も出ないなんておかしいだろ？」

ごくり、と誰かが唾を飲む音。もしかしたら円堂自身のものだったかもしれない。

それだけ、声を潜めた鬼道の語りには、静かな凄みがあった。

「その人達はみんな、神隠しに遭った、なんて言われ始めた。しかも消えた時期が八月前後に集中しているらしい」

「……マジで？」

「ああ、大マジだ」

誰だそんな時期に企画立てたヤツ、とみんなの視線が一人に集中する。みんなに見られた綱海はわざとらしく笑って明後日の方向を見た。

「そう言われるようになったのも、理由があるんだ。ライオコット島は和名を“らいおこつと雷尾骨渡島”という。骨を渡す島…この世ならざる者

が訪れて去る為の境界が、ライオコットの本島にあるとされていたんだな」

雷の尾に骨を渡すと書いて“らいおこつと”島。いかにもアテ字な名前だが、一応由来はあるらしい。

「島には古くから言い伝えがあった。大昔から、ライオコット島に天使と悪魔が住んでいて覇権を争っている…と。その争いは千年に一度：“千年祭”と呼ばれる時期に転機を迎え、魔王復活を目論む悪魔側と復活を阻止したい天使の戦いは熾烈を極めるそうだ」

「神隠しから急に話が洋風になったね」

ヒロトが実に冷静にツツコミを入れる。確かに。神隠しといったら和風ホラーの定番で、天使やら悪魔やらはキリスト教の領域ではあるまいか。

「話は最後まで聞け。…魔王は千年祭の日に復活するとされているが、それは島を覆う魔力が弱くなるせいだ。つまり千年に一度でなくとも、島の境界が弱くなれば復活の可能性が出てくる」

鬼道は持っていた文庫本を開き、中を見せてくれた。驚いたことにそれは小説ではなく、ライオコット島についての逸話などをまとめた考古学書だった。

写真が乗っている。まるで神社のような社の中に、聖母によく似た石像が奉られている。

――あれ？その石像…。

長い月日をえたのだろう。苔を生やし風化しかけたその様は原型を留めていないが。

円堂は首を傾げる。どうしてだろう。石像が、誰かによく似ている気がする。

「島の結界を守る為に、住人達は宗教的な儀式を行っていた形跡があるらしい。が、その宗教について詳しいことは書物が一切残されていないんだ。元々島は戦前から、外界との交流が殆どなかったらしく…最近になってからだな、島に人が出入りするようになったのは」

「へえ…」

なんとなくだが、円堂も理解した。和洋折衷したような昔話だが、地域の人間には信じている者も多いのだろう。閉鎖的で、特殊な宗教を信仰していたと思しき島なら尚更だ。

戦後何十年も経ってから禁が解かれ、人々が足を踏み入れるようになった場所。天使と悪魔が住まうとされる、聖域。なんだかミステリアスだ。

ただ気がかりなのは、そんな曰く付きの場所で謎の行方不明者が相次いでおり。自分達がまさしくそこに向かおうとしている事なのだが。

「鬼道…知ってたならもっと早くストップかけてくれよ。…ぶっちゃけ怖いんだけど」

綱海がやや青ざめて眉を寄せる。彼はけしてホラーやら怪談やらに弱い方ではないのだが、それでも限度はあるというもの。正直、円堂も同じ気持ちだ。

そんな自分達に鬼道はため息をついて言った。

「残念ながらこの本を見つけたのが昨日の夕方だ。それに、別に八月に島を訪れた人間全員がいなくなっているわけでもない。俺達は日帰りだしな」

「そ、そうですね…！」

「立向居、顔が青いぞー」

「やかましいですよ綱海さん」

「…そして怖い」

マジ顔で返した立向居の目はまったく笑っていない。そら黒向井降臨だあと慌てて佐久間の後ろに隠れる綱海。うっかり盾にされた佐久間は苦笑している。

「スタジアムの工事が中断されたのは、まあそんな不気味な事が起きて嫌になった業者が仕事を降りちゃって、そのままになってるせい…とか？」

「その通りだ佐久間」

パタン、と鬼道が本を閉じる音がやけに大きく響いた。

「俺は幽霊や天使や悪魔や…その辺りに関して否定も肯定もしない。ただ何か原因があるなら、解明しないと困った事になる。あながち他人事でもないぞ」

確かに、と円堂はうなだれた。

この際自分達が、FFIの予選を突破出来るかどうかは置いておくことにして。サッカーを嗜む者としては、大会が順調に行われるのが望ましいのは間違いない。

もしこのまま工事が中断されたままだと、予選が終了しても本戦を始める場所がなくなってしまう。今から新しい会場を探せたとしても、相当準備に時間がかかるのは目に見えている。

あと三ヶ月。リミット的にはギリギリな筈だ。協会はどうか対策を練るつもりなのだろう。

「監督には、スタジアムの様子とかだけ見てすぐ帰ってこいって言われてるけど…」

久遠監督は用事があるらしく、今回は一緒についてきていない。まあ、外泊ならともかく、半日で島を見て帰って来るなら問題ないとの判断だろう。

余計な事をすれば雷が落ちるのは明白、だが。

「ちょっとだけ…時間使うくらいならいいよな？」

「そう言うと思ったよ」

緑川が肩を竦める。まあ仕方ないか、といった様子だ。表立って誰も口にしないが、此処にいるメンバーの殆どはエイリアの一件もあり相当腕っぷしに自信がある。多少は何かあってもなんとかなるだろうと思っていた。

「もうすぐ着くみたいですよ、皆さん」

船室の方から、虎丸がひょっこり顔を出した。

「あれが、ライオコット島…」

目の前には、深い緑の鎧を纏った島が、まるで山のように聳え立っていた。潮風がごうごうと吠えている。波が打ちつける岩壁にはぽっかりと洞窟が口を開けている。

——なんか…。

何故だろう。とても壮大で美しい島だというのに。

自分達は歓迎されていない。島に喜ばれていない。そんな風に、感じてしまうのは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5771u/>

鬼の子達は挽歌を謡う。【イナズマイレブン・オムニバス】

2011年10月11日01時53分発行